黎明のフェアリーゼ

いろは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黎明のフェアリーゼ

【Ｎコード】
Ｎ３０２８Ｉ

【作者名】
いろは

【あらすじ】
ごく普通の高校生、御子柴龍は肝試しのさなか異世界へ飛ばされてしまう。その先で見目麗しい王女フェアリーゼと知り合い、ひょんな事から二人で世界を巡る冒険に出ることに。魔法が乱舞するバトルと軽快なテンポで送る異世界ファンタジー！（※最強系）（更新頻度をちょっと落とします）

第0話：転移

「ねえ、本当に行くの？」

小牧奈美（こまき なみ）がビクビクしながら言った。栗色の髪を短いツインテールに結んだ童顔の少女で、学年の男子からの人気も高い。服装は水色のフリフリが付いたブラウス＆ミニスカートで、黒いオーバーニーソックスを履いている。

今、俺たちは町はずれにあるとある廃病院の門のあたりに立っていた。俺、御子柴龍（みこしば りゅう）と奈美、他に二ノ宮理子（にのみや りこ）と坂本謙也（さかもと けんや）の四人だ。高校の部活が一緒というのが原因で、こんな薄気味悪い場所に来させられていた。まぁ、華があるだけマシか。

時刻は夜の9時を回った頃で、交通量の少ないこの辺りは不気味なほどに静まりかえっていた。カエルの鳴き声すら聞こえない。病院の敷地内は草が生い茂り、建物は壁面がぽろぽろと壊れ、灰色にくすんでいるようだ。

「でも、行かないと部員として認めてもらえないのでしょう？」

理子はクラスでも有名な才女で、成績は学年一桁を常にキープしているし、他にもピアノやテニスなんかも全国レベルの実力を持っている。容姿も艶やかなロングの黒髪に美術品のような顔立ち、理想的なプロポーションと非の打ち所が無い。しかしどことなく冷たい印象を与えるせいもあってか、男子からの人気は奈美ほどは無い。ちなみに、理子は藍色のカーディガンに白のロングスカートを身につけている。

「なに、心配すんなって。霊なんざいやしねーよ」

謙也はとにかく虫が好かない奴で、ことあるごとに俺と対立しているのだ。こいつとは小学校からの付き合いで、好きな女の子を巡って喧嘩になったり、果ては給食のプリンの余りをどっちが取るかで殴り合いになったりした。喧嘩するほど仲がよいとは言うが、こいつに関してはモグラが空を飛ぶよりもあり得ないと言い切れる。部活だって、奈美が吹奏楽部にするからという理由でくっついてきたのだ。それが余計に腹が立つ。服装は黒のジャケットに黒のパンツと、ナルシストかおめーわと突っ込みたくなる格好だ。

「お前の凶悪なツラにびびって、霊も逃げ出すだろうよ」

俺が謙也にちょっかいを出す。

「……あん？　てめえ、喧嘩売ってんのか？」

「事実を言ったまでだが。何むきになっちゃってんだ？　この脳筋」

「どうやら一発ぶっ飛ばされないとわかんねえらしいな」

俺と謙也が睨み合う。一触即発の空気だ。

「あーもう、こんな時まで、やめようよ！」

仲裁に入ったのは奈美だった。

「まったく、動物園の猿じゃないんだから」

と、キツイ一言をぶっ刺したのは理子。ちょっとまて、それじゃ俺まで猿みたいじゃないか。お猿さんなのは謙也だけだ、謙也だけ。

謙也は奈美に言われたのがちょっとこたえたのか、俺の方を睨みつつも拳を治めた。俺はそんな謙也を見て、ベロベロバーの仕草をする。

「御子柴くん！」

奈美が怒った口調で言った。

「さ、下らないことやってないで、さっさと終わらせて帰りましょ。気味が悪いわ」

目的は、廃病院の手術室の写真を撮って帰ることだ。何でそんなことをしなきゃならないのかというと、早い話が肝試しなのだ。我が吹奏楽部では新入生の通過儀礼になっており、なんでも「極限状況下でも平静を保つ訓練」という名目があるのだそうな。その実、単に上級生が反応見て楽しんでるだけなんじゃねーのかと言いたくもなるが、一年坊主に逆らう力などあるはずもない。畜生。

まあ、俺はいい。曲がりなりにも男だからこういうことには多少の耐性がある。気に入らないが、謙也も同様だろう。理子もどっちかというと男に近い性格をしているから、何とかなるだろう。可哀想なのは奈美だ。絶対平均的女子より恐怖の沸点低いぞ、こいつ。

「二ノ宮にも怖いものがあるのか」

と、俺が茶化す。

「あら、怖いものはあるわよ。饅頭とか」

「じゃあ俺は大金が怖いな。目もくらむような大金が」

そんなバカなやりとりをしながら、俺たちは病院の方へ歩き出した。
朽ち果てたエントランスをくぐり、中を四つの懐中電灯の薄明かりが照らす。ボロボロのソファが並び、床にはホコリが堆積している。一歩歩くと、ぶわっと舞ってチンダル現象を引き起こす。
気付くと、奈美が俺の服の袖をつかんでガタガタと震えていた。歯が鳴る音も聞こえてくる。謙也の方を見ると、案の定俺をガン睨みしていた。仕方ないだろ、お前の目つきが悪いのが悪いんだ。多分。
「手術室、どこかしら」
「まず案内板を探すか」
言って、俺は壁を懐中電灯で照らした。お、あるある。
「えーと、西棟の三階だってよ」
俺たちはホールにあるエスカレーターに向かった。当然動いているはずもないので、自分の足で上へと上がっていく。
「……ん？」
視界に何かが横切ったような気がして、俺は思わず声を漏らす。
「な、なに？」
「いや、何か動いてたような気がして」
「ち、ちょっと、へんなこと、い、言わないでよぉ」
奈美が今にも泣き出しそうな様子で訴えかけてくる。

「でも、霊の一つや二つはいるかもね。何せ、場所が場所だから」
「ふえぇ、りっちゃんまで、やめてよぉ」

わざとかそうでないのか、理子が追撃を加える。うーん、これはこれで楽しいかも。

そんなことを言ってる間に、手術部のエントランスにつく。

「あ」
「きゃあ！」

足下をちょろちょろとネズミが走っていた。こんな場所だ、ネズミくらいいてもおかしくないのだが、奈美はすっかり驚いて腰を抜かしてしまった。
ってことは、さっきの影はネズミかな？

「ふえぇん、もうやだよぉ……」

限界突破したか、泣き出してしまった。

「ほら、目的地はもう少しだから、頑張って」

理子が励まし、腕を持って立たせる。そして俺たちはゆっくりとまた歩き出した。

「ついたぜ」

ぶっきらぼうに謙也が言った。なんだ、いたのか。さっきから黙ってるから存在忘れてたぞ。

「じゃあさっさと撮って帰りますか」

言って、俺と謙吾が手術室の中で並ぶ。こんな奴とツーショットというのは気に入らないが、仕方ない。

肝試しのゴールは、写真を撮ることだ。全員行ってきたという証明のために、それぞれが映った写真を撮らなきゃならない。

「はい、チーズ」

理子がのんきにそんなことを言って携帯電話のシャッターを切る。やっぱりこの女、全然怖がってないな。

「綺麗に撮れたわ」

「じゃ、交代な」

変わって、理子と奈美が並ぶ。奈美はすっかり腰が引けて、理子の服の袖をがっちりとつかんで震えていた。

「撮るぞ」

言って、俺はシャッターを切る。さてさて、上手く撮れてるかな？

うん、バッチリだ。暗闇にフラッシュたいての撮影だから青白く映ってしまっているが、まあ仕方ない。それにしても、廃墟に美少女二人って何かシュールだな。

「さ、ささ、もう帰ろ、早く、か、帰ろ！」

うわ、噛みまくり。うーん、さすがにこれ以上ここにとどまるの

は可哀想だな。俺だって怖くないわけじゃないし、さっさと帰りたいのは事実だ。

俺たちは早足で手術部の出口に向かった。

ウオォン……

「？　今、誰か何か言った？」

「……いや。謙也じゃないのか？」

「バカ抜かせ」

んで、奈美であるはずはない。となると……

四人の間に沈黙が走る。想像されたのは、恐らく共通のアレだろう。

「い、いや、きっとあれだ。風か何かが共鳴した音だよ」

俺は少しテンパるのを自覚していた。日常の中でなら「霊などいない！」と言い切ってしまうような俺だが、こんな環境下では否が応でも弱気になってしまう。

他の三人も似たようなものなのか、答えない。

黙ったまま、俺たちは来た道を出口に向かって引き返していく。

そして、廊下の向こう側にエスカレーターが見えたその時――

懐中電灯に照らされて黒い何かが映った。

四つの光が映し出したそれは、カブトムシとクワガタを足して二で割ったような形状をさらに物々しくした何かで、廊下を完全に塞

いでしまうほどの大きさをしていた。外装は黒光りをし、サメのような口からは鋭利な牙がのぞく。

端的に言えば――怪物だ。

「い――」

奈美が声を引きつらせる。

「いやあああああああああああああああ！」

俺も腰を抜かしかけていた。謙也と理子の様子を見る余裕はないが、多分俺と大差無いだろう。

黒い怪物は、のっしのっしと俺たちの方へと近づいてきた。そのどう猛な牙を見て、本能がヤバイと警鐘を鳴らす。

俺は逃げようとして、奈美が腰を抜かしているだろうことを思い出した。くそ、喰われちまうぞ！

奈美の腕をつかんで、俺は強引に引っ張り無理矢理立ち上がらせる。

俺たちは再び手術部の方へ向かい、走り出した。

すると、手術部の入り口から黒い怪物がもう一匹姿を見せた。

「――！」

逃げ場が、無い！

背後からはどしん、どしんと近づいてくる音が聞こえる。前方か

らも、だ。

――喰われる。そんな恐怖が脳髄を突き刺し、冷静な思考を奪っていく。俺はふるふると首を振った。冷静になれ、冷静に！

前は無理。後ろも無理。なら、横は――

「窓だ！」

俺は叫んだ。そう、窓から飛び降りればいい。ここは三階だ。悪ければ骨折くらいはするかもしれないが、死ぬことは無いだろう。このままボヤボヤしていたら、怪物に喰われてしまうかもしれない。

俺たちは壁際に寄って、窓を開けた。そうこうしているうちに、怪物はすぐ近くまで来ていた。

「行くぞ！」

俺と謙也は、ほぼ同時に窓から地面へと飛び降りた。駆け抜ける無重力感。

その瞬間、ブゥン、と目の前に何かが現れた。それは黒い塊で、月明かりの下で完全な”無”の空間となっていた。異質なまでに黒く、絶対的な存在感をそこに示している。

そんな”無”が現れたとき、俺たちの落ちるスピードが和らいだ。そして地面に付く前に落下は止まり、空中で”無”の方へと引き寄せられはじめた。

――吸い込まれてる！？

俺は瞬間的にブラックホールを連想した。超質量の塊。中に入ると超重力で圧殺されるんだったか。だったら、吸い込まれたら、俺、死ぬ！？

冗談じゃない！

俺は抗おうとしたが、身体を支えるためにつかむような場所も無ければ、逃げることもできない。ただ、なすがままにされるしかなかった。

「うぉわあぁぁぁぁ！」

一気に速度は増し、俺は”無”へと吸い込まれていった。

第1話：洞穴の姫君

ブゥン。

暗闇が俺の全身を包み込んだかと思うと、何かに引っ張られるように俺は飛んだ。いや、飛ばされたと言った方が正しいか。

そう、宙を舞っているような感覚だった。

ふわりふわりと右へ、左へ、上へ、下へ。水面に揺れる木の葉にようにユラリ揺れ、なされるがままに舞う。

やがて、俺の身体を取り巻いていた得体の知れない力が消え失せ、再びの無重力感が襲いかかる。落下しているのを感じていると、視界に光が戻った。

目の前には、水面。それは猛烈な勢いで迫り――

「うわあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

ドッボォォォォォォン！

強烈な水しぶきを上げて、俺は水中に落下した。勢いはしばらく止まらず、数メートルは沈んだだろうかといったところでやっと速度が緩やかになった。

しかし、浮かびそうになる気配は無い。

――ヤバい。服を着たまま水中に落ちると、水を吸って数キロの

重りになって溺れるんだっけか。

俺は慌てて、水面に向かって水をかき始めた。必死になってやっと浮上に転じたものの、そろそろ肺があえぎ声を上げはじめる。苦しさに巻かれながら、このまま溺死してなるものかと俺は水をかき続けた。

数分にも思える数十秒が過ぎ、やっと水面が見えてきた。俺は手の動きを速め、やっとの思いで水面から顔を出した。

「――ぷはぁっ！」

俺は思いっきり酸素を吸い込んだ。悲鳴をあげる肺に酸素が満たされ、怠さが急速に回復していく。それでも、沈んでしまうので手足の運動は止めることができない。

それにしても、つくづく水泳が苦手じゃなくて良かったと思っていた。もし２５メートル泳げないようなカナヅチだったとしたら――想像し、俺は身震いした。

「ここは……？」

見る限り、俺がいるのは洞窟のような場所だった。青黒いごつごつとした壁が左右にそびえ、天井は目もくらむほど高い。なぜ光の差さない場所なのに目が見えているのかというと、辺りにはふわりふわりと緑色のホタルみたいなものがたくさん舞っているからだ。しかし、それにしては光が随分と強い気がする。

俺は光をつかんでみたいという衝動に駆られたが、残念ながらそんなことをしている余裕は全く無い。気を抜くと溺れてしまう。

それでも少しは余裕ができてきた俺は「ドドドドド……」と水を打ち付けるような音がするのに気付くと同時に、自分が流されていることに気付いた。

下流の方を向いてみると、川の流れが途切れていた。

まさか、滝――！？

「嘘だろぉぉぉぉぉぉぉ！？」

俺は焦って進行方向と直角に逃げようとしたが、見ると川岸というものはなく、絶望的にそびえ立つ壁面があるだけだった。流れに逆らって逃げようにも、勢いが強すぎてどうにもならない。

抵抗虚しく――俺は空中へ投げ出された。

もう何度目か分からない、無重力感。

ヒュオオオオォォォォォ……

ザッブゥゥゥゥゥゥン！

再び、俺は水面にたたきつけられた。また水中深くに沈み込む。しかし前と違ったのは、今回は少しばかり心の準備があったことだ。すなわち、肺いっぱいに酸素を吸い込んである。

沈む勢いが弱まってから、俺は水面に出ようと水をかき始めた。そこで、さっきとのある違いに気付く。

水をかいてもかいても、上の方に出ることができないのだ。数度

あがいて、滝から流れる水の勢いが邪魔しているのだと気付いた。

今度こそ溺れる――そんな恐怖を感じながら、しかしつとめて冷静に俺は水平方向へと泳ぎはじめる。少し下へ沈み込んではしまったものの、下方向への力はたちまちに弱くなっていく。

少し進むと、目の前には垂直にそびえる壁があった。俺は壁にそって、水面方向へとあがく。そしてたどり着く酸素のある場所。

「――ぷはぁっ！　げほっ、げほっ！」

何なんだよ畜生。得体の知れない化け物に追いかけられるし、訳の分からない暗闇に飲み込まれるし、おぼれかけるし、滝に突っ込むし、厄日にも程があるんじゃねえのか？　無事に帰ったら、厄払いにでも行った方がいいかもしれない。

俺は咳き込みながら目を開いた。すると――

目の前には、膝があった。

――人？

思い、俺は顔を上げた。

見上げた先には、透き通るような白い肌をした少女がいた。燃えるような腰ほどある赤い長髪はしかし煌びやかさをたたえ、繊細な顔立ちは一級の美術品でさえかすんでしまうように思えた。年の頃は俺と同じか少し下なくらいか。プロポーションは少しばかり細身であるようにも見えたが、形の良い双丘は確かにその存在感を主張している。

すなわち――

裸なのだ。一糸まとわぬ。

「キ――」

しかし、劣情を催すよりも美しさに見とれてしまうという方が正しかった。それほどに、完成された美。

「キャアアアアアアァァァァァァァァァ！」

鼓膜をつんざくような悲鳴が洞窟内に響き渡った。俺は我に返って、慌てて身体を反転させた。

「ご、ごめん！」

俺は三度水中に潜った。手を動かし、浮かず沈まずの状態をキープする。息の限界近くまで潜ったあと、俺はまた水面から顔を出した。

少女のいるだろう方向に背を向けたまま。

今度は、滝の音に混じって衣擦れの音が聞こえてきた。服を着ているのか。もったいない――そう思うと、まぶたの裏に少女の姿が蘇った。

うん、欲情するのは無理だな、やっぱり。

そんなことを考えていると衣擦れの音がやんだので、俺は少女のいるだろう方向を向く。ちょっとだけ前の方に出ると、やっと足がつく場所に出た。くたびれた両手両足を休める。

少女は変わった形の衣服をまとっていた。白をベースにした上衣

には青や緑の刺繍が施され、胸の辺りにエンブレムみたいなものが入っている。下は薄いピンク色のスカートだが、奈美が着ていたようなフリフリしたものではなく、しっかりとした厚手の生地でできているようだった。

形容するなら、どこか中世的というか、ファンタジックというか、そんな服装だ。

少女の表情は、頬をわずかに紅潮させつつ、どうも怯えているように見えた。無理もない、いきなり知らない男に裸を見られてしまったりしたのでは。

少女が何事かを話しかけてきた。

「○△∨〒×△▼？」

何を言っているのか分からない。自分が話せる言語は日本語とちょっとばかしの英語だが、そのどちらでもないようだった。ドイツ語か、フランス語か、ポルトガル語か、はたまた名も知らぬ言語だったりするのか。

俺が無反応でいると、少女は小首を傾げ、ポケットから何かを取り出した。見ると、それはシンプルな作りの指輪のようだった。あれだ、シルバーアクセによく似ている。

少女はそれを俺の方に差し出した。俺は半ば条件反射的にそれを受け取る。

しばらく見つめ合う俺と少女。すると少女は両手で「指輪をはめて」というような仕草を見せたので、俺は素直に渡された指輪を右手の中指にはめた。お、サイズぴったりだ。

「通じますか？」

少女の透き通るような声が、今度は明確な言葉となって聞こえてきた。

うぉう、ちょっと待て。何をした！？　さっきまでワケノワカラナイ言葉だったのに、いきなり意味が通じだした――つーか日本語が聞こえてきたぞ？

こいつ、ひょっとして日本語が喋れたのにからかってたのか？なんて思ってしまう。あ、でも、よく見ると言葉と口の動きが合ってない。何だこれ。

「あ、ああ、通じるけど」

しかし考えてみれば、目の前の少女はとても日本人には見えない。というか、何人にも見えない。自分の理解を超えた生物のように見える。

「――ひょっとして、”天上人”さまですか？」

テンジョウビト？　天井？

あれか、飛行機やバスの中で色々案内する――て、それは添乗員か。

「ごめん。テンジョウビト、って何？」

俺はストレートに疑問をぶつける。

「天に住まう方々の事です」

少女の説明に、俺は小首を傾げた。

「うーん……天に住んではいないと思うけど」

そう言うと、少女は少し落胆したように見えた。

「そうですか、では、あなたは……？　ここは王族以外立ち入ることができないはずなのですが……」

いや、そんなこと言われても。何でここにいるのかなんて、俺が聞きたいよ。

ていうか、王族？　皇族じゃなくて？　って、皇族でもそれはそれでびっくりか。

「いま、王族って言った？」

「はい」

うーん、何か混乱してきたぞ。少し冷静になってみよう。

王族って言うからには王が存在してるはずなわけだが、日本に王は存在していない。一方、海外を見てみればイギリスみたいに王の制度が存在している国もある。とすると、俺はどっか見ず知らずの国にぶっとばされたのか？

いやいやいや、常識的に考えてテレポートするなんてありえないだろ。とすると……

「わかった！」

「はい？」

「君はちょっと妄想気味の電波ちゃんだ！」

少女はぽかんとして、

「違います！」

言い切ってきた。ちっ。

まあ取りあえず、場所を聞くのが手っ取り早いか。テレポートなんて認めたくないが、何が起きてるのかはっきりさせてかなきゃ話が進まない。

「ここって、どこ？」

「ここ、ですか？　アンタイル山の聖堂ですが……」

アンタイル山？　聞いたことないなあ。

「えっと、何国？」

俺の質問に少女は小首を傾げた。

「ラルファート国、ですが」

やっぱりラルファートなんて聞いたことが無いぞ。地理は苦手じゃない方だが、そんな国名は見たことがない。というか、やっぱり日本じゃないのかよ。テレポート説は正しかったようだ。

そう思い、一つの仮説が浮かび上がる。

「ひょっとして、俺はブラックホールに吸い込まれたせいで死んで

て、ここは死後の世界、とか？」
「何をおっしゃってるのかさっぱり分かりませんが……死後の世界ではないと思います」
「だけど、死者が死んだことを自覚できるものなのか？　ひょっとしたら君も死んでて、俺と一緒に死を自覚できていないだけ、とか」
「変なこと言わないでください！　貴方の方がよっぽど電波じゃないですか！」

うげ、電波扱い。言われてみると地味に凹むなぁ、コレ。

考えてみれば、俺の服装は肝試しやってたときと一緒なんだよなあ……ユーレイになってまで服を持ってくなんて考えづらいし、やっぱり生きてるってことなんだろうか。まぁ死亡説は完全には消えないものの、可能性は低いか。

もう一回冷静になってみよう。ラルファートという国なんて聞いたことがない。とすると、単に俺が知らないだけか、あるいは――ここが地球外か、異世界か、だ。テレポートなんてぶっ飛んだ現象が起きたらしいんだ。それが地球の外まで働いたとしたって不思議じゃない。

仮説を確証に変えるため、俺は彼女にたった一つの質問をする。

「ここって、地球だよね？」
「チキュウ？　何です？　それ」

ビンゴ。どうやら俺は見知らぬ星か見知らぬ世界にぶっ飛ばされたらしい。

「あー、取りあえず、何となくだけど状況つかめたっぽい……」

「？」

そうすると、もう一つ疑問がある。

「それなら、何で君は日本語を喋れるの？」

「ニホン語、ですか？　私、そんなの喋ってませんよ」

「けど、現にこうやって……」

「言葉のことですか？　それなら、さっきお渡しした指輪デバイスの魔力によるものです」

言われて、俺は中指にはめられたその指輪を見た。

「解語の魔法が込められています」

「カイゴ？」

「異なる言語を解釈する魔法です」

異なる言語を解釈？　ああ、口の動きと言ってる内容が合ってないのはそのせいか。

――どういう不思議現象だよ。それと、魔法？　なんだ、魔法の世界か？　ここは。

「魔法っていうと、あれか、どっかぁーんって火の玉飛ばしちゃったり？」

「はい？　もちろんそれもありますが」

うわ、マジかよ。マジで火の玉飛ばしちゃうのか。

まぁ解語なんてものがある時点で、火の玉飛んだところで不思議ではないよなぁ。

「雷をずっがぁーんと落としたり？」

「はい」
「氷でかちんこちんに固めたり？」
「はい」
「風でざしゅって切り裂いたり？」
「はい」
「光でぽわぁって傷を癒したり？」
「傷を癒す、ですか……それは聞いたことがないです」

何だ、傷を治すことはできないのか。だとすると傷つけっぱなしなわけか。物騒だなあ、魔法。

ともあれ、だ。

俺は何か得体の知れない力によって空間をばびゅーんとテレポートして、魔法とかが存在するような星か世界にきちゃったわけだ。多分、謙吾も同じようにどっかにぶっ飛ばされたんだろうな。転落死してりゃいいのに。

そう考えて、俺は奈美と理子のことを思い出した。多分、俺が闇に吸い込まれるところを見ていたはずだ。逃げ場無し、じゃねえか。心配だなあ。

しかし心配しても仕方がない。きっと俺たちに続いて逃げたんだろうと思っておこう。無事にこの世界で会えればいいが。家に帰ってりゃもっといいけど。

まず俺がすべきことは状況把握、だ。今分かったことは、ここがラルファートという国で、目の前の少女は王族だということ。ってことはお姫様かな？　なんかやたら高貴な感じはするし。あと、魔法という力があることくらいか。よし、色々聞いてみることにしよ

う。

第2話：崩落

「へぷしっ！」

俺は可愛らしくくしゃみをした。ぶるぶる。うー、さぶ。

洞窟内はじめっと寒いし、俺は濡れ鼠だし、そりゃくしゃみも出るわな。風邪引くぞ。

「暖めましょうか？」

少女の言葉に俺は「え、ひょっとして人肌で？」なんてダメ過ぎる発想をしてしまう。いや、でもひょっとして俺のスウィートマスクが彼女のハートをストライクして、そこから始まるめくるめくフォーリンラヴ、なんて。

……あるわけねえか。

少女が一歩俺の方に近づく。俺は緊張して、瞼を閉じた。

ぽわぁ、と全身を優しい空気が包み込む。なんだ？　と俺は目を開いて自分の身体を見た。少女のかざす手の先、つまり俺を取り巻くように淡い光が発生し、ぬくもりが俺を包んでいる。あ、気持ちいいかも。ひなたぼっこしてるみたいだ。

「これは？」

「熱波の魔法を弱い出力で用いたものです」

なるほど、魔法か。さっき話してた奴だな。

とすると、少女が気まぐれに出力を強めたりしたら、俺は速攻火

だるまになってしまうわけか。ガクガクブルブル。あまり変なことは言わないようにしよう。

「魔法、か……信じられないけど、実際に見せられちゃなあ」

「信じられないって、何がです？」

「魔法っていう存在そのものが。俺の世界じゃ、そんなものはないからな」

俺の言葉に少女はきょとんとした表情を見せる。

「魔法が無い？　俺の世界？　すみません、話がちょっと見えないのですが……」

ああ、そうか。俺が異世界あるいは異惑星人っていうのはあくまで自己完結しただけであって、彼女の知るところじゃないわけか。

「んー、えーと、俺もまだちょっと自信ないんだけど、どうも俺は違う世界から飛ばされてここに来たみたいなんだ。んで、俺がいた世界じゃ魔法なんて無いんだよ」

少女がぽかんとする。

考えてみれば、俺の言ってる事ってまるっきり電波ゆんゆんじゃねえか。うわ、また変な人だと思われたかなあ。

「違う、世界……やっぱり貴方は天上人さまでは無いのですか？」

「それは違うと思う。ちゃんと地面に足つけて生きてたし」

なんか天上人って部分にこだわるなあ。何か意味でもあるのかな。

「そういう君は、さっき王族とか言ってたけど、お姫様か何かなの

？」
「はい。ラルファート王国第一王女、フェアリーゼ＝フォン＝エルシュトラウムです」
フェアリーゼ、か。なんかすっごく高貴そうな名前だなあ。
「貴方のお名前をよろしければ教えていただけませんか？」
「ああ。御子柴龍って言うんだ。しがない高校生」
「ミコシバリュウ、さんですか。コウコウセイって、何です？」
ああそうか、教育体系も違うのか。
「学校はこっちの世界にもある？」
「はい」
「高校ってのは学校の一つで、１５歳から通うところだよ」
「あ、そうなんですか」
うまく伝わった、のかな？
そう言えば、この世界の文化水準ってどうなってるんだろう。魔法があるのは分かったけど、科学技術は？　教育制度は？　考えてみると、分からないことばかりだなあ。当たり前か。
――いやいやいや、気にするところが間違ってるだろう、俺。異常事態にあてられすぎて麻痺したか？
どういう原理でぶっ飛ばされたのかはこの際どうでもいい。現実として受け入れる以外に術はないからだ。大事なことは、元の世界に戻れるのか――だ。

「フェアリーゼ……さん？　さま？」
「何も付けなくて結構ですよ」

フェアリーゼが微笑んだ。うん、その方がありがたい。

「フェアリーゼ、この世界で俺みたいに異世界から飛ばされてきたっぽい人っていたりする？」
「え、と……すみません、少なくとも私は他に存じません」

言って、申し訳なさそうな表情をする。

そう、か。まあ、何となく予想はしていたさ。俺の世界でだって異世界に行ったり来たりしたことがある人なんて聞いたことがない。だとすると、帰る術は絶望的と考えて間違いないだろう。

そんな風にあっさり割り切れるのは、俺がいなくなって心配する人があまりいないからだろう。寂しいことだが。実の両親は俺が幼い頃に他界したし、今の養父母は俺をちょっと疎ましく思っている節がある。義妹は少し悲しむかもしれないが、仕方がない。諦めてくれ。

元の世界での変化のない日常に執着が無いとは言い切れないが、魔法が当たり前というこの世界に興味が無いわけではない。というか、結構興味津々だったりする。どうせ珍しい事件に巻き込まれてしまったんだ、楽しまなければ損だというものだ。

あ、でもネットとケータイとテレビゲームが無いのは地味に痛いかも。

……お気楽だなぁ、俺。

しかし、だ。問題なのは――果たして俺はこの世界で生計を立てられるのだろうか、ということだ。生きていくためには仕事をしてお金を稼いだりしなきゃならない。右も左も分からない、市民権だって無いだろう俺がこの世界で生きていけるのか？

思い、俺は身震いした。

ふと、俺は大金を稼ぐ術を思いついた。目の前に高貴な姫君。ならば攫って身代金を要求、そうすれば一生働かなくてもいいだけの大金が――

「？」

……いや、ダメだろ俺。色んな人に殺されちまう。

「さっきから表情がくるくる変わってますけど、どうかしました？」

うぉう、やべ、表情に出てたのか。

俺は両手の平で頬をぱしぱしと叩いて気を引き締め直した。

まあ、くよくよ悩んでも仕方がない。異世界から来た、という物珍しさでふれこめば、餓死するってことはきっと無いだろう。

……昔から順応することだけは得意だったが、こんなところで役に立つとはなあ。

――あれ？

「今、揺れなかった？」

ふと平衡感覚に変な感覚を覚え、俺は聞いた。

「はい、少し揺れたような気が……」

――きた！

いきなり地面がぐらぐらと揺れ、俺はバランスを崩し右へ左へステップを踏んでしまう。

天上からぱらぱらと砂つぶてが落ちてくる。揺れはなおも弱まる気配を見せず。俺たちは必死でバランスを保とうとする――が、もう無理だ！

耐えきれなくなって俺は前の方に倒れ込んだ。ちょうどフェアリーゼを巻き込む形で。

ふにゅ。

右手に柔らかな感触。膝をついた俺は左手をごつごつした地面に、右手をフェアリーゼの――左胸に。

「――ひ」

フェアリーゼの表情が歪む。

「いやあああああああああああ！」

悲鳴と同時に、俺はフェアリーゼから強烈な平手打ちをもらった。勢いぶっ飛ばされ、俺はフェアリーゼの横に倒れ込む。

うぅ、役得……そして、痛い。

揺れはなおもとどまるところを知らず、天上から落ちてくる砂も石つぶてに変わり、水面がぼちゃん、ぼちゃんと波打つ。

――これ、やばくね？

「逃げるぞ！」

「は、はい！」

俺の号令に涙目のフェアリーゼは力強い返事を返した。

「出口は？」

「あっちです！」

フェアリーゼが指さした方向には、背丈より大分高い程度のほら穴があった。俺たちがそっちに向かって走り出すと、背後の方で「ドドォン」と轟音が轟いた。軽く振り返ると、巨大な岩が落下したのか、水面が今までにない巨大な波しぶきを立てていた。

「きゃっ！」

悲鳴が聞こえたので振り向いてみると、フェアリーゼが地面に膝をついていた。転んだのか。

「大丈夫か？」

「はい。――っ！」

立ち上がろうとして、フェアリーゼが苦痛に表情を歪めた。足を

かばっている。捻ったのか！？
必死で走ろうとするが、そのペースはさっきよりも圧倒的に遅い。まずい。このままだと――
「――行ってください！」
フェアリーゼが気丈に言う。
ほら穴の中で落ちてくる天井の石も次第に大きくなり、俺たちは生き埋めの様相を呈しはじめている。
「行けるかよ！」
「でも、このままじゃ二人とも！」
ああ、そうかよ。このお姫様はこんな状況でも人を気遣えるほどお優しい方だったんだな。そう考えると、自分が（意図せずして）しでかしてしまった不埒な出来事について、申し訳なく思ってしまう。
しかし今はそんなことを気にしている場合ではない。
まさか、フェアリーゼを置いて自分だけ逃げようなんて思えるはずもない。しかし、フェアリーゼは走れない。ならば――
俺は意を決した。
「ごめん！」
「え――きゃっ！」
俺は右腕をフェアリーゼの背中に、左腕を膝裏にあてて持ち上げた。

一言で言うと「お姫様だっこ」だ。

正直なところ、俺の力じゃお姫様だっこは無理だろうと思っていた。「火事場の馬鹿力」をあてこんでいたのだ。しかし結果は――オーライ。楽ではないが走れないほど辛いわけでもない。

だっこしたあとで思ったのは、おぶれば良かったんじゃないか、ということだ。それだったらそんなに力はいらないし、何より背中で感触を楽しむことができたかもしれない。

――やっぱダメ過ぎるな、俺。

もっとも、実際には「はい、背中に乗って」なんて悠長なことをやってる場合じゃなかった、ってのもあったのだが。一刻一秒を争うぞ。

俺はフェアリーゼを抱えたまま、全力で出口に向かって駆けていった。

第3話：帰路

フェアリーゼを抱えての全力疾走を数分続けたころだろうか、二人の甲冑を身につけた男が走ってこちらの方へと向かってきた。

「姫様、ご無事ですか！」

その一人、髭の男が叫んだ。

「――貴様、何者だ！」

続けて、吼える。ああ、俺のことか。

「そんなの後だろ！　生き埋めになるぞ！」

俺はそう言って甲冑の男達を出口へと促した。実際、こんなところで押し問答している暇はない。一秒だってこんなところにいたくは無いのに。

まあ今にも崩れそうな洞窟に入ってくるなんて、大した度胸だとは思うのだが。

そうして、先導する男たちに続いて俺は再び出口の方へと走り出した。程なくして、先から目映い光が差し込んでいるのが見えてくる。

――出口だ！

俺は最後の一踏ん張りで出口に向かって駆け抜けた。

外に出ると、強烈な光が瞳を灼いた。暗い状況に慣れてしまっていたせいか、瞼をまともに開くことができない。

息を切らした俺はフェアリーゼを優しく草むらに下ろすと、大の字になって寝っ転がった。そして時間を置かずして、洞窟の方からは激しく「ドゴォン」と音がして入り口が完全にふさがってしまった。

――あと数秒遅れてたら生き埋めだったのか。

俺は冷や汗が流れるのを感じた。

それにしても、いざというときは自分もやるもんだと俺は思っていた。かなり長い距離をお姫様だっこで全力疾走なんて、文化系の人間としては考えられない力だ。

やっぱり、火事場の馬鹿力って奴なのか？

さんさんと輝く太陽を見上げ、俺は違う世界に飛ばされたことを改めて実感した。本当なら今は夜のはずだし、なにより――空では太陽が二つ、寄り添って光を放っているからだ。見慣れない異質な景色。

俺は陽光に満たされながら、九死に一生を得た後の心地よいひとときを過ごそうとしていた――のだが。

チャキ、と俺の喉元に何かがあてがわれた。寒気を感じて目だけを動かしてそれを見ると、甲冑の男の一人、あごひげをたっぷり蓄えたいかついオッサンが刃物――剣をあてがっていた。

なぜ！？　俺なんか悪いことした？

――ごめんなさい思いっきりやらかしてますすいません。

「貴様、なぜ聖域にいた？」

剣呑な口調で問うてくる。

「やめて！　その方は私の命の恩人です！」

と、フェアリーゼが叫ぶ。命の恩人？　ああ、そうか。見方を変えればそうも見えるな。どっちかっていうと、自分としては突然現れてさんざ迷惑かけただけの不埒な人間、って認識なんだが。

「は……しかし」

男は納得のいかない様子で言う。

「聖域は部外者には”決して入れぬ”場所であるはず。それが解せぬのです」

そう言われてもなあ。異世界から飛ばされてきました、なんて言っても電波の烙印を押されるのは目に見えてるし――お人好しのお姫様ならともかく。

「彼は”天上人”かもしれません」

「！」

「！」

その言葉に甲冑の男達は驚いた表情を見せた。出たよ、また”天上人”。何なんだろう。まあ何か神秘的な雰囲気がする言葉だし、この場合はカタブツそうなオッサンを説得するにはいい言葉なのか

もしれないが。

……実際はごく普通の高校一年生ですよ？

「確かに、伝承とは一致しますが……」

「責任は私が持ちます」

まだオッサンは納得できないようだ。

……なんか置いきぼりな話が続いてるなあ。

「姫様が責任だなんて、とんでもない。ですが、分かりました。しかし姫様の御身のこともあります、監視は付けさせていただきますよ」

「構いません」

オッサンが剣を納めた。ふぅー、冷や汗出たぞ、さすがに。

「それでは、帰りましょう」

もう一人の甲冑の男が言った。見ると、馬とそれに繋がれた小さい小屋――御車っていうのか？　がある。多分、フェアリーゼを送迎するためのものなんだろう。

他に、馬が二頭並んでいた。甲冑男たちの移動手段か。

――て、俺はどうすりゃいいんだ？　まさか歩き？　勘弁してくれ。

そんなことを思っていると、髭の男が言った。

「御者台に乗ってください。乗るスペースはありますから」

あ、ちょっと丁寧な態度になった。さっきの“天上人”って言葉を信じたのかな？　まあ、まるっきり信じたってわけではないだろうけど。

フェアリーゼが甲冑の男の肩を借りて、御車に乗った。俺も御者にお辞儀をして御者台に座る。

御者の合図に合わせて御車がゆっくりと走り出す。

余裕ができたので、俺はふと周囲の景色に視線を移してみた。辺り一面に青々とした草原が広がり、遠くには森林のようなものが見える。舗装されていない道は延々と続き、山々が霞んで見える。

端的に言うと、元いた世界から建築物と電線を取っ払ったような景色だ。ただそれだけなのに、何故かもの凄いのんびりとした開放的な風景に見える。のどかだなあ。そういやイタリアだかイギリスだか、景観のために電線を地中化したりしたとか聞いたことがあるな。なるほど、こんな風に開放感が生まれるのか。

のどかなんだが、考えてみれば大地震のあとなんだよな。近くに村とかあったなら、きっと大打撃を受けてることだろう。そう思うと、手放しで風景を堪能っていう気にもちょっとなれない。

「ミコシバリュウさま」

御車の中から声が聞こえてきた。しかしカーテンで遮られてフェアリーゼの顔は見えない。

「リュウ、でいいよ。あと”さま”も要らない」

「では、リュウ。このあとどうされるのですか？」

どうする、かあ。正直なところ、どうすればいいのか俺が聞きたい。

「どうしたらいいと思う？」

半分冗談交じりに俺が問う。

「え……」

フェアリーゼが一言呟く。やっぱ困らせちゃったか。

「ごめん。突然異世界に飛ばされて、俺もどうしたらいいのか分からないんだ」

「でしたら、ひとまずはお城にいらしたらいかがですか？」

お、らっきぃ。取りあえず屋根のある場所で眠れそうだ。

そういや時間的にはもう布団の中に入るような頃なんだよなあ。

そう考えると少し眠くなってきた。

「いいの？」

「いいも何も、リュウは私の命の恩人です」

うーん、また命の恩人かぁ。こそばゆいっつーの。そんな自覚ねぇし。

「リュウ」

「何？」

「もしよろしければ、リュウの世界のことを話していただけません

か？」
「ああ、いいよ。その代わりと言っちゃなんだけど、後でこの世界のことを教えてくれるかな」
俺は苦笑いを浮かべる。
「あ――」
フェアリーゼにとって俺の世界の話なんて読み物語と何ら変わらないかもしれないが、俺にとってこの世界のことは大事な問題なんだ。聞ける機会にしっかり聞いとかなきゃならない。
まあ帰ることができるという可能性も捨ててはいないが、どちらにしてもこの世界のことは知っておかないと、いざというときに困ることになるだろう。
「ごめんなさい。私、自分のことばかり」
申し訳なさそうに言った。責めるつもりじゃないんだからそんな深刻になるなって。むしろ俺の方が謝らなきゃいけないことがあるわけで。
「俺の世界、かぁ。うーん、一言で言うと平和な世界、かなぁ。戦争したり飢餓に苦しんでたりする国はもちろんあるけど、俺の住んでた国はそんなこととは無縁だったな。みんな同じように寝て、起きて、飯食って、学校行ったり仕事したりして――そんなあんまり変化の無い日常を繰り返して、さ」
まあ節目節目に変化はあるものの、概して退屈な日常だよな。ありふれた平和は腐敗して、そこに過ごす人間も腐らせてしまってい

るような気がする。

「平和、ですか」

「この世界は？」

「少なくとも平和ではありません。人々は大国同士の戦争に怯え、魔物の影に怯え、日々を生きていくのに必死です。のみならず、飢饉や災害も頻繁に襲ってきます。今日だって、大地震でどれほどの人が苦しんだか――」

表情は見えないが、言葉の節々に苦悩が見て取れた。為政者でもあるわけで、多分このお姫様は本心から憂いているのだろう。

「ですから、リュウが天上人なんじゃないかって思ったとき、正直心が躍りました。この荒れ果てた世界に遣わされた救世主なんじゃないか、って」

おいおい、今度は救世主かよ。やめてくれ。

「悪かったな、救世主じゃなくて」

俺は甲冑男たちに聞こえないように言った。あいつらは俺が”天上人”とやらだと思ってるから納得してるんだ。余計なことを言って波を荒立てたくは無かった。

「いえ。――それに、まだそうと決まったわけじゃありませんし」

いや、決めてくれ。頼むから。

「けど、望むこと自体が愚かなのかもしれません。人の世の問題は人の手で乗り越えなければならないもの。努力せずにただ救いの手

を求めるなんて、きっとただの傲慢なんでしょう」

うーん、何か難しい話になってきたぞ。取りあえず、お姫様は単なるいいひとじゃなくて物事と向き合ってる人なんだってことは感じる。やっぱあれか、王族ともなると考え方が違ってくるのかなあ。

「ところで、何で俺をその”天上人”とやらだと思ったの？」

率直な疑問をぶつける。

「あの聖堂は天上への入り口だと考えられているんです。私は儀式として天上から流れてきた清らな水で……身を……その……清め、旅立つ準備を整えていました」

言葉を濁す。あ。あのときのことを思い出したな。

……ごめん。悪気があったわけじゃないんだ。

旅立つ、って言葉がちと引っかかるが、それはあとで聞いてみることにしよう。

「聖堂への門は普段は閉ざされ、開けられるときも見張りが付き、更に外部の者が入ることはできない仕掛けが施されています。それなのにそこに居るなんて、天から降りてきた天上人以外に考えられなかったからなんです」

「なるほどね、何となく分かった」

要するに、あそこに入れるのは王族か天上人かしか考えられない、て訳ね。まあ、天上人ってのも伝承みたいなもんなんだろうけど。

俺はふと歩いてきた道を振り返ってみた。後ろにははるか高くそ

びえ立つ岩山があり、その頂上は雲に覆われてうかがい知ることができない。なるほど、だから天上に繋がってるとか考えられる訳か。

「ついでに、『あの雲は晴れたことがない』とか曰くが付いたりして」

「ええ、その通りです」

うわ、マジかよ。そりゃ聖地にしたくもなるよなあ。バベルの塔かよ。

「聖堂、潰れてしまったわけか」

そんなところまでバベルの塔そっくりか。まあ内部が崩れただけで外が倒れたわけじゃないが。

軽い気持ちで言ったのだが、返事は帰ってこない。やべ、地雷踏んだか？

「何事も……起こらなければ良いのですが」

しばらくして、沈痛な声色で言った。うーん、そうだよなぁ。きっと聖地みたいなものだったんだろうし、それが潰れたとなると縁起悪いどころじゃないよな。迂闊な言葉だったか。

それを払拭したくて、俺は自分の世界の文明を少しばかり大げさにおもしろおかしく話してみることにした。この世界がどの程度の文化水準なのかは知らないが、お姫様の送迎に馬車を使ってるところを見ても、そんなに高くはないと想像される。少なくとも蒸気機関や電気は発明されていない水準だろう。

俺はフェアリーゼにテレビ、電話、カメラ、飛行機など、近代の

文明について話してやった。相づちを打つフェアリーゼは何だかもの凄く興味深そうだった。パソコンのことを話そうとして、意味が通じないだろうと思ってやめる。

「凄いです。そんなものがあったら、きっと凄い楽しいんでしょうね」

「うーん、ありふれるとあんまり有り難みを感じないもんだよ」

「そういうものなんですか」

「ああ。例えば、この世界にとっての魔法がちょうどそんな感じでさ」

俺にとっては凄く興味をそそられる技術なのだが、多分この世界の人にとっては当たり前になってるだろう。

「こんな“解語”なんて魔法があったら、凄い便利だろうと思うよ」

「リュウの世界ではどうしてるんです？」

「言葉を勉強しなきゃならないよ。俺も母国語の日本語の他に、学校で英語っていう他の言葉を勉強させられてるんだ」

「へえ、大変なんですね」

話していて、俺はいいことを思いついた。

ポケットに入ってる文明の利器――携帯電話だ。

川に落っこちたときに水没してしまったのだが、どっこいそこは最新型の防水携帯。きっと問題なく動くはずだ。思い、俺はポケットから携帯を取り出して開いてみる。

よし、バッチリだ！　……って、御者台の兄ちゃんが何かジロジロこっちを見てる。興味津々なのか。

さすがにアンテナは圏外だが、保存した写真や動画は問題なく見

ることができる。

「あとで、さっき話した“テレビ”ってやつの小さいのを見せてあげるよ」

「本当ですか！？」

壁越しにでも喜んでるのが伝わってくる。うはは。

しかし、考えてみると充電はできないから使い切りなわけか。勿体ないし、何か充電するいい方法ないもんだろうか。電気の生成は今ある知識で何とかなりそうだが、問題はコネクタとの接続だよな……。まあ、じっくり考えてみるとするか。

そうこうしている中で、俺はさっきフェアリーゼが言ったことが気になったので聞いてみることにした。

「さっき”旅立つ”って言ってたけど、フェアリーゼが？」

王族っていうとあまり自由が無くて、お城にこもりっきりっていうイメージだ。外出も自由にならなくて、いつも外に憧れて――とか。

「……はい」

フェアリーゼの声色は暗かった。何だろう、その旅とやらが嫌なのだろうか。しかし「嫌なの？」なんて露骨に聞くのもちょっとはばかられる。うーん。気になるが、そこまで親しい間柄ではないからなあ。

「エルシュトラウムの者は年頃になると、王位を継承する準備とし

て旅に出、王に相応しいだけの器量を身につけなければならないのです」
「王位を継承、って、フェアリーゼが？」
「はい」

げげ、お姫様は次期国王様だったのか。王位継承に男女の区別が無いのか、あるいは王子がいないっていう理由なのかは分からないが。
……ひょっとして俺、打ち首獄門にされてもおかしくないくらい不埒なことやってないか？

「リュウ」
「ん？」
「さっきは助けてくださって本当にありがとうございました。リュウがいなかったら、私、きっと生き埋めになってました」
「ああ、何だ、あんなことか」
「あんなこと、じゃありませんよ」
「うーん、いや、正直なところ自分でもあんな力が出せたなんて驚いてるんだ。俺、体育会系じゃないしさ」

そんなことを言うと、クスクスとフェアリーゼの笑い声が聞こえた。

「あのときのリュウはどんな騎士よりも頼もしかったですよ」

よせやい、こっぱずかしい。

「そう、どんな騎士よりも――」

フェアリーゼの声色は、どこか遠くを見ているかのようだった。

第４話：大地の爪痕

馬車に揺られながら、俺はフェアリーゼからこの世界について教えてもらっていた。

まず、この世界はエウリクと呼ばれていて、大きく神聖領・人治領・魔人領に分けられるということ。エルシュトラウム王家が治めるラルファート国が属するのは人治領で、最も戦争の多い領域であるらしい。

そして文明水準は元いた世界よりは遅れていて、やはり蒸気機関や電気というようなものは存在しない。従って、それに付随する様々な便利アイテムも無いはずだ。

と言われてみて、それじゃ俺発明家になれるんじゃね？　とか思ってしまった。中学の知識で電気の仕組みなんかは分かっているし、多分ダニエル電池くらいは作れる。頑張れば鉛蓄電池あたりもできるかも？　更に魔法を組み合わせれば、元の世界に無いものだって作れるかもしれない。ってことは、「この世界にはまだ無いもの」を作って売れば億万長者も夢じゃない！？

――ま、暇なときにでも考えてみよう。今はそんなことをしている場合ではないのだし。

それと、魔法のこと。まず魔法は「デバイス」と呼ばれるものを介して発動させるものだということだ。デバイスは自動型と随意型に分けられ、自動型は使用者の魔力無しに効果を発動できる。ちょうど今つけてる翻訳指輪がそうであって、動力はエナジーストーンから供給される。随意型は使用者が魔力を注ぎ込むことで発動する

もので、規模の大きい魔法が該当するらしい。

ちなみにエナジーストーンとしては、高級なものとしては宝石が、安価なものとしては銅などの鉱物が挙げられるらしい。石に魔力を注入することで使える状態になるのだという。「魔力注入業」なんて仕事もあるんだとか。儲かるのかなぁ。

あと、元の世界に比べて異質なものとして、やはり魔物の存在が挙げられる。図体も知能レベルも戦闘能力も様々だが、人間にとって驚異となる存在も少なくないのだという。

細かい話は色々とあるのだが、ざっとこんなところだろうか。

一つ気になったのは、お姫様が外出するのにお供二人程度で大丈夫なのかよ？　ということだ。しかし聞いてみると、このオッサン達は王国でも凄腕の騎士らしく、有象無象の連中が束になってかかってきたところで不安はないのだという。

更に、この御車自体に結界魔法と気配封印の魔法が施されているらしく、そう簡単に第三者が察知することはできないのだとか。便利なものもあるんだなあ。

「ノーラ村が見えてきました。今日はあそこで宿を取りましょう」

と、髭の騎士――カイエルが言った。

空は既に二つの太陽が山の裏側に沈み、真っ赤な夕焼けが広がっている。時折鳥の群れがキィキィという鳴き声と共に飛び交い、何とはなしに寂しさを与えてくれる。

村に近づくと、遠目にも地震の被害を受けていることが見て取れた。建物は程度の差はあれどダメージを受け、中には完全に潰れてしまっている家屋もある。

「ひどい……」

フェアリーゼがそんな言葉を漏らした。

「これでは休むどころではありませんな」

カイエルが言う。

村の門をくぐると、憔悴した人々が路地にたむろしていた。怪我をして座り込む者、倒壊した自宅を見て呆然とする者など、様々だ。瓦礫の中に人が取り残されているのか、数人の男たちが瓦礫を持ち上げようとしている姿も見える。

ここまでの惨状ではないが、実は以前に同じような光景を目の当たりにしたことがある。養父の実家に行ったとき、大地震に巻き込まれたのだ。そのころまだ中学生だった俺は何もすることができず、ただ壊れた日常の中で嵐が過ぎ去るのを待つことしかできなかった。

そんな自分を、時折激しく後悔することがある。何もできないことと何もしないことは違うからだ。何もできないとしても動けば何かが変えられるかもしれないし、何より自分の中での整理の付け方が変わってくる。

二度と、そんな後悔はしたくないと思った。

だから俺は、御者に「ちょっと待って」と言って、瓦礫を持ち上

げようとしている人々のところに駆け寄った。カイエル達が馬を止める。

「手を貸してくれるのか、ありがたい！」

村人の一人である青年が言った。

俺は空いた場所に位置取り、瓦礫を持ち上げる用意をする。せーの、のかけ声に合わせ、俺は手に力を込めた。すると瓦礫は数十センチほど浮かび上がり、一人がその隙間に手を突っ込んで中の人を引きずりだした。

成功だ！

人々の間で拍手が起こる。助け出された人は外傷こそあるものの、命に別状は無いようだ。

「いやあ、助かったよ。あんた、見かけによらず力があるな」

笑って青年が言った。

「いや、それほどでも。何にしても、助かって良かったよ」

と俺が言うと、青年は小首を傾げた。

「……すまん、何を言ってるのか分からないんだが」

誰かが服の袖を引っ張ったので振り向いてみると、俺の隣にはフェアリーゼがいた。

「指輪に意識を向けて『マリクト』と唱えてください」

それが何を意味するのかが分からなかったが、俺はフェアリーゼの言うとおりにした。

「これで『発語』の魔法が有効になったはずです。ただ、話すときの違和感は大きいと思いますが……。魔法を止めるときは『レクト』と唱えてください」

ああ、そうか。”解語”の効果は自分が解釈するだけで、他人に喋るときは効果が無いわけか。で、村の人たちは解語の魔法を持っていない、と。

「あーあー、もしもし、通じてる？」

と俺は青年に話しかけた。すると、意識した言葉と実際に言葉として出た音とが完璧に乖離して、凄まじい違和感となって襲いかかる。うげぇ、こりゃ確かに奇妙奇天烈すぎる感じだ。フェアリーゼが言っていたのはこのことか。だから不要なときは魔法を止めたりする必要があるわけだな。

「ああ、通じてる。大丈夫だ。ところで、そちらの御方は？」

青年がフェアリーゼを指して訊ねてきた。俺が答えるべきじゃないと思ったので、フェアリーゼの返答を待つことにする。

「えっと……」

フェアリーゼが口ごもる。

「ただの、通りすがりの町娘です」

予想外の返答に、俺はズッコケかけた。村人達も呆気にとられた様子できょとんとフェアリーゼを見つめている。

……あのなあ。自分の格好考えろっての。どっからどう見ても偉い人だろうが。

せめて「通りすがりの旅人」とでも答えればいいものを。

「は、は、分かりました、通りすがりの町娘様。村はご覧の通りの有様でおもてなしをする余裕はありませんが、どうかお許し下さい」

青年が言う。ほら見ろ、嘘だって完璧にバレてんじゃねえか。

「なあ、フェアリーゼ」

「何です？」

「今夜はこの村に滞在するんだよな？　だったら俺、少し見て回って何かできることがないか探そうと思うんだけど」

「私もご一緒します」

「いいのか？」

「もちろんです」

フェアリーゼが微笑んだ。

「ところで、足の方は大丈夫なのか？」

ふと気になる。洞穴ではほとんど走れない程度にひねっていたみたいだし、完治するほどの時間は経っていないはずだ。

「ええ。ゆっくり歩く程度でしたら、なんとか大丈夫です」

「そっか。無理すんなよ」
「はい」
あんまり無理してほしくない気もするが、まあこればっかりはフェアリーゼの意思だしなあ。
「それでは、私どもも手伝いましょう。それと寝床を探しておきますが、最悪御車で一夜を明かすことになるかもしれませぬ。ご辛抱下さい」
と、カイエルが言ってきた。
「構いません。よろしくお願いします」
そうして俺たちはノーラ村で何かできることを探すことにした。村の中央部にあるモニュメントを待ち合わせ場所に、カイエルを別行動にして二手に分かれることにした。
俺はもっぱら、瓦礫に潰された人の救助にあたった。このような場所は一箇所や二箇所ではなく、村の至る所で発生していたのだ。助け出せた人もいたが、既に事切れていた人もいた。人の死に触れたのははじめてではなかったが、それでもやるせない気持ちが胸を刺す。
フェアリーゼは怪我人の手当なんかをやっていた。フェアリーゼの手当は手慣れたもので、みるみる間に怪我人の列がさばかれていく。手当が一段落すると、今度は炊き出しの手伝いをしていた。これまた慣れた手つきで料理をしているので、正直俺は驚いていた。何というか、王族ってこういうことは得意ではないっていう印象が強かったからだ。

やがて日も沈み暗がりが辺りを満たす頃には、助けを求める人は見あたらなくなっていた。元々大きな村ではなかったこともあるが、俺が入るとなぜか瓦礫が上手い具合に持ち上がるのだ。そのたびに力があるなと言われるのだが、なぜなのかはさっぱり分からない。異世界効果でもあったりするのか？

炊き出しや寝床の確保なんかはまだまだだったが、村人は「偉い人をこれ以上働かせられない」とフェアリーゼの申し出を固辞してきたのだった。

夕食として、俺たちも炊き出しをいただくことになった。簡素な芋と野菜のスープは少しばかり味気なかったが、それでもありがたかった。ただ、やはり日本人としては米がないのは辛い。

……そもそもこの世界に米あんのかなあ。無かったら泣くぞ。

食事を済ませた後で、俺たちは村の中央でカイエルと合流した。

「村人の厚意で、姫様とリュウ殿の分の二部屋、貸してくださるそうです」

「ありがとう。カイエルたちは？」

「我々は見張りの仕事があります故に」

「そうですか、分かりました。くれぐれも無理をしないように」

「は。勿体なきお言葉」

俺達はカイエルに先導され、宿屋に向かうことにした。

第5話：望郷の夜

この大地震でもさして被害を受けなかった宿屋は三階建てで、堅牢な石造りの建物だった。エントランスから入ったホールには人々がごった返し、思い思いの場所に陣取って身体を休めている。部屋の扉はほとんどが開け放たれ、数人で一部屋を共有しているようだった。

それを見ると、自分たちが一人で一部屋を使うのが申し訳ない気持ちになってくる。そう思い自分の部屋を返そうと申し出たのだが、断られてしまった。

俺は貸し出された自分の部屋に入ると、ベッドに仰向けに寝っ転がった。柔らかな感触の中で、俺は疲労感に包まれていた。考えてみれば、もう24時間以上連続で起きてるわけで、しかも肉体労働もしたわけで、そりゃ疲れてるはずだ。

暗い部屋には照明のようなものはなく、窓から月明かりが漏れさしている。

――あー、この世界にも月があるんだ。俺の知る月よりもなんか明るいなあ。

薄明かりの中で部屋を観察してみると、室内には大きめのベッドが一つと木製の机があり、その上にはなんか石みたいなものや調度品が乗っかっている。壁にはタペストリーがかけられている。飾り気のある部屋で、多分それなり以上には上等な部屋なのだろう。しかし、あの石は何だろう？

一人になってしばらく経ってから、俺は不意におぞましい寂しさに包まれた。

何だよ、畜生。割り切ったと思ったのに、いつもと違う天井を見ているともう戻れないかもしれない日常が急に愛おしくなってきやがる。

朝の遅刻ギリギリのチキンレース。
友人達との下らない雑談。
退屈な歴史の授業。
昼の購買でのパンを巡るデッドヒート。
眠気との死闘が繰り広げられる五時間目。
放課後の買い食い。
友人達とのカラオケパーティー。
何の変哲もない夕食。

そんな当たり前の平和な日々が、今は断絶の向こう側にある。

そして、胸が押しつぶされそうになったとしても、悩みを打ち明けられるような相手もいない。偶然にフェアリーゼと知り合ったとはいえ、やはり他人に過ぎないのだし、何より彼女は高貴すぎる存在だ。やがて自分の手の届かないところに帰るだろう。

孤独だという実感が、得体のしれない塊となってのしかかってくる。

頼れるもののない寂しさ。

どう転ぶとも分からない不安。

怖気が胸の奥からこみ上げ、涙を誘う。

絶望感と格闘していると、不意にドアをノックする音が聞こえた。

返事をしてドアを開けると、フェアリーゼの姿があった。彼女の顔を見て、なぜだか急にほっとした気持ちで満たされる。

「リュウ、どうしたんですか？　こんな真っ暗で――あ」

言って、何かに気付いたようだった。

フェアリーゼが机の上に置かれた石に手をかざすと、『マリクト』と唱える。すると、石から光が放たれて室内を照らし出した。

「そっか、その石は照明魔法のデバイスだったのか」

「ええ。照光石と言います」

と、俺はいい加減「発語」の魔法を切ってもいいことに気がついたので、指輪に意識を向けて「レクト」と唱えた。

フェアリーゼがベッドに腰を下ろす。

「凄いですね、リュウは」

「何が？」

「あんな風に行動できるなんて、です。情けないですけど、私、リュウが動くまで何もできませんでした。まつりごとに携わる者として、失格ですね」

自嘲気味に言う。

「そんなことはないさ。俺だって、過去の経験がなかったら動けなかったさ」
「過去の経験？」
フェアリーゼが聞いてきたので、俺は昔大震災に巻き込まれたときのこと、そして何もしなかったことを悔いていることを話した。
「そんなことがあったんですか」
「ああ」
不思議と、こうして話しているとささくれていた気持ちが安らいでいくようだった。
「あと、これからのことなんですけど……今夜、この部屋で休ませてもらってもいいでしょうか」
と、はにかんで言った。
え？　ちょっと待て。フェアリーゼが俺の部屋で？　そ、そそそそんな恋のステップを三段跳びに、いきなり大人の階段登っちゃうような真似が許されるなんて――
「さっき、部屋を引き払ってきたんです。この状況では一つでも部屋を開けて使ってもらった方が良いでしょうし」
――あ、何だそういうことか。テンション墜落大炎上。
落胆を隠しつつ、俺は疑問をフェアリーゼにぶつける。
「けど、何て言ったんだ？　さっき俺も店の人にそう言ったんだけ

ど、にべもなく拒否されたぞ」
「えー、と……」
フェアリーゼがふと視線を逸らす。
「すみません、夫婦だから一部屋でいい、と言って納得してもらいました」
言われて、なるほどと思った。上手い説得だ。しかし、ここが小さな村で素性を一応隠してるとはいえ、変な噂が立ったりしないのかなあ、とちょっと不安になった。困るのは俺じゃなくフェアリーゼなだけになおさらだ。
だけど、嘘でもそういう方便をサラリと言ってのけるというのは、俺が想像している以上にフェアリーゼは芯が太いのかもしれないな。
しかしそうなると、俺が寝るのは床の上か……ま、いっか。まさかフェアリーゼを床に寝かせられるわけがないし。
「それにしてもリュウって力持ちなんですね」
「見かけによらず、ってか？」
「はい。……あ、いえ」
失言だと思ったのか、フェアリーゼが言い直す。
「あはは、いや、俺だって自分がこんなに力あったなんて驚いてるよ」
「あ、ひょっとして……」
またフェアリーゼが何かに気付いたようだった。

「もしかしたら指輪の効果なのかもしれません」
「指輪の効果？」
「ええ。お渡しした指輪には解語、発語の他に強化や防壁の魔法なんかも込められているんです。強化は文字通り身体能力を高めるものなので、その効果によるものかも」
「なんだ、それじゃ俺の力じゃなくて指輪の効果か」

ちょっと残念だった。異世界効果で本当に力持ちになってたりしたのかなぁ、なんて思ってたのに。ま、世の中そう都合良くはいかないか。

「いえ。普通、強化の魔法が目に見えて現れることは少ないんです。強化は随意型なのですが、効果を体感するには相当に強大な魔力が必要なんです」

説明するフェアリーゼの口調は何だか軽く興奮しているようだった。

「なので、もしそうだとするとリュウは凄い魔力を持っているのかもしれません。確かめてみますか？」

聞いてきたので、俺は頷いた。

「それでは……そうですね、指輪をつけたまま、その、ええと、聖堂のときみたいに、その……私を持ち上げてみてください」

薄暗がりにもフェアリーゼの頬に朱がさすのが分かった。恥ずかしいならそんなこと言わなきゃいいのに……と思ったのだが、部屋の中で力試しできそうなものといったら他にはベッドくらいしかな

いのか。適当っちゃ適当か。

俺は心臓が高鳴るのを押さえ込もうとしながら、フェアリーゼに近づいた。

「それじゃ……失礼」

ことわって、俺はフェアリーゼの背中とひざ裏に手を回して力を込める。華奢な身体がふわり、とはいかないがゆっくりと持ち上がる。何というか、１０〜２０キロくらいのバーベルを持ち上げた感覚に似ているというか。

……女の子をバーベルに例えたなんて知れたらぶん殴られても文句言えないな。

甘い香りが鼻孔をくすぐる。洞窟では焦っていたから気付かなかったが、お姫様抱っこをすると顔と顔がすごい近い距離にくるのな。身体も密着しているし。俺はつい意識してしまい、フェアリーゼから視線をそらす。

しばらく堪能し、理性が本能を押さえつけていられる間に俺はフェアリーゼを下ろした。

「それじゃ、今度は外してやってみてください」

言われるままに指輪を外し、同じように持ち上げようとしてみる。

……ぐわっ、お、重い！　ていうか、浮かない！

フェアリーゼが俺の首に手を回したことで、辛うじて少しばかり浮かせることができた……が。

「ぐ……が……お、重い……。……ごめん、無理！」

俺は諦め、フェアリーゼを下ろした。うへー、お姫様抱っこって本当はこんなにキツイのか。まあ確かにろくに身体を鍛えたことがないわけだし、元々の体力の無さには自信がある方ではあったのだが。

俺は指輪をはめ直す。

「……女の子に重いだなんて、失礼です」

むくれたように言ってきた。うわ、失言。なんつーベタな。ま、その口調は「ダメだぞこのっ」ていうような感じだけど。

「やっぱり、強化の効果でしたね。それと、リュウが大きな魔力を持ってるということも分かりました」

そっか。ってことは、俺も自分の意思で魔法を使ったりできるのかな？

火の玉とか雷撃とかぶっ放してみたいなあ。それとか津波起こしてタイダルウェイブ！　みたいな。

タイダルウェイブといえば、あー、もうＲＰＧもできないんだなあ……と思い、俺は携帯電話のことに気がついた。ゲームが数本ダウンロードしてあるじゃあないか。しかし、考えてみればバッテリーが持たないのだけれど。

やっぱ、バッテリーは何とかしておきたいなあ。

「あと……あんな風に抱っこされるのって、いいものですね」
と、舌を出して照れたように言った。その様子があまりにも可愛らしく――
「ぷ」
俺は吹き出してしまった。笑う俺に、フェアリーゼもクスクスと笑みをこぼす。
それにしても、文字通りの”お姫様”抱っこ、てなわけか。
「もう、笑うなんて失礼です」
「はは、ごめんごめん。つい」
「でも……不思議です。リュウが相手だと、飾らずにいられるというか」
「そっか」
言われて、俺はフェアリーゼの立場を考えてみた。お姫様ってくらいだから、立場柄あまり気楽に話せる友達とかもいないのかもしれないな。側近とかだってご機嫌伺いしてるばかりだろうし。
その一方で、俺はフェアリーゼが”お姫様”だと聞いたとしても「へーすごい」と思う程度のものだ。人対人のマナーくらいは当然のこととして気をつけるが、必要以上にへりくだるつもりも無かった。なんつーか実感無いし、そうする必要があるとも思えない。
フェアリーゼはそこら辺のことを言ったのかな。
「城では気を許せる人なんて、お父様か第三王女のエストくらいしかいませんから。……ねえ、リュウ」

「ん？」
「私と、友達になってもらえませんか？」
「何言ってんだ」
俺がそう言うと、フェアリーゼが露骨に悲しそうな顔をする。
「――もう、友達だろ」
フェアリーゼが微笑む。
「ありがとう」
そのついでに、俺はずっと心に引っかかってることを言おうとした。
「……あと、その、なんだ。一つ、謝らなきゃならないことがあるっていうか……えーと、ごめん。聖堂でやったこと、わざとじゃないんだ。アクシデントというか、事故というか、……だから、とにかくごめん」
頭を下げる俺に、フェアリーゼがきょとんとした表情を見せる。
「聖堂でやったこと……」
しばらくして、フェアリーゼの顔がリンゴよりも真っ赤に染まる。
「――っ！」
「ごめん」
「……リュウ。顔を上げてください」
「え？」

と顔を上げると、平手がパシィーンと飛んだ。突然の衝撃に、脳天がクラクラと揺さぶられる。
くぁー、効いた！

「これで、おあいこです」

ちょっとむくれたような、でも心底怒ってはいないような、そんな複雑な表情だった。

「……私だって、リュウがわざとじゃないってことは分かってます。だから許しますし、これで終わりです。蒸し返したら、今度は本当に怒りますよ」
「ああ、分かった」

もう、ごめんとは言わない。言ったらきっと怒るだろう。これであいこなのだから。

「それと……あそこで見たことはきれいに忘れてください」

んな無茶な、と言いたくなってしまうが、詰め寄ってにらみ上げるフェアリーゼに負けて「ハイ」と返事をしてしまう。

「それじゃ、そろそろ寝ましょうか」

言われて、俺は無意識に時計を探してしまう。壁掛け時計があるのを見つけて、俺は違和感に気がついた。自分の知る時計が１２分割で２４時間を計るのに対し、この時計は８分割しかない。８時間か、その倍数で一日が進行するということか。うーん、自分の常識が通用しないなあ。そもそも、一日の尺自体が同じっていう保証も

ないわけか。

ま、いっか。時間がどうだって。少しずつ慣れるさ。

フェアリーゼが布団に潜り込む傍ら、俺は床に寝っ転がった。絨毯が敷いてあるから、そんなに寝苦しくは無さそうだ。

「何してるんです？」

「何してる、って、寝ようとしてるんだけど」

「床でですか？　ベッド、空いてますよ？」

言って、ぽんと布団を叩く。見てみると、フェアリーゼはベッドの片側に寄ってスペースを開けていた。

はい？　一つのベッドで、ですか？

いやいやいや、年頃の男女が一つのベッドで寝るなんてとんでもない。それともあれですか、これは遠回しに誘っておられるのですか？　いや、そう言われても心の準備ってものが――ん？

俺ははたと気付いたことがあった。

時は江戸。大衆浴場は基本的に男女混浴という、今を生きる俺の常識では考えられないシステムになっていたそうな。つまり何が言いたいのかというと、要するに、フェアリーゼに他意は無いんじゃね？　ってことで。

俺の常識でこそ男女同衾はすなわち愛を語らうことと同義なわけだが、風土も価値観も違うこの世界では特に深い意味は無いと考えるのが正しいように思える。いや、本当は意味があるのかもしれな

いけどさ。

実際、俺を見つめるフェアリーゼは無垢な表情にクエスチョンマークを浮かべているような感じだ。

考えるのもアホらしくなって、俺は素直にフェアリーゼの横に潜り込んだ。

体温と鼓動が微妙な距離を通じて伝わってくるようで、俺は思わずつばを飲む。

「それじゃ電気、消しますね。レクト」

照明が落とされる。窓からこぼれる月明かりだけが、うっすらと室内を照らし出している。

「それじゃ、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

気持ちは割り切っても、寝付くには大分時間が必要なようだった。

……つーか、寝れねぇっつーの。

第6話：思惑

窓から漏れさす陽光が意識へと割り込んでくる。気怠さの中、俺は目を覚ました。

寝ぼけ眼をさすり、大きく伸びをする。外出着のまま寝てしまったから、身体の節々が痛むというか、どうにもさっぱりしない。

結局、昨晩は寝付くのに随分と時間がかかったような気がする。隣ですやすやと眠るフェアリーゼを否が応でも意識してしまっていたからだ。そんな寝顔は可愛いなんてレベルじゃなくて、「この野郎人の気持ちも知らないで」とか思ってしまうぞ。

……シチュエーション的には美味しすぎるけどさ。

しかし男性的な欲求とは別の意味で、フェアリーゼがそばにいてくれたのはありがたかった。見知らぬ土地での最初の夜、一人でいたらどんどんと悪い想像ばかりが膨らんで、押しつぶされそうな中で歯を食いしばってなきゃならなかっただろうからだ。

と、ふと横を見るとフェアリーゼはいなかった。もう先に起きて部屋を出て行ったのだろうか。とすると、一体自分はどれだけ寝ていたのだろうか。まさか自分を置いて出発してしまったのでは――そんなことは無いだろうと思っても、不安になってくる。

俺は手櫛で寝癖を落とし、着崩れた上着を直して部屋を出た。

階段を下りて一階のロビーに出ると、昨晩とは違って人影はまばらだった。ロビーは受付の他に、元の世界で言う喫茶店のような作りになっていて、数人の客が席について食事を取っている。しかし

その密度から行って、今が食事時とは思えなかった。とすると、かなり寝過ごしたのか。

「おや、起きてきましたかな」

言われた方を向くと、席に座ったカイエルの姿があった。――って、兜を取ったカイエルって黒のロンゲだったのかよ！

こりゃびっくりだ。茶髪にしてサングラスかけて湘南あたりをうろつけば立派なサーファーだぞ。

「おはようございます」

俺はカイエルの対面に座った。

「昨晩はよく眠れましたかな？」

言われ、俺はドキリとした。いや、別にやましい気持ちがあるわけではないのだ。ちょっとフェアリーゼと一緒に寝たというだけで、彼女には何も手出しをしていない。

……一緒に寝ただけでやましい出来事だってツッコミは無しの方向で。

「フェアリーゼはどうしたんです？」

朝から姿を見ないので、聞いてみる。

「大分前に起きていらっしゃいましたが、アレクの付き添いで今は医者に診てもらいに行っておりますよ」

アレクとは、もう一人の騎士だ。カイエルより若く、無口な印象がある。

「医者に？」

「ええ。足の怪我が酷くなっておられたので」

ったく、無理すんなっつったのに。

どうも、あのお姫様は他人のこととなると無理をする傾向があるようだ。多分、昨日も痛いのを我慢して手伝いをしていたんだろう。俺も俺で自分の仕事に没頭していたわけなのだが、気付いてやれなかったというのは少し情けなく感じていた。

っていうか、ひょっとしなくても俺のせい？

「どのくらい酷いんですか？」

「ほとんど歩けない程です。地震で人的資源も不足しておりますから、姫様も最初は行かないと駄々をこねておられましたが、アレクに無理矢理引きずって連れて行かせました。将来を担う御身、万一にも後遺症など残してはいけませんからな」

そんなカイエルの物言いに、俺は可笑しさを感じていた。フェアリーゼに対する敬意は確かに感じるのだが、駄々をこねるだとか無理矢理引きずるだとか、臣下の物言いとしてはミスマッチというか何というか。

話していると、ウェイトレスらしき女性がそばにやってきて水を置いた。

「何かお召し上がりになりますか？」

訊ねられ、カイエルがバゲットとオニオンスープを二つ、注文する。俺は気になって壁に掛けられたメニューを見てみる。半分以上に「×」が付けられ、更に値段にも訂正が入り、通常価格の数倍になっている。地震の影響で物資が高騰しているのだろう。

「ところで」

カイエルが俺の方に向き直った。俺は喉が渇いていたので、コップの水に口を付ける。

「昨晩、何か過ちを犯したりはしていないでしょうな？」

ぶっ、と俺は水を吹きだしてしまい、危うくテーブルを汚すところだった。

あ、過ち！？　っていうとあれですか、カイエルは俺がフェアリーゼを傷モノにでもしたりしたんじゃないかと疑ってるわけですか？

なんでカイエルが知って――って、ひょっとして部屋の外で見張りをしていたのか。万一にも暴漢が入ってこないとも限らないだろうし。とすると、フェアリーゼが俺と同室だったことも知ってるわけか。しかし、それをあっさり許すものなのか？　この世界の常識は知らないが。

だがしかし実際のところ、俺に後ろめたい部分は全くない。まあお姫様抱っこだの同衾だの端から見ればキャッキャウフフかもしれない程度のことはやったが、天地神明に誓ってやましいことは何もしていないと断言できる。

……俺が寝ぼけて変なことをしていなければ。自信ねえなあ。お

触りの一度や二度くらいはしてそうだ。

「何もしていません」

「本当に？」

「はい」

断言する俺の瞳には一点の曇りも無いはずだ。しばし沈黙が流れ、カイエルが深いため息を吐いた。

俺は改めてコップに口を付ける。

「……過ちでも起きていれば良かったのですがな……」

今度はブハァと吹きだした。

ちょ、ちょっとまてオッサン、一体何をのたまうか！？

過ちが起きていれば良かった、って、要するに俺とフェアリーゼが、その、深い仲になっていれば良かったって事だろ？　一国のお姫様が、そんな簡単に抱くの抱かれるのされていいものなのか？それとも、価値観が全く違うとでもいうのか？

あーもう、訳分からん！

「……そもそもカイエルさんは、俺が無理矢理……その……過ちを犯してしまうんじゃないかとは思わなかったんですか？」

「もしもの時は姫様をお助けする心づもりでしたとも」

まあ、多分部屋の前で耳をそばだてていたのだろう。無理矢理事に及ぼうとしたりすれば、室外にすぐ音が漏れただろうし。叫べば一発だ。

「しかし、合意の上であればそれは姫様の望み。止めるつもりはありませんでしたとも。……まああの姫様ですから、大瀑布が逆流するよりもありえなかったことだろうとは思いますがな」

半分は分かった。しかし、抱かれればいいなんていう話には結びつかないぞ。

「だからって、過ちが起きていれば良かった、ってのは……それに、自分で言うのも何ですけど、どこの馬の骨とも知れない奴ですよ？」

天上人設定なんかもうどうでもよかった。そう言うと、カイエルが軽く笑った。

「まあ、私どもからすれば馬の骨かもしれませんな。しかし昨日の振る舞いを見て、信じるに足る人物なのかもしれないと私なりに感じたのです。一応、警戒は緩めませなんだが。それと――姫様がリュウ殿と話しているとき、随分と表情が朗らかだと感じたのですよ」

あ、やっぱり天上人設定信じてない。

「リュウ殿は姫様を単なる深窓の令嬢と思うかもしれませんが、人を見る目は確かで、欺瞞などはたちまちに見抜かれます。私はその慧眼を信じることにしたのです」

王族ともなるとやっぱり顔色伺いも多いわけで、その中で利用するのされるのってのもあるんだろうな。そんな中でフェアリーゼは人を見る目を得た訳か。しかしそれって自分の身を守るためであって、なんだか悲しいよなあ。

「それに、姫様にはもっと自由になっていただきたかった。リュウ殿も分かるでしょう。あの性格ですから、何でも背負い込もうとしてしまう。姫様が他の者の幸せを願うように、我々も姫様の幸せを願っているということは分かっていただきたいのです」

俺は黙って頷いていた。

「過ちでも起きればいい、というのは――」

言いかけて、口ごもった。

「私が言葉を並べるよりは、リュウ殿がご自身で王宮で確かめてくだされ」

カイエルは多くを語らなかった。しかしその口ぶりからすると、フェアリーゼが何か辛い立場に置かれている事がうかがえる。王族ともなれば、厄介なしがらみもあるのだろう。

しかし、俺に何ができるのだろう？

異世界人というだけで、何の力もない。地位もない。そんなストレンジャーが、どれほどのことをなせるのか。

分からない。

分からない、が――

友達が苦しんでいるのなら、放っておくことはできない。自分に力が無いのなら、力を得るため努力する。なせるべき事をなす、じゃなくて、なせるようになる、だ。

第7話：王都へ続く道

二つの太陽の高度も大分高くなった頃、フェアリーゼを乗せた御車が宿の前に着いた。俺とカイエルはそれを見て、宿を後にすることにした。

表に出ると、道路の両脇に人だかりができていた。一応フェアリーゼは「ただの町娘」ということになっているのだが、その身なりが身なりなのだし、多分「何か偉そうな人」が来てると噂になったのだろう。

フェアリーゼの姿は見えないが、多分籠の中に入ってるのだろう。

俺は昨日と同じように御者台に座った。木のゴツゴツとした感触がちょっと痛い。昨日も座りっぱなしだったしなあ。

カイエルも宿に留めてあった馬を引っ張ってくる。

一行がゆっくりと進み出した時、わあっと歓声が上がった。振り向いてみると、フェアリーゼが横窓のカーテンを開き、その顔を人々にさらしていた。手を振るたび、歓声が大きくなるようだった。

やがて村の中心を離れ、のどかな風景の広がる草原へと出る。

今日も空は澄み渡り、うららかな日差しが大地に彩りを添えている。この世界に季節という概念があるのかは分からないが、青々とした緑とぽかぽかとした陽気からするに春であるように思えた。

少し進んだところで、フェアリーゼの声がした。

「すみません、ちょっと止まってもらえますか？」

その言葉に御者は馬車を止めた。先導していたカイエルとアレクも馬を止めて、フェアリーゼの方を振り向く。

フェアリーゼは外へ降りようとしていたようだったので、俺はそばによって肩を貸そうとした。

「怪我が痛むのか？」

「いえ。私も前に座ってもいいですか？」

「前に？」

この御者台は三人掛けだから、御者を挟んだ俺と反対側にもう一人座る余地はある。

「はい。外で見る景色はどんなものなのかなあ、って」

籠はちょうど視線の高さでカーテンを開けられるようになっているみたいだが、そこからの視野はそんなに広くなさそうだ。陽の光も爽やかな風も感じることはできないのだろうし、確かにあんまり面白くなさそうな気がする。携帯ゲーム機でもあれば別なのかもしれないが、この世界にそんなものがあるはずもない。

フェアリーゼがこんな風に籠に乗って移動するのは、快適さの関係もあるのだろうが、あまり衆目に触れないようにするといった意味合いも強いように思える。確か、色んな国で昔はそんな感じだったと聞く。しかしここは人気の全くない道なのだし、別に外に出てもいいんじゃないかなという気がした。

カイエルに聞いてみようかとも思うが、何か「これこれこういうわけで、どうでしょう？」なんて聞くのも間抜けな気がした。ま、いいや。ダメなら何か言ってくるだろうし。

俺は例によってフェアリーゼをお姫様に抱っこして、御者台の片側に座らせた。俺もその反対側に座る。二人して御者を挟み込んでる形だ。

……すっげえやりにくいだろうなあ、御者さん。傍目にも縮こまっちゃってるのが分かるぞ。フェアリーゼと微妙に距離を取ろうとしているのが微笑ましい。

カイエルが前を向き直したのを合図に、俺たちは再び前に進み始めた。

□　■　□　■　□　■　□　■

馬車は林道に入っていた。木漏れ日が景色を鮮やかに照らし出す様はどこか幻想的で、俺は写真を撮りたい気持ちになった。しかし、貴重なバッテリーを風景写真で無駄にするわけにもいかない。フェアリーゼを撮るってんなら話は別だが。

せっかくの１２００万画素高性能カメラ付きケータイなのになあ。とほほ。

「なあ、フィー」

俺はフェアリーゼに話しかけた。フェアリーゼはこっちを向いて

顔に疑問符を浮かべる。

「フィー？」

「ああ、愛称で呼んでみたかったから。フェアリーゼだから、フィー。変かな？」

それにフェアリーゼだと何となく長いし、他人行儀な感じがしたからだ。そう言うと意図に反して名前をけなしていると捉えられかねないから、言葉には出さないが。

「フィー……」

フェアリーゼは前の方を向いて、しばし考えるような素振りをしたかと思うとにやけた表情に変わり、しばらくして今度は破顔する。ころころとよく変わるなあ。面白い。

「おーい。フィー。フィーいー。フィーちゃーん、フェアリーゼさーん」

「……は、はい！？」

何度か呼んでみたら、慌てた様子でこっちを向き直した。うんうん、自分の世界から引き戻されるのって慌てるよなぁ。俺も授業中に考え事をしていて教師に「御子柴！」なんて言われたりして焦ったりしたもんだ。そして廊下に立たされる、と。いつの時代のアニメだよって話だ。

しかし、フェアリーゼのそんな仕草が可愛すぎる。反則級だろ。

「どうかな？」

「ちょっと……恥ずかしいです」

はにかんで言った。

「おし、否定しないってことは構わないってことだな」

俺はちょっと強引に言ってみる。少なくとも嫌そうな顔はしていないから大丈夫だろう。

「はい」

めでたく愛称が決まったところで、俺はちょっと思っていたことを聞いてみることにした。

「ところでさ、ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「何です？」

「火とか雷とか、そんな系統の魔法って俺でも使えるようになれるかな？」

やっぱ男なら誰しも、かめはめ波を撃つことを夢見てポーズを取ったりしたことがあるだろう。少なくとも俺の友人はみんなやったことがあると言っていたぞ。男子たるものの通過儀礼だ。かめはめ波とは言わないまでも、攻撃魔法が使えるなどとなればそれに食いつかない手はない。なんせ男のロマンなのだから。

「ええ、使えると思いますよ」

「本当！？」

やった。これは心が躍るってもんだ。オラ、ワクワクするぞ。

「はい。私がお教えすることもできなくはありませんが……多分、

エストの方がそういうのは得意だと思います。それに、お城ではまとまった時間が取れないと思いますので」

エスト。第三王女、だっけ。どんな娘なんだろう。

「私の方からエストにコーチをお願いしておきましょうか？」

「いいの？」

「ええ。あの子そういうの大好きですから、多分嬉々として乗ってくると思います」

へえ、そうなんだ。なんかフェアリーゼのイメージとはちょっと違うなあ。活発な子なのかな？

「フィーもそういう魔法って使えるんだ」

「いえ、私は四大属性魔法は苦手なんです。女性として、ちょっと情けないんですが……」

フェアリーゼが気恥ずかしそうに言った。

女性として情けない？　四大属性魔法を使えることが女性のたしなみってことなんだろうか。何のためだろう。護身術、とか？

ちょっと考えていると、フェアリーゼが話を続けた。

「家事をする時に必要になるんです。例えば料理の時には火の魔法を使いますし、食物を冷凍保存なんかする時には氷の魔法を使ったりします。他にも、色々と」

「あ、なるほど」

コンロと冷凍庫ってわけか。しかしそう考えると、この世界じゃエネルギーレスでそんなものが使えるわけで、そういう意味では元

の世界よりも進んでるなあ。エコ極まれり。元の世界にそんなものがあったら業種の十や二十はぶっ潰れるな。

しかしフェアリーゼは王女なわけで、主婦としてそういう技能が必要になることは無い気がする。趣味で料理程度をたしなむことはあるのかもしれないが。

「ひょっとして、主婦に憧れてたりするの？」

俺が聞くと、フェアリーゼは少し悲しそうに目を伏せた。

「……いえ。それは望んではならないことですから」

その口ぶりからすると、憧れていると見て間違いないのだろう。しかし王位継承者としての義務があるから普通の人の生活を望んではいけない、ってとこか。難しい立場だなあ。

何となく、気まずい沈黙が流れる。

それに耐えかねたというわけではないが、俺はもう一つ話を切り出すことにした。

「一つ、頼みがあるんだけど」

「何です？」

「城での俺の扱いなんだけど、その、何というか……例えば単なる旅人とかにしてもらえるかな。俺、何の力も持ってないわけで、天上人とやらみたいに言われるとちょっと困るかもしれないなー、とか思ったり。難しいかな？」

ひょっとして俺が城に行ってもいいのは天上人っていうのが前提かもしれないわけで、そうするとこの頼みは無理な注文ということ

になる。しかし、そんな生き仏か何かみたいに扱われるのは正直ご免被りたい。

フェアリーゼがクスリと笑った。

「分かりました。上手く言っておきますね」

「ありがとう」

良かった。これで安心して過ごせる。

そんなやりとりをしていると、カイエルたちが馬を止める。御者もそれに気付いて馬車を止めた。

「何かおります」

カイエルが言った。

数十メートル先の右手の茂みに何か黒いものが見えた。それは林の中から林道の方に向かってもぞもぞと動いているようだった。

「魔物のようですな」

しばらくして、それは林道へと姿を表した。馬よりもずっと大きい図体を持った、カブトムシとクワガタをベースにしたような黒い怪獣だ。

その姿には確かに見覚えがあった。

こちらに襲いかかってくるかと思われたが、俺はこの御車に結界魔法などが施されていることを思い出した。みんな黙っているのは

多分、気取られないようにするためなのだろう。

指図されるまでもなく俺も黙ったまま、その魔物が通り過ぎるのを待った。しかしそんな思いとは裏腹に、馬車を引いている馬が突然いきり立ち、いなないた。

黒い怪物がのそりとこっちを向く。

「ちぃっ、気付かれたか！」

カイエルがそう吐き捨てると、アレクと共に馬を下り剣を抜いて怪物の方へと走り出した。程なくして接敵する。

カイエルが剣を構えると、切っ先からさらに光のようなものが伸びた。それを袈裟斬りに一閃する。光は怪物に食い込み、その身体からは緑色の体液が吹き出した。カイエルは体液を一歩引いて回避する。体液は地面に飛散し、「ジュウ」という音と共に煙をあげた。

怪物が前足を大きく上げ、カイエルめがけて打ち下ろした。カイエルはさらに一歩引いてそれをかわすと、今度はアレクが一歩踏み込み、炎をまとわせた剣を横薙ぎにした。

紅蓮が軌跡となって走り、怪物がたまらずのけぞる。それを隙と見たのか、離れた距離からカイエルが今度は逆袈裟に剣を走らせた。空を切った剣からは光の軌跡が放たれ、怪物を切り裂く斬撃と化した。

続けざまにカイエルとアレクが光と炎の斬撃を加える。怪物の身体にそのたびに深い傷が刻まれ、体液が飛び、辺りの木々を焦がし、茶色に枯れさせ溶かし散らす。

それを数度繰り返した後、カイエルとアレクは手を止めた。

怪物はその場に硬直したかと思うと、やがて「ズゥン」と音を立ててその場に倒れた。

その戦いぶりに俺はすっかり見とれていた。光と炎が織りなす華麗な饗宴だ。そして、二人が「指折りの騎士」であるという意味を改めて実感した。あの巨大な怪物をものともせず、息を切らした様子さえ見せないのだ。

だがそんな感嘆の気持ちもさることながら、一つ気になっていることがあった。

「あの怪物は？」

「グラベグという魔物です。凶暴ですが、動きが遅いのでさほど危険ではないと言われています」

なるほどね、凶暴な魔物か。ってことは、廃病院での判断は正しかったわけだ。そして同時に、奈美と理子が無事に逃げられたかどうかが心配になってくる。

「実はさ、あの魔物、俺のいた世界でも見かけたんだよ」

「リュウの世界にもいるんですか？」

「いや、聞いたことがない。俺もこっちに飛ばされる直前にはじめて見たんだ」

そう、元の世界には絶対にいないはずの生物。それが存在していたということは、考えられる結論は一つ。

俺と似たように、この世界から飛ばされたということだ。

そしてそれは同時に、一つの可能性へとたどり着く。すなわち、元の世界に帰れるかもしれないということだ。ゼロとそうではないものとの間には絶対的な隔たりがある。そういう意味で「帰れるかもしれない」という事実は大きな意味を持つ。

しかし昨日の自分であれば可能性の多寡は別としても帰ることを考えただろうが、今日になって気持ちは随分と変わっていた。少なくともフェアリーゼが何に悩んでいるのかを確かめるまで、俺は帰る気にはなれないだろう。仮に今、例のブラックホールが出現したとして、俺はこの世界に残ることを選ぶような気がする。

かめはめ波……もとい、四大属性の魔法が使えるなんて特典も付くしな。うん、ロマンを体現するまでは帰れないよなあ。実際に目の当たりにしてしまったし。

そう思い、俺は帰れる可能性については考えないことにした。

「それにしても……グラベグも、人を襲ったりしなければ危害を加えられることも無いのに」

フェアリーゼが悲しそうに呟いた。彼女の事だから、こんな怪物に対しても痛ましく思っているのだろう。

「ところでさ」

俺は一つ、重大なことに気がついた。

林道にはその幅ほどもある、巨大な怪物の死骸。その下からは緑

色の体液がジワジワと漏れ出て、大地を腐食していっている。

「……どうやって先に進むんだ？」

俺の質問に対し返ってきたのは、諦観を表す沈黙だけだった。

第8話：キリアス

結局大きく回り道をすることになったが、日が沈みかけた頃には王都近圏であることを示す砦まで到着することができた。フェアリーゼは既に御者台から籠の方へと戻っている。

砦の下、俺たちの前方でカイエルが門番の兵士と何やらやりとりを交わす。兵士の一人が籠の中を確認し、敬礼の姿勢を示した。そして、馬に乗った兵士が王都へと向かって駆けていった。多分、フェアリーゼが帰ってきた事を示す早馬か何かだろう。

俺たちは王都へ向かって再び進み出す。

フェアリーゼから聞いた話だと、王都は城壁に囲まれた都市部と、その周囲で砦に囲まれた近圏から為るらしい。都市部には約１万人が居住しているとのことだ。

王都近圏に入り、家屋がぱらぱらと見えてきた。見る限りでは、倒壊というような致命的な被害を受けている建物は無いようだ。ノーラ村からは半日程度の旅程だから、移動した距離は５０～１００ｋｍってところだろうか。この程度離れると地震の影響は大分変わってくるのだなあと思った。

道の脇には畑や水田なども見え、葉っぱやまだ青い稲なんかがところ狭しと並んでいる。

――ん、稲！？

ってことは、この世界にも米があるってことか。よっしゃあ。

しかし、考えてみると昔は米は貴重品だったと聞く。穀物としては粟なんかが主流だったんだっけ？　そうすると、この世界でもやはり高級品って可能性が高いのか。

しかし日本男児（女子もか）たるもの、米を食わねば力は出ない。ここは何としてでも常食にしたいところだ。そのためにはお金が必要になる。ってことは、だ。やっぱり「発明王計画」を本気で考えなければならないんだろうか。

いやいや、ここは全く知られていない世界での経験を利用して作家なんてのもアリか。あるいは、音楽家ってのも可能性がありそうだ。学校での知識を利用して学者……ってのは稼げる職業ではないか。多分。

それにしても……腹減った。こっちに来てから、一食あたりの量がとても少ないことには少々参っていた。育ち盛りは過ぎてきたとはいえ、こう続くとさすがに酷というものだ。フェアリーゼは見るからに小食そうだからいいのかもしれないが、カイエルとアレクはよく持つよなあ。体重に悩める現代人を連れてきたら一発でダイエットできるんじゃねえの？

そんなことを考えたりあれこれ妄想したりしているうちに、城壁が見えてきた。

結局、城での俺の扱いは「学者」ということになった。学者として教養を振りまくため、城に客人として滞在するとのことだ。

この世界の科学水準を推察するに、中世ヨーロッパに例えると12世紀～15世紀相当であるように思えた。まあ、あくまで推察であって、その時代に存在しない技術がぽこっと存在しちゃってたり

する可能性はあるのだけれど。魔法の関係もあるし。

一方、俺が学校で勉強してきた物理生物化学（かなり趣味も含む）は１８世紀～２０世紀の知識だ。ハッタリをかますには十分だ。ただ理系科目でも数学だけは微分積分法が早々に発見されていたりするから、多分通用しないんだろうなあ。

普通だったら高校１年の段階で知っている内容ではないのだが、そこは中高一貫の威力というものだ。うん、理系科目嫌いじゃなくて良かったぜ。

城壁をくぐり都市部に入ると、石造りの建物がこれでもかという程に密集した光景があった。入る前、遠目に見て城壁の直径はせいぜい２～３ｋｍ程度のようだったし、そこに１万人が居住するとなると相当に過密な状態となるのだろう。こりゃ伝染病なんか発生したら悲惨なことになるわけだ。

夕暮れだが人通りはそこそこで、そばに寄るとほとんどの者がこちらを振り向く。王都とはいえ、こんな物々しい御車はやはり珍しい存在なのだろうか。ふと、普段フェアリーゼが城下に出たりすることってあるんだろうかと思った。

そして道路の向こう側に、民家の数倍の高さはあろうかという石造りの荘厳な建物が見えた。王宮に違いない。

更にしばらく進み、馬車は王宮を取り囲む川のほとりに出た。川には大きな吊り橋がかけられていて、そこを通して行き来するようになっているようだ。王宮の周りには草花が茂り、広葉樹らしき木々が整然と並んでいる。

吊り橋の上に兵士たちの一団があった。その中央に、軽装鎧をまとった金髪癖毛の青年の姿があった。年の頃は二十代前半といったところだろうか。目と口角はつり上がり、お世辞にも好感が持てるとは言い難い笑みを浮かべている。

その正面で馬車は止まった。そして、集団の奥からかしこまった服装の女性が数名出てきて籠のそばへ小走りに近づき、扉を開けた。侍女というやつだろうか。

「お疲れ様でした、フェアリーゼ様」

その一人が言った。カイエルとアレクは馬を下り、一歩離れた距離に立っている。

「すみません、肩を貸していただけますか」

フェアリーゼが侍女に言った。肩を借りて、籠から降りる。

「お帰りなさいませ、フェアリーゼ様」

金髪の青年がフェアリーゼのそばに歩み寄り、両手を広げて言った。

「出迎えご苦労様です、キリアス」

しかしキリアスと呼ばれた青年は眉をひそめ、たずねる。

「その足、どうなされました？」

「昨日の地震の際に転んでくじいたのです」

「……ふん」

キリアスが鼻を鳴らし、腕組みをした。しばし沈黙が流れ、言う。

「カイエル」

「は」

「兜を取れ」

カイエルはキリアスに言われたとおり、兜を取る。キリアスが一歩カイエルに近づいたかと思うと、その拳でカイエルの顔面を殴りつけた。勢い、カイエルは吹っ飛ばされて尻餅をつく。それを見て、フェアリーゼが口を手で覆った。

「カイエル！」

「フェアリーゼ様は黙っていてください。――カイエル、貴様がついていながら何だこのザマは」

「――は、申し訳ございません」

「ふん、これだから下民出の者は。降格も覚悟しておくんだな」

キリアスの言葉に、カイエルはただじっと耐えていた。

殴られたカイエルの口元には血が糸となって流れていた。吹っ飛ばされる程の衝撃なのだ、口の中を切ったのだろう。歯が折れたりしていなければいいのだが。

俺はそのやり取りを見ていてやるせない気持ちになってきていた。フェアリーゼの怪我がカイエルの不手際だと言われ責められることは、仮に百歩譲って仕方ないとしよう。しかし殴られ、あまつさえいわれのない罵倒を受けるようなものなのか？

俺は御者台を降り、キリアスに言った。

「おい、ちょっと待てよ！」
俺の声にキリアスがこっちを向き、なめ回すように見る。
「何だ貴様は」
誰何の声をあげる。しかし俺は答えずに、続けた。
「カイエルさんが殴られるほどの不始末をしたかよ。どう考えたって不可抗力だろ！」
「不可抗力？」
「ああ」
俺の言葉に、キリアスが鼻を鳴らした。
「不可抗力などというものは存在しない。いかなる状況であろうと、それを予測し守るのが従者のつとめだ。言い訳は許されない」
なんだって……？
「ふざけ――」
「お止めなさい！」
俺が言いかけたとき、フェアリーゼが横から制止してきた。
「フェアリーゼ様、この者は？」
「旅先で知り合った学者の方です。見聞を広げていただくため、王宮にお招きしたのです」
「学者――こんな若造が？」

「ええ」

キリアスはまた鼻を鳴らした。

「学者風情が、出過ぎた真似を。虚業で人々を幻惑する痴れ者が」

キリアスが俺の胸ぐらをつかんできた。

「フェアリーゼ様に目をかけていただいたからといい気になるなよ。貴様らなど、王の支援が無ければ食うことすらままならない穀潰しだと知れ」

俺はいい加減我慢の限界に達しようとしていた。俺個人が罵倒されるのならまだ我慢のしようもある。しかし難癖や身分職業の蔑視など、こいつの言い方にはあからさまに見下したような差別感情が感じ取れる。俺はそういうのが大嫌いなのだ。

「この、さっきから――」

「リュウ！」

俺はフェアリーゼの声に言葉を止めた。

「これは私たちの問題です！　お前の与するところではありません！　下がりなさい！」

「――っ！」

俺はフェアリーゼが声を張り上げるのをはじめて聞いた。悲鳴とかそういうのは聞いたことはあるが、それとは違う、明確な”自分の意思”としての叫びだ。

それだけに、俺はショックだった。心のどこかでフェアリーゼは自分の味方をしてくれるのだろうと期待していた。しかし、実際にはそうではなかったからだ。俺を叱責する強い言葉。

どうして、こんな性格が最悪な男なんかの味方を――

俺はしばし、呆然としていた。信じていた者に裏切られたような、そんな錯覚すら覚えさせる。

呆けている間に、キリアスとフェアリーゼは俺に背を向けて、ゆっくりと王宮の方へと歩いていった。

そして一瞬、フェアリーゼの横顔が俺の方を向いた。その表情は悲しそうな、切なそうな、どこかやるせないものだった。

俺を叱責しておいて、どうしてそんな悲しそうな顔を――

――そうか。

気づき、俺は自分の思い違いを心から恥じた。

フェアリーゼはキリアスの味方をしたのではない。俺を助けたのだ。俺があのままキリアスに突っかかっていれば、立場がどんどんと悪くなったことだろう。そしてもしもフェアリーゼが俺の味方をすれば、それはキリアスの敵愾心を煽るだけだ。だからフェアリーゼは俺を制止しようとした。

もう一つ、手がかりがあった。

フェアリーゼは俺のことを「あなた」じゃなく「お前」と言った。

フェアリーゼの性格からして、人のことを「お前」などと呼ぶとは考えにくい。だからあれはフェアリーゼとしての言葉じゃなく、第一王女としての言葉だったのだろう。

そう思うと、一瞬でもフェアリーゼを疑ってしまった自分がたまらなく情けなく思えてきた。これまでの全てを否定するようなことを思ってしまった自分が。

同時に、フェアリーゼの辛さも感じ取っていた。

あの優しいフェアリーゼが、俺を傷つけるかもしれないと知りながら叱責してきたのだ。その言葉は自分自身を傷つけないはずがない。あのやるせないような表情が全てを物語っている。

結局、俺はフェアリーゼを傷つけてしまったのだ。

「リュウ殿」

落ち込む俺にカイエルが声をかけてきた。

「気を落とさないでくだされ。きっと、リュウ殿の身を案じてのことです」

「……ええ、分かってます」

俺は項垂れた。

「俺、自分が情けないです。一瞬でもフェアリーゼを疑って、傷つけて――」

独白する。

「あとでフェアリーゼに謝っておきます」

できることなら、できるだけ、早く。

このまま、フェアリーゼを傷つけたままでいたくなかった。

第9話：エスト

朝、俺は小鳥のさえずりで目を覚ました。長旅で疲労がたまっていたのか、眠気はまだ俺を布団に縛り付けようとしていた。しかしこれ以上横になっていてもかえって調子を崩しそうだったので、取りあえず起きることにした。

……今何時だ？

そう思い壁掛け時計を見てみると、三時頃を指していた。うん、ダメだこりゃ。こっち基準の時間に慣れなきゃいけないな。

客人として俺に与えられた部屋は、ぱっと見１２～１６畳程度の広さのものだった。おとといの宿よりも立派な作りで、元の世界だったならアンティークとして通用しそうな立派なテーブルや棚、本棚なんかが備え付けられている。

ベッドも結構上等なシロモノらしく、柔らかい羽毛の感触が全身を包み込むような質感だった。スプリングこそないものの、俺が普段寝ていたベッドよりもよほど上質だ。なんせ９８００円くらいのパイプベッド使ってたからなあ。

何というか、ひょっとしなくてもこの部屋ってかなり上等なんじゃ？　と思ってしまう。偉い人を迎えたりするための部屋だったりとか、しないだろうなあ。場違いとか嫌だぞ。

俺は昨日の夜、メイド服からフリルをとっぱらったような服装をした案内の女性に頼んで、寝間着を貸してもらっていた。外出着で寝ても疲れが取れないからだ。

しかし下着――Tシャツとトランクスは着ていないと落ち着かないし、換えも無いわけなのでそのままだ。これで三日目。うーん、そろそろヤバいかなぁ。肌着なだけに。

ヤバいといえば、俺自身もそうだ。昨日風呂に入ってないし、そろそろ臭いはじめてもおかしくない。いかんいかん、これは重大な問題だぞ。フェアリーゼに「臭いです」なんて言われたら悶死しかねない。あとで風呂のことは聞いてみよう。

結局、昨日はフェアリーゼには会うことはできなかった。というよりも、どうやって会ったらいいのか分からないってのが本音だ。一国の姫君に「会いたいんですけど」なんて気軽に言えるもんでもないし、じゃあどうすればいいのかって話だ。

そう考えると、ひょっとして旅での時間はすごく貴重だったのかなぁ。無駄にしたつもりはないけど、何だか名残惜しい気がしてきた。……ていうか、同衾までしちゃったんだよなあ。いいのか俺。

果てさてどうしたもんか。

取りあえず、誰かに聞いてみるところから始めるとするか。

俺は顔を洗おうと思い、元の服に着替えて部屋を出ようとした。

ドアを開け、廊下が見える――と、目の前をちょろちょろと何かが走っていった。

――おさかなくわえたドラ猫？

「こらー、待てーっ！」

どことなくフェアリーゼに似た声が猫が走ってきた方から聞こえてきた。それに混じって、パタパタと足音がする。

そして、俺の目の前で盛大にずっこけた。

「ふぎゃっ！」

あ、ぱんつ。

――白か。

白いドレス姿の少女は、思いっきりスカートをまくり上げて転んだ。顔面強打したみたいだけど、大丈夫か？

それにしても、下着はこっちの世界の人も似たようなものをつけてるんだなあと思った。んじゃ男性用トランクスとかも……あるわけねえよなあ、多分。あれって何となく近代的なイメージがあるし。

「大丈夫？」

俺は少女に声をかけた。転んで足をくじいたフェアリーゼの例もあるし、あの転び方はちょっと心配になる。まあフェアリーゼの場合はハイヒールが原因の一つなのであって、この少女は普通の靴をはいてるから多分大丈夫だろう。

「う～……」

うなりながら、少女はゆっくりと立ち上がった。そしてパンパンとスカートを払う。どうやら足をくじいたりはしていないようだ。顔は真っ赤だが。

「あンの馬鹿猫、今度会ったら三枚におろしてやるっ！」

いやいや、猫を三枚におろしてどうするよ。グロいからやめれ。

そんなことを思っていると、少女は俺の方を振り向いた。そして、ジロジロとなめ回すように俺を見る。いやん、エッチ。

少女はつややかな赤い髪を肩より少し上のワンレングスに揃えていて、背は俺よりも大分低い。年の頃で１３〜４歳くらいに見える。どことなくフェアリーゼの面影があるが、彼女に比べて少し目尻が上がっていて、活発そうな印象を与える。そして――やっぱり可愛い。なんだ、この世界の女の子は平均水準が高いのか？

「……見慣れない顔だけど、あんた、ひょっとして姉様の言ってたイセカイ人？」

「姉様？」

「うん、フェアリーゼ姉様」

ああ、なるほど、ということは――

「君がひょっとして第三王女のエスト？」

「……へえ。初対面の人間、しかも王族を呼び捨てなんて、見かけによらず度胸あるのね。知っててそんなことしたの、あんたがはじめてよ」

あ、しまった。ついうっかり。

うーん、やっぱり自分より年下となると気が緩んでしまうというか。フェアリーゼの時は一応ちょっとは気を使えたんだけどなあ。

……これで実は年上とかいうオチはナシの方向で。

しかしエストはそんなことは気にした様子もなく、にこやかに笑った。

「でも、そういうの好きよ。周りの人間なんてみんなおべっかつかっちゃって、あたしを珍獣か何かみたいに扱うんだから。もううんざり」

そう言って、手をひらひらさせてため息を吐いた。表情がくるくる変わる様は見ていて楽しい。

「物怖じしないのは、やっぱりイセカイ人だから？」

「うーん、まぁ、そうかも。……って、君こそ俺を珍獣か何かみたいに見てるじゃないか」

「あはは、ごめんごめん」

そんなやりとりをしていると、不意に俺の腹が鳴った。

う～、そういや朝食まだだったんだっけ。

「朝ご飯まだなの？」

エストの問いに俺は頷いた。

「朝食の時間はもう過ぎてるわよ」

「ええっ！？」

ちょ、ちょっと待て。過ぎてるって事はまさか、朝食食べられないってこと？　ただでさえこっちにきてから一食当たりの量が少ないのに、ここにきて食事抜きなんてなったら餓死するぞおい。洒落になってないってば。

「そ、そんなあ……どうにかならない？」
俺の懇願に、エストは軽く息を吐いた。
「それじゃ、ついてきて。ちょうど料理作ろうとしてたところだったから」
「作ろうとしてた？」
王女が食事を？　普通、そういうのってコックか何かがするもんなんじゃ？
そんなことを思っていると、エストが眉をつり上げて迫ってきた。
「何よ、あたしが料理してたらおかしい？」
「あ……いや、ごめん。そういうことをする立場に見えなかったから」
「うん……まあ、ね。そんな下女の真似事をするんだったら教養の一つでも身につけろってよく言われるわ」
エストがため息をつく。
「けど、寝ても覚めても教養教養それがすんだら淑女としての嗜み云々って、しつこいっての。少しくらい趣味をたしなんだっていいじゃないの、ねえ？」
その考えには俺も同感だったから、頷いた。いくら王女とはいえ、趣味の一つも持てないなんてのは酷というものだ。
その点、フェアリーゼはどうなのだろう。あの性格だし、きっと自分のしたいことがあっても我慢して教養とかを学んだりしてるん

じゃないかなあ。

「それで、趣味で料理を？」

「うん。しようとしてたら猫が入ってきてさ。あんにゃろう、今思い出しても腹が立つ。今度見かけたら八つ裂きにしておいて」

そんなエストに、俺は苦笑いを浮かべた。

「さ、それじゃ行きましょ。あんまり遅くなるのも何だし」

俺は歩き出したエストのあとをついて行った。

□　■　□　■　□　■　□　■

「これでよし、と」

ここは厨房。トレイの上には皿に盛られた料理の品々が並んでいた。スライスされたバゲットにバター、きのこのクリームシチュー、魚のムニエル……かな？　と、何かポットパイみたいなもの、そしてグラスワインだ。それが二人前である。ただ、料理の分量はエストよりも俺の方が大分多い。食い意地を考慮してくれたみたいだ。

「……すげぇ」

「ふっふーん。参ったか」

エストが鼻を鳴らした。

「おみそれしました」

そして、フェアリーゼが言っていた「火の魔法で調理」というのも見ることができた。煮たり焼いたりするのに火を自由自在に操る様は見ていて飽きない。面白い世界だなあ。

「けど、朝からワインってのはいいのか？」

「こんなの飲むうちに入らないでしょ。大丈夫大丈夫」

俺はあんまり大丈夫じゃない。きっと。

エストって実は結構酒豪だったりするんだろうか。

ちなみになぜエストが食事時を過ぎてから料理していたのかというと、そうじゃないと厨房が使えないからだ。仕事でやってる人が厨房を使い終えてから、エストが借りているという形だ。当然というか、後始末もちゃんとしてある。片付けまでが料理、ってね。

「それじゃ行きましょ」

「どこへ？」

俺は思わず聞いてしまった。厨房には隣接して食堂があるが、食堂に”行く”とは表現しないよなあ。

「あたしの部屋」

「ええ！？」

単純に俺は驚いてしまった。

「何よ、不満なの？」

詰め寄るエストに、俺はふるふると首を横に振った。

「大体、こんながらんとしたところで食べてたら何だか悲しくなるでしょ」

ごもっともで。食堂は百人以上が収容できる広さになっているが、そんなところで二人で食べるのはあまりにもわびしい。人が見たら何を思うことだろうか。

……王女と二人で飯食ってる俺の立場が一番危ないか。

「それに、イセカイの話を聞かせてもらわなきゃいけないんだから」

「んー、異世界の話、ねえ」

まあ無難にテレビとか電話とか飛行機とかそんな話でいいか。もうお約束だな。

俺は自分の分のトレイを持って、エストの後をついて行った。一階の厨房から三階に上がり、エストの私室らしき部屋の前にたどりつく。ってことは、フェアリーゼの部屋もこの近くにあるのかな？

俺はきょろきょろと辺りを見回した。その意図は二つ。一つはフェアリーゼがいないかということ、もう一つは誰かに見られてやしないかということだ。いかんせん、とっても後ろめたいのだ。

俺はエストの部屋に入った。

「うわぁ……」

室内を見て、俺は思わず感嘆の声をあげた。

調度品の数々に凝らされた細工は俺の部屋にあるものとはまるで質が違っていた。重厚感のある品々に、ふかふかの絨毯。そして噂に聞くカーテン付きベッドがでんと構えている。広さは軽く２０畳以上はありそうだ。

何というか、客室とは次元が違う。いや、違って当たり前なのだが。

俺はテーブルにトレイを置き、椅子に腰掛けた。

「そんじゃ、いただきまーす」

正直なところ、腹ぺこなのだ。これ以上お預けを食っていたら死んでしまう。

俺はスプーンを手にとって、シチューに口を付けた。

「う――」
「う？」
「美味い！」

お世辞抜きで美味かった。ここ数日大したものを食べてないせいもあったのかもしれないが、まさに染み入る味だった。

「うーん、まあまあ、かな？」

と、王女様はそんなことを仰っていらっしゃる。これでまあまあなのかよ。一体理想はどんだけなんだ。

俺は黙々と料理を食べ続けた。異世界の話をしろとは言われたが、本音を言えば今は料理を堪能したかった。まあエストは何も言ってこないし、話は食べ終わったあとでもいいだろう。

そして程なく料理を平らげ、俺はフォークを置いた。ワインには軽く口を付けた程度で、まだかなり残っている。

「ごちそうさまでした。生き返ったよ」
「それはどうも。喜んでもらえて良かったわ」

エストが微笑んだ。

「これで三人目ね」
「三人目？」
「あたしが料理を振る舞ったの。姉様に父様、そしてあんた――リュウって言うんだっけ？」

それは光栄というか、すっげぇ貴重な体験であったように思える。俺としては、単純に女の子の手料理が食べられたってだけでとても満足だ。

「ああ」
「それじゃリュウ、話、聞かせてよ」
「よしきた」

俺はフェアリーゼにしたように、自分の世界の技術や何かを多少の誇張を交えて話してやることにした。話をする度にエストは「ふうん」「へえ」「ええ？」「嘘ぉ」とか様々な相づちを打つので、話していて退屈しなかった。

「鉄の塊が空を飛ぶとか、嘘でしょ」

まあ、飛行機を見たことがない人の反応はそうだろうなあ。現代人でも怖がる人が多いくらいだし。俺もあれがどんな原理で飛んでるのか分からん。

「でも魔法が無いって信じられないなぁ」

「俺にしてみれば、魔法があるってのが信じられないんだけどね」

お互い、有るべきものが無かったり、その逆だったりするとやっぱり不思議なものなんだよなあ。

「ところでリュウって学者なんだって？」

「いや、学者のフリをしてるだけだよ。この世界じゃまだ知られてないことを色々知ってるから、口実として、ね」

「ふーん……」

「そこら辺の話もしようか？」

「……うーん、パス」

あらら。

「……リュウ、いまあたしのことバカだって思ったでしょ」

「い、いや、そんなことは――」

エストが睨み上げてきた。やべ、顔に出てたか。

……すみませんちょっと思いました。

俺がしどろもどろになりかけていると、エストは頬杖をついてため息を吐いた。

「まあいいけどね。実際バカだし」

おぅい、認めるのかよ。

「姉様と違って、あたしは教養や学問の方はからきしだからね。学問が不要だとは思わないけど、あたしには肌に合わないみたい」

別にふてくされるという様子でもなく、淡々と吐露しているようだった。

「そういえば、姉様がリュウに謝っといてって言ってた。何かあったの？」

言われ、俺は昨日の出来事を思い出した。やっぱり思った通りだったようだ。

「昨日、ちょっとね。俺の方こそフィーに謝りたいんだ。何とか会える機会無いかな」

「うーん……この前の地震で父様が出払っちゃっててて、そのせいで姉様に公務のしわ寄せがきてるから、しばらくは厳しいと思う。あたしが手伝えればいいんだけど……ご覧の通りのおバカさんだから」

そんな様子に別段卑屈になったような印象はない。

「それと……フィー？」

「ああ。フェアリーゼだからフィー」

説明すると、エストはぽかんとした表情で俺を見つめた。

「リュウって……ひょっとして、あたしが想像してるよりも大物？」

「何だよそれ」

俺は意味が分からず苦笑する。

「いや、姉様みたいな立場の人を愛称で呼ぶなんて、普通だったらまず考えつかないから。姉様、喜んでたでしょ」

「うーん……まぁ、あれは喜んでた……のかなあ」

喜ぶ、ねえ。いまいちピンと来ないが。何で愛称で呼ぶことと喜ぶことが結びつくんだろう。

とはいえその時のことを思い出してみると、確かにらしからぬ表情をしていたような気はする。

普通だったら考えつかないっていうか、何せ異世界人だからなあ。俺の常識はこの世界の非常識でもあるわけで。フェアリーゼやエストが王族だの何だの言われたところで、詰まるところは俺と同い年くらいの少女って意識が強いんだよなあ。

「ねえ」

「ん？」

「あたしにも頂戴」

頂戴って、愛称のことか？　うーん……エスト、ねぇ。

「エーたん。エっちゃん。エスっち……」

つーか全部長くなってるし。

「ごめん、ちょっと難しいや」

「えー」

エストが露骨にふてくされたような表情をする。

「フィーは名前が長くて愛称にしやすかったからいいんだけど、エストだとこれ以上短くしようがないからなぁ」

「うー、ケチ」

「いや、ケチって言われても」

むくれた表情でエストの上体がテーブルの上をごろごろ転がる。脇に寄せたトレイに接触してグラスが揺れ、俺はちょっとひやりとする。

何て言うか、猫だなあ。さっきのアレは同族嫌悪か？

「そんなこと言うと、魔法教えてあげないもん」

え？

あ、そう言えばフェアリーゼがエストにコーチを頼んでくれるって言ってたっけ。

「まあまあ、そんなこと言わないで」

俺は苦笑いを浮かべる。

「……はぁ、仕方ないんだから。その代わり！」

エストがびしぃ、と指さして言った。

「可愛い愛称を考えておくこと。いいわね？」
「……前向きに善処します」

んなこと言ったって、難しいものは難しいんだってば。エーたんとか……俺のキャラじゃないっつーに。仕方ない、適当に誤魔化しちゃえ。

「さて、それじゃ行こっか」

エストが席を立つ。

「どこへ？」
「魔法の練習。やってみたいんでしょ？」

お、ついに来たか来ましたか。この俺がかめはめ波を習得する時が。やぁってやるぜ！

――細かいことは気にしない。

「ああ、よろしく。エスト先生」
「うむ、頑張りたまえ。リュウ練習生」

エストが胸を張って言った。

第１０話：空へ

「っと、その前に着替えなきゃ」

言って、エストはタンスらしき棚の引き出しを開ける。そしてそこから衣服を取り出す。

ああ、それじゃ俺は外で待ってた方がいいな……と思ったときは既に遅かった。目の当たりにした光景に、俺の心臓が咳き込む。

エストがドレスの肩ひもを外す。ぱさり、とそれが落ち、膝丈程度の薄い肌着姿になったかと思うと、それの肩ひもも外し、床に落とす。脱いだエストは、ブラジャーのような胸下ほどの長さの肌着とショーツを身につけているだけだった。

俺は慌ててエストに背を向ける。まだ動悸が収まらない。

これは一体何を表しているのだろう。エストがまだそんなことを気にしないような子供だってことなんだろうか。しかしそれにしては成長途中とはいえちゃんと女性らしい体型をしてると思うわけで。ぱっと見、胸の大きさはフェアリーゼとそんなに変わらないような気がする。フェアリーゼがちょっとちっちゃいのかもしれないが。

あるいは、この世界じゃ男がいてもそんなことは気にしないっていう説も考えられる。しかしそうするとフェアリーゼの前例――聖堂で大騒ぎをしたこととのつじつまが合わないか。

それともあれか、俺を路傍の石ころとでも思っているってことですか。泣くぞ。

俺は一つ、どうでもいいのだがひょっとしたら重要かもしれないことに気がついた。エストの身につけていたブラジャーもどきはストンと布が下がるだけのタイプで、形を補正するような機能は無いように見えた。つまり……ちゃんとしたブラジャーしないと、垂れちゃうんじゃね？　と。

いや、この世界の人にとっては垂れることが当たり前なのかもしれない。しかし多分フェアリーゼも似たような下着を着けていることだろうし、ほっといて垂れてしまうのはちょっと――いや、すっごく嫌だった。それはまさに芸術に対する冒涜と言える。

つまりは、補整下着としてのブラジャーを知っている俺が頑張って開発して、あの芸術的肢体をキープしてやるべきだ、って思うわけで。

……どこまで変態だよ、俺。ちょっと自己嫌悪。

大体、作る方法があるとしてどうやってサイズを取る？　フェアリーゼに「測らせて」なんて言ったらド変態の烙印押されかねない。いや、烙印じゃなくて事実かもしれないけどさ。

「何やってんの？　背中向けちゃって」

背中の方からエストの声がしたので、俺は振り向いた。

ったく、人の気も知らないで。

エストは綿のシャツにズボン、革のジャケットらしきものをまとっていた。全体に茶系統で統一された服装だ。俺は何となく、そんな姿が騎手に似ているように思えた。

「さ、行こ」

俺は部屋を出て行くエストに続いた。

「練習ってどこでするんだ？」

「んー、そうね。町はずれの軍事演習場にでも行こうかなって思ってる。そこなら周り気にせずに魔法使えるし」

軍事演習場か。そんなところに行って大丈夫なのか？　と思ってしまう。軍隊と鉢合わせなんてしたら嫌だぞ。

「まあ、エスト様！　なんて格好をしてらっしゃるの！」

「あ、やば」

少し年かさがいってそうな淑女に言われ、エストが声を漏らした。

「リュウ、走るわよ！」

「お待ちなさい！」

俺は制止する声を無視して走り出したエストの後を追った。うわ、足早いなあ。身体能力が強化されてるはずの俺でもついて行くのがやっとだ。

エストと俺は階段前にきて、俺は下り階段の方へ――って、あれ？エストは上り階段の方に入っていった。俺は慌てて軌道修正する。

どうしてだろうと思いつつ、俺はエストについて行く。

「さっきの人は？」

「教育係のハイネおばさま。説教好きのオールドミス。だから婚期を逃すのよ」

おいおい、さらりと毒舌吐くなあ。三枚おろしの件といい、何気に怖いことを言う御方のようだ。

5階の階段を上がると屋上に出た。

空は雲もまばらに、太陽が強い日差しを放っている。高い場所であるせいか風が強く、衣服がぱたぱたとはためく。

「リュウ、耳ふさいでた方がいいよ」

言って、エストがポケットから先の尖った小さな角笛みたいなものを取り出す。俺は言われたとおりに耳を塞ぐことにした。

エストが角笛に口をあてる。するとお湯が沸いたときにやかんが鳴らすような音を思いっきり強烈にしたようなものが、ふさぐ手を通して鳴り響いてきた。うわあ、うるさい。つーか公害だ公害。

そして俺はエストにならって空を見上げた。しばらくして、遠くの方に何か大きなものが飛んでいるのが見えてくる。

それは一言で言うと”竜”だった。緑色の表皮を持ち、胴体の部分だけで馬の数倍の大きさがある。翼を広げた姿はさらに身体が大きいような錯覚を与える。口元からは鋭い牙がのぞき、あれに噛まれたらひとたまりもないだろうと思った。虎やライオンなんてものの比じゃない。

竜は俺たちの頭上でバッサバッサとホバリングしたかと思うと、

ゆっくりと屋上に着地した。よく見ると、竜の背中には馬と同じような鞍（くら）と鐙（あぶみ）が取り付けられていた。

「いい子ね、アステア」

フレアが竜の顔を撫でた。竜がクルルルと甘えたような声を鳴らす。

俺は少しばかり言葉を失っていた。これまでにも魔法や魔物を見たりして俺の常識が通用しないってことは肌で感じ取っていたはずなのだが、さすがに竜というのはちょっとばかり迫力が違った。

やはり恐怖というのも感じるが、それ以上にわくわく感の方が大きかった。魔法もロマンだが、竜というのにも憧れを感じるのだ。

「よいしょ、っと」

エストが、馬に乗るように手際よく鞍にまたがった。

「俺はどうやって乗ればいいんだ？」

多分、俺もこいつに乗るんだろうと思って聞いてみる。しかし鞍と鐙は一つしかないから、乗るのが難しそうだ。

すると、エストが鐙から足を外した。

「ここに右足をかけて。せーので引っ張るから、あたしの後ろに乗って」

言われたとおり、俺は鐙に右足をかけて右手でエストの手を握った。

「それじゃ、いくよ。せーのッ！」

右足を軸として身体が宙に浮く。俺はその勢いでエストの後ろにまたがった。そして鐙から足を外すが、そうするともの凄く不安定なバランスになってしまい、ちょっと怖い。これから飛ぶわけで、そうするとすっごく危なくないか？　おい。

「じゃあ飛ぶからしっかりつかまっててね」

「う、うん」

俺は言われたとおり、エストの腰の辺りに両手を回した。自然と密着する身体と身体。俺は思わずつばを飲んでしまう。まあここで胸の辺りに手を回してしまうというのがお約束なのだろうが、さすがにそこまで不埒ではない。

「もっとしっかりつかまって。そんなんじゃ落っこちちゃうよ」

たしなめられて、エストを抱く両腕に力を込める。エストの身体は小さく華奢（きゃしゃ）で、力を込めたら折れてしまいそうで怖かった。まあそれ以上に触ることに対する抵抗の方が大きかったわけだけど。

しかしいざ抱いてみると身体の軸は少しもぶれることなく、華奢な中に力強さを感じさせる身体だった。

だけど……この体勢は結構ヤバイ。甘い香りが鼻をつくし、力強くも柔らかい感触が両腕から伝わってくる。胸ほどじゃないにしろ、感触が与える女性らしさというものが本能を刺激する。俺は思わず、自分の男性自身がエストにあたらないようにと腰をちょっと引いてしまう。情けない。

「それじゃ、行くね」

エストが手綱をぱちんと鳴らした。すると竜は両翼をはためかせ、ゆっくりと空に舞い上がり始めた。遠ざかる大地。俺は軽く目がくらみそうになりながら、それでも開放感と高揚感を強く感じていた。良かった、高所恐怖症じゃなくて。

多くの人は、自由に空を飛んでみたいと思ったことがあるだろう。例えば飛行機に乗ったとき、大地が遠ざかるのを見て興奮したこともある。やはり人にとって空を飛ぶことは一つの夢なのであって、重力に逆らい、そして消えていった人たちもいるくらいだ。

今、俺は空を飛んでいる。それはどんな美酒でも味わえない快楽。

――ん？　美酒？

考えてみたら、飲酒運転じゃねえかよオイ！

大丈夫なんだろうなあ。転落死とかシャレにならないぞ。

「なあ」
「ん？」
「この世界じゃ、竜に乗るのって当たり前なのか？」

そもそもこいつが竜で正しいのかまだ分からないのだが。

「ううん、そんなことないよ。竜は貴重だから、乗れるのは王族と有力貴族くらいのものかな」
「ふーん……じゃあフィーも乗れるのか？」

「姉様は乗れないわ。運動神経無いもの」

あらら、バッサリ。まあ分からなくも無いが。フェアリーゼが運動神経抜群で跳んだり跳ねたりしていたらそっちの方が怖すぎる。

「それにしても、エストはさっき飛行機の話に驚いてたけど、竜の方がよっぽどびっくりするってば、さ」

「そんなことないでしょ。だって、鳥が空を飛ぶのと同じだもの。普通よ。でも鉄は空を飛ばないでしょ」

言われてみて、妙に納得してしまった。古代には翼竜なんてのもいたわけで、それがちょっとバージョン変わって人が乗れるようになったものと思えばいいのか。確かに、鉄の塊が空を飛ぶってのはにわかには信じられないのかもな。

「ねえ」

「ん？」

「リュウって姉様のことをどう思ってるの？」

どう思ってる、かあ。実際のところ、どう思ってるんだろう？

まあ友達ってところは疑いないな。真面目で優しくて、ちょっと自分のことをかえりみないお姫様。だからどこか危なっかしくて、そばにいてあげたくなってしまう。かと思えばどこかお茶目な面も見せてくれたりして、やけくそ可愛い。

「友達だよ」

俺は無難に答えることにした。というよりも、他に適当な答が見あたらないのだ。

「友達？」
「ああ」
エストの物言いに何か引っかかりを覚えたが、俺はうなづいた。
「ふうん……」
何か歯切れの悪い返事だった。
「何か文句でもあるのか？」
別に嫌味というわけではなく、俺は軽い調子で聞いた。
「うん」
ええ、マジかい。これはあれか。「あたしの姉様と気軽に親しくなるなんて許せない！」なんていう思いがあって、二人の間に割り込もうとするエスト。しかし俺とフェアリーゼはそれを乗り越え、やがて結ばれる。そして最終的にエストも渋々認めていくのだ……と。
いつの時代の連ドラだよ。アホか俺。
「あんな素敵な女（ひと）をつかまえておいて、ただの友達は無いんじゃない？」
あらら、逆でしたか。
「才色兼備で優しくて、教養も深くて物腰は優美。そんでもって運

動神経が無いんだけどそこは女らしさで保護欲をかきたてる。非の打ち所が無いと思わない？」
「家事がダメらしいぞ。四属性の魔法が苦手だからって言ってたな」
「う……」

エストが言葉を詰まらせた。まあ多少の誇張はあるのだが、フェアリーゼ本人が言ってたわけだしなあ。

「それは、それ。姉様は偉～い人なんだし、そう言うのは全部召使いがやってくれるのよ。うん、だから欠点じゃない！」

そのあんまりな物言いに俺は思わず吹きだしてしまった。

「む～。何がおかしいのよ」
「いや、ごめん。エストは本当にフィーが好きなんだな」
「うん、大好き」

ためらうことなく断言した。あっさりと言い切れるのもエストの性格なら、そう言わせるのもフェアリーゼの人徳なんだろうなあ。

「リュウは好きじゃないの？」

そんなエストの問いに、俺は少々とまどった。人間として好きか嫌いかと言われれば、そりゃ好きだと言える。しかし男女の間柄というものが存在するからして、”好き”と言ってしまえばそれは別の意味を持ってしまう。

とはいえ、ここでＮｏという答えはできるわけがない。Ｙｅｓと答えて言い訳するのも据（す）わりが悪い。となると、返答は限られてしまう。

「……好き、だよ」

エストが後者の意味で捉えてくれないことを祈っておく。

「そっかぁ、そうだよね。やっぱり、好きだよね」

嬉しそうに言う。

「それじゃあリュウ、頑張って姉様を幸せにしてあげてね」

俺は思わずずっこけかけた。あ、危ねえ！　ここでずっこけたら死ぬぞ俺！

「お前、分かっててからかってるだろ！」

「ん～、何のことかな？」

すっとぼけるフリをする。こいつめ。

何か釈然としない俺だったが、そんなことは意に介さずと竜は飛んだ。かなりのスピードが出ていることが肌で伝わってくる。全面に座ってるエストはかなり大変なんじゃないかな。

しばらく飛んで、竜はスピードを緩めた。

「この辺りかな」

俺は下を見下ろしてみた。真下には荒れた土地が広がり、そこにはいくつもの凹みがある。岩石が散らばり、緑と茶と灰が入り交じったような地形になっている。樹木のような障害物なんかは近くに

は見あたらない。

ついでに言えば、人影なんかも全くない。軍事演習場とはいえ、年がら年中演習が行われてるわけじゃないんだから当たり前か。

竜は少し滞空すると、ゆっくりと降下し始めた。程なくして大地に降り立つ。ずっと揺られていたから、大地に降りても揺れる感覚が抜けないでいる。

俺がいるとエストも降りられないわけで、俺は先に地面に降りた。それに続いてエストも降りる。

今、魔法体験という俺にとってワクワクドキドキの時間が始まろうとしていた。

第１１話：はじめての魔法

「デバイスは持ってる？」

その問いに、俺は首を横に振った。

「それじゃ、これ、あげるね」

エストが上着のポケットから何かを取り出し、俺に差し出してきた。

それは赤銅色をした、縞模様の装飾が施された指輪だった。

「いいのか？」

「うん。あたしが持っててもも死蔵させておくだけだしね。使われた方が有意義ってもんでしょ」

俺はエストから指輪を受け取り、右手の薬指にはめようとした。が、ちょっとブカブカだったので小指にはめることにした。

そういえば、フェアリーゼから渡された指輪もずっと俺が持ったままだったな。うーん、もらっちゃっていいものなんだろうか。まあ、「返してください」なんて言われたら意思疎通もままならなくなるわけで、死活問題だったりするのだが。

「さて、それじゃ始めましょ」

「よろしく頼むよ、エスト先生」

「じゃあ……んー、まず説明からね。今あげたのは四大属性の流れを制御するデバイスで、それを介して魔力を行使することが可能になるの。純度もそこそこいい方だから、魔力の通りもいいはずよ」

「純度って？」
「魔力の通りやすさ。質がいいほど弱い魔力で大きな魔法を引き起こせるようになるの」
ふむふむ。あれか、導線みたいなものかな。質の良い方が抵抗値が少ないようなものか。
「エストのはどうなんだ？」
「あたしの？　そりゃ最高品質に決まってるじゃない」
ふっふーん、と胸を張って答えた。いや、胸を張るところが違うだろ。
「あと、魔法防御ね。一応、使用者の魔力を使って自動展開はされるけど、任意に防御力を強化することもできるわ。ただ魔力量も消費するから、どう使うかはセンスが問われるところだけどね」
「魔力量って、容量みたいなのがあるものなのか？」
マジック・ポイントみたいなものなのかな。ＲＰＧじゃ一晩寝れば回復するわけだけど、実際にはどうなんだろう。
「そうよ。魔力量は人それぞれだけど、使い切ると魔法が使えなくなるわ。あと、すっごく疲れる」
「回復はどうやるんだ？」
「基本的には休むこと。マジックハーブを飲む方法もあるけど、高いからよほど急ぎの時じゃないと使わないわね。……吐くほどマズいし。からっけつの状態から完全に回復するまでに大体三日くらい」
「……三日って、どうやって調べたんだろ」
からっけつの状態になるってのは分かる。魔法が使えなくなるわ

けだから。が、完全に回復したなんてのはＲＰＧじゃあるまいし数値に表示されないわけで、おいそれとは分からないんじゃないだろうか。

「……言われてみれば、確かに。不思議ね」

言って思案顔になる。なんだ、エストも知らなかったのか。

「姉様に聞いてみたら分かるんじゃない？　物知りだし」

「そうだな、そうするよ」

確かにまあ、フェアリーゼだったら知ってそうだな。見るからに博識だし。

「説明はこんなところかな。じゃ、実践ね」

「うし」

俺ははやる気持ちを抑え、腹に力を入れた。今まで正面に立っていたエストが、俺の斜め前方へと移動する。

「じゃあまず、目を閉じて、ゆっくりと深呼吸して。指輪の力で感覚が鋭敏になってるから、体内を流れる魔脈を感じ取れるはずよ」

言われたとおりに瞳を閉じ、ゆったりと呼吸する。

暗闇の中、血液のように身体を循環している”何か”があった。それは俺の身体を内側から撫でるようで、しかし不快な感覚ではない。まるで生命の息吹を感じているかのようだった。

「感じる？」

「ああ。全身を循環してるようなやつだろ。」
「へえ、凄いね。最初からそんな風にはっきりと感じ取れるなんて」
「そうなのか？」
「うん。普通だと、最初はぼや～っとあるかないかを感じるくらいだから。鮮明に感じられれば感じられるほど操るのも容易だから、有利だよ」

凄いと言われても、実感なんてあろうはずもない。まあ、褒められてるわけだから素直に喜んでおくか。

「それじゃ、使ってみようか。感じた感覚を逃がさないように集中しながら目を開けて」

俺は集中を崩さないように目を開ける。感覚は多少鈍ったが、それでも体内を脈動が巡っている感覚はある。

「基本的に、魔法は”イメージ”で発動するの。最初は手を介するとやりやすいかな。魔脈をまず手に集中させて、次に手を介して流し出す感覚を持つと同時に、目の前に魔法の姿をイメージするの。そうすれば、魔法が発動するはずよ」
「うーん、一度に二つのことを同時に、かぁ。難しそうだな」

まあ、やるだけやってみるさ。失敗したって、上手くいくまで挑戦すればいいんだし。
……もっとも、体育会系じゃないからこういうセンスって悪そうなのが何とも。

そういえば、謙也の奴は何をしているだろう。ひょっとしたら俺と同じように魔法を習得してたりして。しかし万年文化系の俺と違って、奴は中学までバスケットボールをやってたんだっけな。身体

で感じるセンスは優れてそうだ。くそ、負けたくねえな。あいつにだけは

俺はまず、魔法をイメージする。うーん、どんなイメージを持てばいいんだろう。取りあえずファイアーボールって感じで、火の玉を打ち出してみようか。

あとは魔脈の制御か。

俺は両手を眼前に突き出し、魔脈の流れを感じ取ろうとした。体内に確かに流れているそれを、今度は手に収束させるイメージを持つ。お、なんか流れが変化してきたぞ。

そして、それを外に放出させる！

俺の目の前で、何やら赤い燐光のようなものがたゆたいはじめた。それは俺の手のひらの前で収束を始め、次第に赤い球をかたどりはじめる。そして段々と大きくなり、やがて一抱えを優に超えるほどの大きさとなった。直径一メートル以上はあるだろうか。

ちょっと熱いが、我慢できないほどではない。これも魔法防御の効果なんだろうか。

そんでもって……打つべし！

俺は火球をはじき出すイメージを作り出した。

火球が猛スピードで打ち出され、うなりをあげる。それは一瞬にして丘のような場所に到達し、着弾。爆音と衝撃波が巻き起こる。石つぶてが飛散し、大地が大きくえぐれ、砂煙が舞う。

「やった！」

魔法って……すげぇ！

俺は興奮し、エストの方を見た。エストはぽかんと口を開け、クレーターを眺めていた。やがて俺の視線に気付いたのか、こちらに向き直る。

「すっごーい！　凄いよリュウ！」

エストも興奮した様子で、目を爛々とさせて俺の手を取った。

「どんなもんなんだ？」

「うん、一言で言っちゃうと……天才。それも”希代の”を付けてもいいくらい」

うへぇ、希代の天才かよ。まさか俺にそんな才能があったとは。思わずにやけそうになってしまい、しかしエストにマヌケ顔を見られたくなかったので自制する。

「あたしも天才だなんてもてはやされたけど、それでも最初に打ち出したのは拳大くらいのものよ。ほんと、妬ましくなるわ」

そう言いながら、妬むような素振りは全くない。カラっとしたものだ。というか、本当に嫉妬してるならそんなこと言わないだろうしな。

「うちの宮廷魔導士でも、あのクラスの魔法を使えるのは五人といないと思う。それくらい、凄いかも」

「はは、そりゃ光栄だ」

手放しの賛辞に、俺は何だかむず痒くなってきた。エストってやっぱりすごく素直な子なんだな。

実際にイメージしたものよりスケールがやたら大きかったというのは内緒だ。どうやら、魔法のイメージって”火種”みたいなもので、あとは注ぎ込んだ魔脈の程度で規模が変わってくるように思えた。

「ところで、疲れてない？」

俺は言われて、自分の体調を振り返ってみた。

「いんや、全然」

答えると、エストが深く息を吐いた。

「滅茶苦茶な魔力持ってる上に、魔力量も底なし、か。ほんと、底知れないわね」

「魔力使うと疲れるもんなのか？」

「うん。あのクラスの魔法を使えば、普通は結構疲れるはずよ」

なるほど。

しかしそうなると、自分の魔力でどこまで大きい事象を引き起こせるのか興味があるな。

……環境破壊になりかねないから、今日は自重しておくか。

□　■　□　■　□　■　□　■

四属性の魔法を一通り練習し終え、俺は一息ついていた。

火の魔法は文字通り、火を発生させる。不思議なのは、火球を撃ち出したりすると着弾時にかなり大規模な爆発が発生することだ。どうも、見た目に比べて内部にエネルギーが蓄積されていて、それが着弾により解放されるらしい。

水の魔法は氷属性を内包し、温度を下げて凍らせたりすることができる。いわば冷凍魔法ってとこか。また、水そのものを発生させることもできる。多分、大気中の水蒸気を収束させたりでもしてるんだろう。砂漠を旅行したりする際には必須だな。砂漠なんてものがあるのかは知らないが。

風は分かりやすい属性で、突風を起こしたり烈風で切り裂いたりすることができる。ちょっとしたハサミ代わりに使えそうだ。しかし突風はいいのだが、烈風はとても危険な魔法で、首を刎(は)ねたりなど一撃で相手を死に至らしめることが可能であるらしい。ブルブル、気をつけないと。使う分にも使われる分にも、だ。エストにも「あんたが使ったら人が死ぬわよ」と言われてしまった。加減ができるようになるまで封印しておこう。

他に、風属性は雷を内包している。雷球を飛ばしたり、雷を落としたりすることもできる。が、ぶっちゃけ怖い。ビリビリきそうだ。

土はまた地味な魔法だ。土壌を泥炭化したり、土柱を発生させたりすることができる。しかし土属性の本領はそこではなく、土地の肥沃化といった生活に密着した部分であるようだ。なるほど、食を

支える魔法か。

ちなみに魔法のイメージが無茶無謀な場合――例えば大地からマグマが吹き出すようなイメージを描いてみたりしたらどうなるのかというと、基本的に予測不可能な現象となるらしい。規模が縮小されたり、すりあわせて中間的な現象が起きたり、はたまた何も起こらなかったりするとのことだ。いわゆるひとつのパルプンテってやつか。

そして、どんな事象が可能でどんな事象が不可能なのかといったことに関しては、魔導士たちが日々研究を行っているのだという。

「それじゃ、次、行ってみる？」

「まだあるのか？」

「うん、今度は防御障壁。ちゃんと防げないと、危ないからね」

なるほど、防御か。ってことは、さっき言ってた「任意で強化」ってやつかな。

「やり方自体は簡単よ。さっきと同じ要領で”光の壁”をイメージするだけ。ただタイミングが難しいの。構成した壁の強度を維持できる時間は短いから、上手くタイミングを合わせないと無駄になるからね」

ふむふむ。格ゲーなんかだと後ろレバー入れっぱなしにしてればいいわけなんだけど、魔法はそうもいかないってことか。

俺は壁をイメージして魔力を放射してみる。すると、視界に淡い光が灯った。しかし光の強さは一瞬のピークを迎えると、分数関数を描いて減少していった。

「こんな感じか？」
「……どうしてあっさりモノにしちゃうかなぁ」
「まあ、センスって奴か？」
「調子に乗るなっ」

俺は頭をぽかっ、とエストに叩かれた。

「さて、と。それじゃ……」

エストが俺と距離を取る。今までとは違って大分離れた場所まで行くようだ。

「あたしが火球を撃ち出すから、それを防御障壁で防いでみて」

おおっと、いきなり実践……って、直撃させるんですかい！？

「それって、危ないんじゃないのか？」

俺はちょっとビビリながら言った。

「大丈夫大丈夫、自動展開の分があるから、直撃しても数メスタ吹っ飛ぶくらいのものだから」

……いや、数――メスタ？　距離の単位だろうか。そのくらい吹っ飛ぶって、十分危ないような気もするんですが。

ええい、仕方ない。ここで引いたら男がすたる。腹ぁくくれ、俺。

「覚悟はいい？」
「覚悟って、おい！」

あーた、大丈夫って言ったじゃないですか！

エストが突き出した手のひらの先に火の粉が収束し、火球が形作られていく。

「それじゃ、行くよ」

俺は頷いた。

対峙する俺は、まるでバッティングセンターでピッチングマシーンの真っ正面に立っているかのような気持ちになっていた。怖い。

エストの手のひらから火球が打ち出される。

迫る火球。

俺は光の壁を展開する。

しかしタイミングが早く、壁がかなり減衰したところで火球が着弾、炸裂する。

全身に超水圧の放水を受けたような衝撃を受け、俺は軽く吹っ飛んだ。

「いたた……」

俺は尻餅をついた格好になっていた。うーん、ビビって早く展開したのがまずかったか。

「あはは、やっぱり防御はそう簡単にはいかないみたいね」
「悪かったな、反射神経が鈍くて」

バッティングセンターに行った時だって、全然ノーセンスだったもんなあ。

「ちょっとくらい心配してくれたっていいじゃないかよ」
「大丈夫だって、こんなの。竹刀で殴り合ったりするよりもずっと安全よ」

まあ、そりゃそうなのかもしれないけど。フェアリーゼだったら心配してくれるんじゃないかなあ、と思うんだ。自意識過剰かな？

「ポイントは、展開を意識してから壁が形成されるまでのタイムラグを身体で覚えることかな。それが分かれば、あとは雷や風にも簡単に応用できるから」

なるほど。確かに今は大分早いタイミングで展開してしまったが、それでも形成されるまでにコンマ数秒の遅延があったような感じがした。次はそれを意識してやってみよう。

「なんか悔しいな、もう一回！」

俺は立ち上がり、催促する。

「よしきた、じゃあ行くよ」

再び、エストの眼前に火球が収束する。

そして撃ち出され――迫り来る。

展開！

が――タイミングが若干遅れ、光の壁の構成が間に合わないままに直撃を食らった。今度は全く防御できずに食らったわけで、俺はまともに吹っ飛んだ。どでかいハンマーで殴られたかのような衝撃を感じる。

背中で着地し、それでも勢いが収まらずごろんごろんと転げ回る。数回転したところでやっと止まった。

い、痛い……かなり。

「今度はまともに食らったね」

「……ちょっとは心配してくれ」

軽く毒づく。

結局、俺が防御を習得するためにはあと十回は吹っ飛ばされなきゃならなかったのだった。

第１２話：魔法合戦

散々に転がされまくって、俺の衣服は砂まみれになっていた。あー、一張羅なのに……

仕方ない、取りあえず今着てる服はお手伝いさんか誰かに頼んで洗濯してもらうとしよう。問題はその間の換えの服だな。昨日借りたのは寝間着だから外に出るには不向きだし、換えを一着くらいは持ってないと不便きわまりない。

このままじゃ、冗談抜きでフェアリーゼやエストに「不潔です！」なんて言われかねない。やばい、やばいぞ俺。

けど、買おうにもお金が無いんだよなあ……

「なあ、エスト」
「なに？」
「この世界でお金を稼ぐ手段って、定職に就くしかないのか？」

エストもお姫様なわけで、庶民のお金の稼ぎ方なんて知らないような気がしたが、一応聞いてみることにした。

「普通は定職だけど、臨時の仕事が欲しいならギルド組合でもらうって手もあるよ」
「ギルド組合？」
「うん。色んなギルドが集まって仕事の募集とか斡旋をしてるの」
「ふーん……派遣の仕事みたいなもんなのかな」
「派遣？」
「あ、いや、こっちの話」

なるほどね。聞く限りだと仕事の種類も豊富そうだし、受けられる仕事の一つや二つくらいはあるかな。魔法も使えるようになったし、例えば魔力注入業なんてのもやろうと思えばできるだろう。

フェアリーゼやエストにお金の無心をするってのもできなくはないんだろうが、さすがにそれは男としてあまりにもダメな気がした。全く稼ぐ手段が無くて八方ふさがりってんなら考えるが、少なくともまず策を講じてからにしたい。俺はヒモにはなりたくない。

「けど、俺みたいなよそ者が行っても仕事ってもらえるの？」

「一応、組合に登録する必要はあるけどね。あたしも登録してるよ」

「え！？」

俺は露骨に驚いた表情を浮かべる。

「なによ、あたしが登録してたらおかしい？」

「だって、お姫様だろ？　よく登録するなあ……いや、登録できるな」

お姫様ってバレた時点で弾かれそうだ。まさか、そのギルドとやらがエストの名前を知らないとも思えないし。

「まあね。偽名だし」

偽名っておいおい。案外というか予想通りというか、やんちゃな子だ。

「どんな仕事を受けたんだ？」

「あたしがやったのは、マジックショップの臨時店員とか、魔術指

南の講師とかかな」
「へえ……」
俺は純粋に感心していた。お姫様というとお城でかしづかれて何の不自由もなく、というイメージだったのだが、少なくともエストは外に出て働いたりもしているわけで。俺が１３，４だったころなんて、家でゲームしてばかりだったからなあ。
考えてみればフェアリーゼも公務とやらで自分の責務を果たそうとしているし、二人とも俺と同年代なのにずっとずっと大人びて見える。俺も頑張らなきゃ、な。
けど、何のために仕事なんてやったんだろう。まさかお金に困ってたりするはずもないだろうし。
「さて、と。そんじゃ次は魔法合戦いってみよっか」
「魔法合戦？」
聞き慣れない言葉だったので、思わずおうむ返しに聞いてしまう。
「うん。魔法を撃ち合って勝負するの」
「魔法を撃ち合って、か……」
さっきの防御講習で、”実力が拮抗していれば”魔法が存外安全なものだってことは分かった。防御壁がしっかりと作用して、ダメージを相当に軽減してくれるからだ。
しかし、実力が拮抗していなかったり、あるいは相手が無防備だったりする場合には魔法は脅威となり得るらしい。拳大の火球一つでも、致命傷を与えるには十分なんだとか。実際、派手に炸裂して

たもんなあ。

また、例え実力が拮抗していたとしても、烈風だけは使わないようにと言われた。中途半端な防御壁など容易に貫通して深刻なダメージをもたらすからだ。

クリティカルヒットはゲームの中だけで十分だ。

ちなみに、無防備な相手を深手を負わせないように攻撃するにはどうするかというと、風や水を中心にして攻めたり、火なら着弾爆発じゃなく眼前爆発するようにしたりするんだとか。普通に撃ち合うよりもよっぽど高度な技術を必要とするわけだ。

「どうやるんだ？」

魔法合戦という名称からして、雪合戦を連想させる。が、さすがにそんなお遊びではないだろう。

「まず、これを胸に付けて」

エストがポケットから取り出して渡してきたのは、白い星の形をしたバッジみたいなものだった。裏に安全ピンがついて止められるようになっている。へえ、この世界にも安全ピンみたいなものはあるんだ。

「なんだ？　これ」

「バレット・シートっていうの。魔法を受けると青→赤→黒って色が変わって、真っ黒になったら負け」

「なるほど」

こりゃ面白い。雪合戦が単なる遊びなのに対して、魔法合戦はバレット・シートっていうアイテムのおかげでれっきとしたゲーム、あるいはスポーツに昇華されてるわけか。

「ついでに言うと、シートは”防御壁を貫通して”受けた衝撃が基準になるから、ちゃんと防御すればその分だけ変色もしなくてすむよ」

なるほどね。ちゃんと防御して、的確に攻撃、か。

「もう一つ、分かってるとは思うけど、お互い烈風の魔法は禁止ね。死にたくないもの」

「ああ、分かってる。――ところで一応確認なんだけど、これって安全、なんだよな？」

魔法が安全なのはおおよそ分かったとはいえ、バカスカ撃ち合いをやって本当に安全なのかってのはまだちょっと不安が残っていたのだ。

もう一つ、エストを攻撃するということにもためらいがあった。思うに、一種の格闘技みたいなものであるからだ。

そんな質問をすると、俺の意図を知ってか知らずか、エストが手をひらひらさせて答えた。

「大丈夫大丈夫、こんなの、小さい子供でも遊びでやってたりするんだから。あと、遠慮しないでね。今のリュウじゃ、多分一撃も入れられないから。一分持てばいい方よ」

「言ったな」

当然ではあるが、完璧に舐められている。ま、当然か。方や人にコーチするほどの経験者、方や今日が初めてのド素人だもんな。俺がどうこう心配するのはお門違いってもんか。胸を借りるつもりでいかなきゃな。

「他に質問はある？」

俺は首を横に振った。

「じゃあ始めようか。それじゃ、リュウが何か魔法を撃ったらゲームスタート、ね」

「よしきた」

エストが俺から離れていく。そして十分に距離を取ったところで、対峙する。

やべ……なかなか緊張するな、これって。

よし、やるか。

俺は右手を突き出して、火球を構成する。もう慣れたもので、魔脈を特に意識しなくても魔法を形作ることができるようになっていた。

そして――エストめがけて撃ち出す。

エストはそれを防御壁で防ぐかと思ったが、一歩右に跳躍して回避する。ていうか、速ぇ！　人間の動きかよ！

今度はエストが火球を生み出す。しかし単発ではなく、エストの

頭上に五個くらい浮かんでる。ちょ、おい、エストさん本気出し過ぎ！

そして放たれ――迫り来る！

マズい。単発の防ぎ方は分かったが、時間差をつけて襲ってくる攻撃には焦点が合わせられない。

――そうだ！

俺は同じように火球を複数個、速攻で構成する。サイズは小さめだ。そして、それを相手の火球めがけて撃ち出す。

俺の火球が相手の火球を三個撃ち抜き、空中で炸裂させた。あと――二個！

俺は一個目を横に走って回避し、すぐさま防御壁を展開する。眼前で爆発するが、さんざんたたき込まれた防御壁、タイミングはバッチリだ。

ちらりとバレット・シートを見る。色はまだ白のままだった。よし、この程度じゃダメージ扱いにはならないな。

にゃろう、反撃だ！

火球は回避されてしまったから、俺は予兆の少ない落雷で攻撃することにした。エストの頭上で雷光が収束し――落ちる！

二発！　三発！

しかしエストは軽快なステップで回避し、当たることがない。何なんだよ、あの動きは！

エストは右、前、左、前、右とステップを踏みながら――といっても一歩でゆうに数メートルは飛んでいるのだが――俺に迫り来る。ご丁寧に、火球で弾幕を張ることを忘れずに。

俺はそれを撃ち落としながら、エストの移動を予測して落雷をたたき込もうとする。よっしゃ、六度目で直撃！

しかしエストの攻撃は休まることをしらない。くっ、防御されたか。

そうこうしているうちに、エストが俺の数歩先まで迫ってきていた。まずい、このままだと至近距離で――

だが、逃げようにも神速のエストからは逃げようが――ん？

分かった！

エストの神速の理由は、風の魔法だ。跳躍する瞬間に強烈な追い風を起こし、移動力に加算しているんだ。証拠に、砂煙が移動につられて巻き起こっている。

そうと分かれば――と思うが、遅かった。

エストが俺のふところに潜り込み、胸の辺りに手を添える

――まさか。

刹那、俺は胸に強烈な衝撃を受け、後方に吹っ飛ばされる。至近距離でタイミングが合わせられず、防御壁を展開することはできなかった。

数メートル吹っ飛ばされ、俺は仰向けに倒れ込んだ。いてて……

ゆっくりと上体を起こし、バレット・シートを見る。げ、もうドス黒い赤にまで染まってる。あと一撃でアウトじゃね？　まともに食らったからなあ。

エストは右手を腰に当て、悠然と俺を眺めている。追撃はしてこない。

「ダウンした相手は攻撃しちゃいけないのがルールだからね」

「……へえ、そりゃ紳士的なことで」

「失礼ね、レディに向かって紳士だなんて」

そこらへんも格闘スポーツなんかによく似てるな。違うのは審判がいないところか。……でも、ひょっとしたらスポーツとして確立されてたりするのかもな。

ちなみに、エストのバレット・シートはきれいな白。至近距離での炸裂だったが、同時に防御壁も展開していたのか。まったく、器用な真似をする。ついでに、さっきの雷撃も全くの無効だったようだ。

「色々見て勉強させてもらったよ。今度は俺が反撃させてもらう番だな」

「ふふん、できるものならね」

「言ったな、こいつ」

挑発され、俺は起きあがった。

分かったことは、二つ。一つは移動の手段として魔法を使うことが、機動力を高めるのだということ。もう一つは、二つあるいはそれ以上の魔法を同時に操ることもできるということだ。今の俺に可能なのかは分からないが。

俺は後ろに跳躍し――それに合わせ、風を巻き起こす。高速で一気に数メートル後方まで飛ばされ、景色が激変する。すげぇ、こりゃ気分がいい。

少し気になって、バレット・シートを見てみる。どうやら、色変わりはしていないようだった。あくまで、ダメージと認識しないと反応しないのかな。まあ、エストも同じ事をしていたわけで、大丈夫だろうとは思っていたけれど。

上手く風を使えば、空も飛べるかもしれないな。だけどそんなことをして墜落死でもしたなら目も当てられないわけで、おいそれとは実行には移せないか。

そう言えば、火球は容易に相殺されるが、雷球はどうだろう。思い、俺は魔力を展開し、雷球を複数個生み出した。そして――発射！

エストはそれを相殺しようとせず華麗なステップで回避する。やっぱり、予想通りか。

俺はさっきのおかえしとばかり、雷球の弾幕を張る。ていうか、張らないとこっちがやられる。

しかし、やっぱり当たらない。よしんば当たったとしても防御壁で防がれ、全くダメージにならない。さて、どうするか――

パキン、と俺の足で何かが鳴った。

……ん？　冷たい。

げ！

見てみると、地面から生えた氷の塊が俺の足を拘束していた。やべぇ、動けない！

そして――お約束、複数の雷球がエストの頭上に浮かぶ。チェックメイト？

えーい、仕方がない！

俺は自分の足下で熱波を発生させ、氷を溶かす。あぢぢぢぢ。しかし雷球は撃ち出され、迫り来る。

間一髪、俺は足下の氷を溶かしきり、すんでのところで跳躍して攻撃を回避した。あぶねえあぶねえ、まさかそんな使い方があったなんて。

しかし、自ら発生させた熱波のダメージでバレット・シートは更に変色していた。まだかすかに赤みが残っているものの、もうほとんど真っ黒だ。

それにしても、見れば見るほど魔法には色んな使い方があるんだな。使い手のアイデア一つ、か。

だけど、これで終わりと思うな！

俺はエストの真似をして、氷で拘束しようとした――が、ぴょんぴょん飛び跳ねてやっぱり捕まらない。くそ、そう簡単にはいかないか。逃げ回る猫を追っかけてるような気分だ。

そうこうしていると、再びエストが左右ステップを織り交ぜながら俺に迫り来る。――くっ、また至近距離でぶちかましてくる気か。

俺は逃げるように後方へ跳躍するが、するとエストは一直線に向かってくる。まずい。前進と後退、どっちが速いかは一目瞭然だ。

それを防ぐべく、火球で弾幕を張る。しかしエストはそんなのはお構いなしと猛然と迫ってくる。くそ、あと一撃だから多少のダメージは気にしないってことか。

エストが一瞬にして懐までもぐりこんで、手を俺の身体にあてがおうとしてくる――速い！

俺はせめて回避しようと、全神経をエストの挙動に集中させる。そしてあわよくばカウンターを狙おうと、右手に魔力を集中させる。

その瞬間、世界から色が消えた。そして、世界の動きがまるでスローモーションで再生されたかのように遅くなる。

――なんだ？　これは。

しかし、チャンスができたのは事実だった。俺はエストの腕を小さく爆風で払いのけて、逆に自分の手をエストの腹へと当てる。

チャンス！

一撃必殺、カウンターだ！

俺はエネルギーを炸裂させた。爆音と共に、エストの身体が吹っ飛ぶ。俺も軽い衝撃を受け、後ろにのけぞった。

世界に色が戻ってくる。

バレット・シートを見ると――真っ黒に染まっていた。どうやら、放った魔力で自分自身もダメージを受けてしまったようだ。

エストは数メートル吹っ飛ばされて、土煙につつまれて側臥位になって倒れ込んだ。地面に力なく伏せるエストを見て、俺は我に返った。

「エスト！」

エストは腹をおさえたまま、身動きをしない。自分でも、相当な手応えがあったのは分かる。もし、防御できずにまともにくらったとしたら――

俺はエストに駆け寄り、身体に手を添える。

「う……げほっ！　かはっ！」

エストは激しく咳き込んでいた。その様子が尋常じゃなく、俺はたまらなく心配になってくる。馬鹿野郎、俺は一体何をやってんだ――！

「大丈夫か、エスト！」
「う……まともに……みぞおちに入った……」
なおも咳き込む。しかし深刻なダメージを受けたというわけではなさそうなので、俺はほっと胸をなで下ろしていた。
だけど、俺は自分がしでかしてしまった行為を激しく嫌悪していた。いくらそういうスポーツみたいなものだからって、女の子に思いっきり攻撃するなんて、男のすることじゃない。情けない。情けないにも程がある。
「ごめん、俺、加減を知らなくて……」
「……いいよ、気にしないで。持ちかけたのは、あたしだし」
言って、微笑む。苦しいくせに、無理をして。
エストがゆっくりと上体を起こす。俺はエストの背中に手を添える。
「けど……本当に馬鹿魔力ね。ガードしてたのに、その上から吹っ飛ばすなんて」
「ガードしてた？」
「うん、タイミングばっちりで。……もしガードしてなかったら、ちょっとヤバかったかも」
エストが苦笑いを浮かべる。
……一歩間違えれば、俺はエストに大怪我を負わせてしまってたかもしれないのかよ。想像し、俺は身震いをした。

「リュウは魔力をしっかり加減できるようになった方がいいかもね」

そんなエストの忠告に、俺は心の底から同意していた。

俺の魔力は、凶器だ。

第１３話：少女の苦悩

「身体、もう大丈夫か？」

俺とエストは荒れた大地の上に並んで座っていた。俺は体育座りをくずしたような格好で、エストはいわゆる女の子座りをしている。石混じりの砂地で座り心地は悪いが、仕方がない。

「うん、心配かけてごめんね」

「いや、謝るのは俺の方だ。ごめん」

俺は先ほどの出来事を思い出し、情けなく思うと同時に、戦慄に震えた。

一歩間違えれば――

「けど……案外、安全じゃ無かったんだな」

別にエストを責める意味はない。子供でも魔法で遊んだりする、というエストの言葉の言葉を過信して、たがが外れてしまった俺が悪いのだから。

「……普通は、安全なんだけどね」

エストが苦笑いを浮かべる。

「ううん、本当は……危険なもの、なのかもしれない。今でこそ防御魔法があるから格闘技感覚で魔法合戦なんてやったりするけど、昔は防御なんて無かったんだって。だから、魔法は生活の基盤であると同時に、危険な兵器でもあった――」

それは大体想像がつく。これだけの破壊力を持ったシロモノなのだ、普通の人がどれほど扱えるのかは知らないが、兵器として有用であることは想像に難くない。

「で、防御魔法が誕生して、兵器としての機能は失った、と」

「……最近までは、ね」

エストが体育座りになって、神妙な面持ちで続ける。

「十年くらい前の話らしいんだけど、その防御壁を”中和”する技術が開発されたの。現象を中和魔法でコーティングして、防御壁を突き破る。それで、魔法はまた一気に脅威に戻ったわ」

いたちごっこ、か。どこの世界も変わらないもんなんだな。

例えばスパムメール。昔はシンプルな広告メールだったらしいが、受信側がキーワードで弾くようになると、暗号みたく置換したり画像で置き換えたり縦読みをさせたり、あの手この手で送りつけようとしてくる。フィルタをかけるたび、それをすり抜ける手段を講じてくるのだ。

正直、スパムメールにはブチ切れたくなっていたところだ。

「中和魔法って、簡単に使えるのか？」

俺の問いに、エストは首を横に振った。

「デバイスが国によって厳重に管理されてるから、そう簡単には手に入らないわ。密売されてたりするって話は時々聞くけど……」

まるで拳銃か覚醒剤だな。この世界にもヤクザみたいなものがいるのかな。

「でも戦争をするのは結局国家だから、一番肝心な部分で物騒なことになってるんだけどね」

戦争、か。フェアリーゼもそんなことを言ってたな。

近代において重火器が台頭してきたように、この世界でも防御壁の中和技術は魔法の殺傷能力を一気に高める危険な存在なのだろう。

「……あたし、魔法くらいしか取り得が無いんだ」

エストが続ける。

「姉様みたいに頭も良くないし、人望があるわけでもないし、粗雑で王女らしくないし……」

言って、膝に顔をうずめる。

「だから、思うんだ。あたしの力なんて、結局は人殺しの能力なんじゃないかって。でも、認めたくなかった。だって、魔法の力を否定されたら、あたしに取り得なんて無くなっちゃうもん。あたし、要らない子になっちゃう――」

最後の方は、今にも泣き出しそうな声色だった。

エストが自分の力をそんな風に捉えているなんて、全く想像していなかった。俺は魔法に対し、単なる憧れからそれを使えるように

なりたいと思っていた。考え方の違いは、取り巻く環境を知っているから生じたものなのか。

「……それは、違うよ」

俺は、応(こた)える。

「どんな技術も、能力も、大切なのはどう使うか、だよ。――月並みな言葉だけど、さ。魔法の力を戦争に利用する人もいれば、家事や農業に使ったりする人もいる。事実、生活にとって魔法は重要なものじゃないか」

「……でも、家事や農業に使う魔法なんてたかが知れてるよ。あたしの持つ力は、余計なものなんだよ」

余計なもの、か。確かに、過ぎた魔力は家事には不要かもしれないけど……本当に、それだけなのだろうか？

俺は考えを巡らせる。エストを、傷つけようとする概念の刃から守るために。

「余計、なんて無いさ」

俺は続ける。

「魔法を悪用する人がいれば、そんな奴から守る人だって必要になってくる。戦争で破壊するものがいれば、逆に戦火から守る人だっていてもいいはずだ。それに、魔物なんて物騒なものもいるんだ。魔法を正しく使えば、人を守ることができる。そんな時に、どんなに力があってもありすぎることはないだろ？」

魔物の側からすれば、魔法は自分を傷つける凶器なのかもしれない。だが、そもそも魔物が人間を襲うから自己防衛のために応戦する必要が生じるわけであって、やむを得ないことなのだと思う。

まあ、そのあたりはもっと勉強するべきなのだろう。

「どんな技術だって、最初は学問として好奇心から生まれてくるものだと思うんだ。そして、それは純粋な存在なんだ。だけどそれが利用されるとき、必ず正の面と負の面が出てくる。技術を悪用しようとする奴はどうしたって出てくるんだ」

俺の話を、エストは黙って聞いている。

「そんなときに、悪い奴を止められる人がいれば素晴らしいことだと思う。だって、苦しむ人を助けることができるんだから。それは、力のある人にしかできないことなんだよ。心ある人が力を振るえば、それはきっと支えになる」

もちろん、力を無条件で礼賛するわけじゃない。だけど、力なき意志は無力なのだと俺は思う。どんなに歯切れの良い言葉を述べたところで、それを実現するだけの算段が無ければ何の意味も持たないからだ。

「だから、エストの力はきっと人々の幸せを守るためにあるんだよ」

我ながら、柄にもない語り口だと感じていた。自信もない。だけど落ち込むエストを目の前にして、何とか力になれないか――なってやりたい、と思っていた。

エストが少し顔を上げる。

「それに、さ。一番大事だと思うことなんだけど、能力があるかどうかなんてどうだっていいんだよ。誰かを必要として、必要とされて、愛情の輪の中にいれば、さ。フィーのこと、大切に思ってるんだろ？」

エストがこくりと頷(うなづ)く。

「だったら、フィーもエストのことを大切に思ってるんだよ。それだけで、いいじゃないか」

フェアリーゼのあの性格だ、自分を慕ってくれる妹を大切に思わないはずがないし、だからこそエストもフェアリーゼを慕っているのだろう。

「だからほら、元気出せよ。エストに湿っぽい顔は似合わないぞ」

俺は自分から笑顔を作る。それにつられて、エストの表情も少し柔らかくなる。

「リュウ」

「ん？」

「……ありがと」

言って、微笑む。うん、大分元気出たな。

「守るための力、かあ……」

言って、天を仰ぐ。

「そんな力、あたしでも振るえるようになれるのかな」
「なれるさ。正しい心さえ持っていれば」
「正しい心……」

エストが少し考え込む素振りを見せる。

「あたし、自分が馬鹿だってことを諦めてたけど、もっともっと勉強しようと思う。自分の力を正しく使えるようになりたいから。馬鹿なままだと、誰かに利用されたり、勘違いして力を悪い方向に使ってしまいそうだから」
「そっか」

確かに、な。何が正しくて何が間違ってるか、それを判断するには知恵と知識は不可欠だろう。いや、世の中には正しいも間違ってるも無いことがほとんど、か。そんな時、自分が”良かれ”と思うことを決断していかなきゃならないわけで。

特に王族なんて、そんな決断を迫られる機会は少なくないだろう。

「だけど、エストは絶対馬鹿じゃないと思う。本当に馬鹿だったらそんな風には考えられないよ。正直、俺も今のエストの言葉を聞いてハッとしたんだ。多分さ……エストって、単に学問とかそういうのが嫌いなだけじゃないの？」
「……う」

エストが言葉を詰まらせる。

「……だって、歴史とか面白くないし、神学とかわけ分からないし、礼法とか性に合わないし。何よ神の奇跡が大地を作りたもう、って。今日日（きょうび）、おとぎ話でもそんなの見ないわよ」

ぶつぶつと不平をこぼす。うーん、確かにそりゃ不満の一つも言いたくなるような面子だわな。名前を聞くだけでで眠気をもよおしそうだ。

俺だって、例えば古典歴史古典古典歴史古典なんて時間割をやられたりしたら、軽く発狂できる自信がある。――古典の先生、ごめんなさい。でも本音なんです。分かれば面白いのかもしれないと、分からないと……苦痛なんてレベルじゃねーです。

「ま、少しずつ慣れていけばいいんじゃないか？　考えも変われば、きっと見方も違ってくるんじゃないかなって気がするし」
「……そう、かな」
「そういうこと」

必要は発明の母、なんてね。

「まあ……俺も頑張らなきゃな。いくら魔力があるからって、暴発の危険があるんじゃ使い物にならないよ。完璧に、制御できるようにならないと」

実際、重要な問題だと思う。例えば誰かに襲われたとして、うっかり魔法で応戦すれば相手に大きな怪我――あるいは死をもたらしてしまうかもしれない。そんなのはまっぴらだ。

「じゃあ、リュウがしっかり制御できるようになったら再戦しようね」
「怖くないのか？」
「ん……リュウだったらきっと大丈夫って思うから」

そっか。じゃあ、期待に添えるように頑張らなきゃな。

「リュウ」

「ん？」

「あたしたち、”正しい力”を使えるようになろうね」

言って、エストが手を差し出してくる。俺は微笑んで、その手を取って握手を交わす。華奢だけど、力強い感触。

「でも、リュウの力は姉様を守るためのものかな？」

「……まだ言うか」

俺は思わず苦笑いを浮かべる。なんで俺とフェアリーゼをそういう関係にさせたがるんだ。

……悪い気はしないけどさ。

「さて、と。それじゃそろそろ帰ろっか」

俺とエストは立ち上がり、尻に付いた泥を払う。エストが指笛を鳴らすと、遠くをうろついていた竜――アステアがこちらに飛んでくる。

来たときと同じように、俺たちはアステアの背に乗った。エストが手綱を鳴らすと、アステアが一声いなないて、羽ばたき始める。

空に、舞う。運動したあとの風はとても心地よかった。

「ちょっと寄っていきたいところがあるんだけど、いいかな？」

「いいけど、どこへ？」

「クレニアス総合商店。欲しい本があるんだ」

ふーん、本、か。ってことは、活版印刷の技術なんかもあったりするのかな？

「そういうものって、召使いの人が用意してくれるものなんじゃないのか？」

わざわざ王女が街まで出て買いに行くもんなんだろうか、と思った。

「うーん……ちょっと、ね。流行（はやり）ものの小説だから、買いに行ってもらってるのがバレたら『そんな低俗なものを読んでる暇があったら、テーブルマナーの一つくらい覚えなさい！』なんて言われちゃうし。ああもう、思い出すだけでうっとーしい」

なるほど、な。誰だって買いにくい本の一つや二つはあるよなあ。俺だって、中学生の頃にエロほ……げふんげふん。

嗜好はいたってノーマルですよ？

「その店って、服とかも売ってる？」

「うん、売ってるよ」

うーん、どうしようか。服を買いたいが、金がない。かといって、さすがにエストに金の無心をするのは……

ええい、腹をくくれ。

「すっげぇ恥ずかしい頼みなんだけど……その……金を貸してくれ

ないか？」

恥を忍んで、頼むことにした。

「いいけど、何に使うの？」

「服。着替えがない」

「そうなんだ。いいよ、買ってあげるから」

「いや。気持ちはありがたいけど、甘えてしまったら人間としてダメな気がする。稼ぐ方法も教えてもらったし、ちゃんと返すよ」

「ふうん……」

気分を害してしまったかな、とちょっと不安になる。

「やっぱりリュウって偉いね。あたしだったら、きっと甘えちゃうなあ」

「そんな大層なもんでもないよ。変な意地を張ってる部分もあるだろうし」

男の意地、ってやつだ。ま、こう言うと男女差別になりそうだし、口にすることはないのだが。そんな意図は無いにしても、だ。

何にせよ、換えの服が手に入りそうで一安心、かな。

第１４話：お買い物（前書き）

※本話より地の文での人物呼称が愛称に変更されています

第１４話：お買い物

俺たちは王都の中心から少しの距離にある、王宮を除けば最大の大きさを誇っている建物の上空に来ていた。あれがクレニアス総合商店であるらしい。

アステアがエストの指示に従って、ゆっくりと降下を始める。道行く人々はこちらの方を見てくるが、取り立てて騒ぐような様子もない。珍しくはないってことか。

俺とエストはアステアの背から降りる。そして、アステアは空へと飛び立っていった。

窓の並びから伺うに建物は四階建てで、空から見た様子では大きさは一般的なスーパーマーケット程度のようだった。むき出しの石やレンガ作りの建物が多い街中で、白に塗られた外観は一際目を引く。柱や窓にも細かい装飾が凝らされており、ちょっとした宮殿の装いとなっている。

エストの先導で、俺は建物に足を踏み入れる。この世界でも照度が品物の見栄えにもたらす効果は考えられているのか、店内は昼間だというのに照明がさんさんと照っていた。まあ、そりゃ暗いよりは明るい方が感じもいいわな。

店内には程良く人気でにぎわっていた。藁で編まれた籠なんかをつり下げた女性――おそらく主婦だろう姿が多く見て取れる。あれか、エコバッグか。見習わなきゃなあ。

一階は食料品売り場のようだった。入り口近くの木箱には林檎（りんご）や

葡萄(ぶどう)などフルーツが詰められている。中には全く見たことのない、虹色のばくだんベビーみたいな果物もある。ちょっと食べてみたい気もするが、怖くないと言えば嘘になる。遠目には、奥の方では肉や魚介類なんかも売っているように見えた。小洒落た感じもあるし、一見して元の世界におけるスーパーマーケットとそう大差あるようには思えない。

俺の知る中世では冷蔵技術が発達していなかったから生ものは貴重だったらしいが、この世界じゃ魔法一つでカチンコチンに固めることができるわけで。実際のところ、現代よりも融通が利くほどじゃなかろうか。

食の心配はしなくてよさそうってことだな。

そう言えば……米、どうしよう。食べたい。食べたい、けど……そのためには、またエストに無心しなきゃならなくなる。エストは何とも思わないだろうけど、俺にも豆粒大のプライドってものがある。

やめよう。服と違って必需品じゃないんだ。稼ぐためのモチベーションにしよう。

俺たちは二階へと上がっていく。

「ここにはよく来るのか？」

何となく手持ちぶさただったので、聞いてみる。

「うーん、時々、かな。買うのは服と本くらいだから」

服、か。やっぱりエストも女の子なんだな。

二階は生活雑貨のフロアだった。細々（こまごま）としたものが並ぶ傍ら、隅の方に本のコーナーがあった。

とはいっても、俺のよく知る本の形態とは大分異なっていた。表紙と裏表紙は厚手の革で作られており、背表紙の部分に六つの穴が開けられ、太いより糸で束ねられている。サイズはハードカバーを更に一回り大きくしたような感じだ。

そして、全ての本が平積みされている。棚差しというものが無いのだ。というよりも、本の絶対数が少ないと言った方が正しいか。

「ひょっとして、本って高級品なのか？」

装丁（そうてい）も立派だし、この世界では紙も安いとも思えない。俺の世界で本が小遣い程度で買えるのは大量生産大量消費の恩恵なのであり、この世界にそういった技術はまだ無いような気がした。

「うーん、どうなんだろ。金額を気にしたことが無いから……」

「あはは」

そりゃそうか。さすが、そこら辺はお姫様だ。

仕方がないので、俺は自分で考えてみることにした。本の下に値札らしきものがある。適当に一つ選んでみると、”２レオンス　１０クローメル”と書いてあった。

「レオンスとかクローメルってなに？」

「お金の単位よ。２０クローメルで１レオンスになるの」

「ごめん、もうちょい詳しく」
「うーんと、１クローメルがケルニヒス銅貨１枚で、これが基準ね。２０クローメルで１レオンスになって、これがケルニヒス銀貨１枚。そして、２０レオンスで１エルトになって、これがケルニヒス金貨１枚よ。あと、補助通貨としてパルスがあって、１クローメルは２０パルスになるの。１パルスはゼタ銅貨１枚ね」

ふーん、なるほど。２０ごとにパルス、クローメル、レオンス、エルトと繰り上がるわけか。で、銅貨、銀貨、金貨とクラスアップしていくと。

さてさて、あとは貨幣価値を調べるために、参考になる品物探しだな。なるべく、元の世界とあんまり価値が変わってないものがいい。レッツ・フェルミ推定。

うーん、これか。

俺はスプーンと５０センチほどの平皿を調べてみることにした。スプーンの値段は１２パルス、平皿は８０パルスと表示されている――あれ？

「２０パルスで１クローメルなんだよな」
「うん」
「でも、この皿は８０パルスって」
「あ、それね。安価なものはパルスだけで表記するっていう慣習があるの。色々買う時に、値段を足さなきゃいけないでしょ。上位通貨が混ざると大変になるからだって」

へえ、考えるもんだ。いや、生活の知恵なのかな。

だけど、今さりげなく伝聞入ってたな。うん、完璧に人ごとだ。さすがお姫様。

さて、値段を計算してみよう。元の世界よりはちょっと高めに見積もって、スプーンを２００円、皿を２０００円とすると――すっげぇ適当ではあるが――１パルスは……ええと、それぞれ１６円と２５円になるか。中間取って２０円ってとこか。

まさか暗算２級がこんなところで役に立とうとは。

とすると、１クローメルは４００円、１レオンスが８千円、１エルトが１６万円ってことになる。金貨の価値から推定するに、比較的妥当な価値感覚であるような気がするが……。なら、あの本は２レオンス１０クローメルだから……２万円！？

うわぁ、こりゃ高級品だ。しかもその本が特別高いってわけじゃなく、安いものでも１レオンス１０クローメルはしてる。１２００円か。やっぱり、紙や製本費用が高いのかな。だから全部平積み、ってわけか。

ってことは多分、本は貴族みたいな偉くてお金持ちな人の嗜みで、一般人には手の出しにくいシロモノだったりするんだろう。

もうちょっと正確な値を出してみたいけど、それには食料品の値段が分かりやすいかな。今度見てみることにしよう。

そんなことを考えていると、エストが本を胸に抱いてうきうきとしていた。

「お目当てのもの、あったのか？」

「うん」

エストがカウンターへと向かい、本を置く。店員に銀貨3枚を渡し、銅貨数枚を受け取る。

「お待たせ、次は服だっけ？」

「ああ」

「じゃ、三階ね」

俺たちは三階に上がる。そこでの光景に、俺は思わずどきりとしてしまう。

まず、フロアには棚が並び、その上に畳まれた衣服が積まれている。帽子や小物のようなアクセサリなども置かれている。これはまあいい。

驚いたのは、着替え途中の女性がいたことだ。それも年増の女性などではなく、まだうら若き乙女、である。下着姿に羞恥を感じることもなく、大胆な振る舞いを見せていた。

見回すと、試着室らしきものはあった。これはつまり、どういうことなんだろうか。

「なあ、この世界の人って、人前で平然と着替えたりするもんなのか？」

「うーん、人それぞれかな。気にしない人もいれば、やたらと気にする人もいるわね」

言われて、妙に納得してしまう。この女性のように気にしない人もいれば、フィーのように気にする人もいるってことか。

いやまあ、そりゃさすがに知らない男に裸を見られりゃ誰だって大騒ぎするか。

「エストも？」

「あたし？　さすがに公衆の面前じゃ着替えないわ。淑女のたしなみってものがあるもの」

いるのが俺くらいだったら気にしないが、大勢がいるような場所だと気にする、ってなわけか？　何とも微妙な淑女っぷりだなあ。

……口にしたらぶっ飛ばされそうだ。

ま、いっか。まずは自分の仕事を済ませよう。

衣服をざっと見てみると、革や綿、布でできた服が多いようだった。色はほとんどが素材のままで、原色系の衣服は少ない。多分、染料が高価なんだろう。

適当に革のジャケット風の上着を一つ取って、広げてみる。襟のあるタイプで、前はダッフルコートのようにトグルで止める形になっている。色は地味だが、悪くない。作りは素朴だが、根本的なセンスはそう変わらないんだな。

パンツは……うーん、ジーンズがいいんだけどさすがに無いか。デニム生地って比較的新しい素材だもんな。綿のやつにしておこう。

俺はウエストサイズの確認をして、綿のパンツを決める。他に、革のジャケットと布の肌着を取る。あとは下着、か。

探してみると、どうやらトランクスのような形状のものばかりだった。これは幸い。考えてみればブリーフの方が作るの難しそうだし、こっちの方が主流になるわけか。素材は布製だ。

俺は下着を3枚ほど取る。こんなところか？

上下一着があれば、今の服を洗濯してもらって着回すことができる。それ以上は、自分で稼いで買うことにしよう。

値段は……全部で2レオンス6クローメル。2万円弱ってところか。

見繕っていると、不意にエストに声をかけられた。

「えへへ、似合う？」

振り向くと、麦わら帽子をかぶったエストがいた。衣服は今までと替わらない、綿のシャツにパンツ、革のジャケットだ。つまるところ……

「……うーん、服と合ってないかなぁ」

俺は正直な感想を述べる。麦わら帽子にはちょっと服装がいかつすぎるよなあ。

「う～」

うなって、今度は別の帽子を被る。茶色のカウボーイハットだ。

「今度はどう？」

「服は合ってるけど、何となく服に着られてるって感じが……」

悪くない。けど、何か違う。

「む～」

次に取り出したのは魔法使いがかぶるような藍色の三角帽子だ。

「これでどうだ！」

「……全体が思いっきりミスマッチな気が……っていうか、ギャグでやってるのか？」

何か、とても残念なことになった仮装大会、って感じだ。

「もう、見てなさいよ！」

捨て台詞を吐いて、エストが何やら服を物色し始める。おーい。火に油を注いでしまったか？

エストが服と小物を手に取って、試着室に入る。

カーテン向こうからぱさり、ぱさりと粗雑に服を脱ぐ音が聞こえてくる。いかんいかん、変な想像をしてしまう。悲しき男の性というものか。

カーテンが開く。

「さあ、どうだ！」

腰に手を当てポーズを取るエストは、エメラルドグリーンのワン

ピースを身にまとっていた。丈は膝下。頭には先ほどの麦わら帽子。白いミドルヒールのパンプスっぽい靴を履き、胸元には細いゴールドのネックレスから青色の宝石を核に持つペンダントが下げられている。

……何もそこまで意地にならなくても。

だけど、可愛いのは事実だ。さっきまでの色気のない格好よりも、こっちの方がずっといいな。

俺は拍手を送る。

「ふふん、参ったか」

「おみそれしました」

俺たちは会計を済ませるためにカウンターに向かう。二人合わせて１０レオンス１２クローメルだ。って、エスト一人で８クローメルも買ったのか。どこの世界でも、女性の服は高いんだなあ。

既にエストは買った服を着ていたので、布のバッグをもらって今まで着ていた服を入れる。

「持つよ」

「いいの？　ありがと。さっすが男の子」

そう言われて悪い気はしなかった。うう、何か餌付けされてる気分になってしまう。

都合、俺の手には二つのバッグが提げられることになった。ま、いっか。これも男の甲斐性さね。

第１５話：武器と魔法と下衆野郎

「ついでに、四階も見ていく？」
「四階って？」
「武器防具のフロア」

武器防具、か。魔物も出るし戦争もあると聞くし、そういったものの需要もあるからなんだろうな。俺にはなじみのないものだったが、何となく興味があったので俺は頷いた。

「うんうん。実はね、あたし一人じゃちょーっと入りづらいんだ」

ペロッと舌を出して笑う。

「何で？」
「だって筋骨隆々のガチムチマッチョとか、ニワトリ頭の見た目まるっきり殺人鬼とか、まあマシなのでも陰気で根暗なブツブツ魔導士とか、そんなのばっかなんだもん」

言われ、俺は想像してしまう。「汚物は消毒だー」ってか？

「けど、エストだったらそんな奴らがいても大丈夫なんじゃないか？」

俺の台詞に、エストがむっとした表情で言う。

「むっ。リュウはあたしを何だと思ってるのよ」
「はは、負けず嫌いでやんちゃなお姫様、かな？」
「う～ん……当たってるような、でもなんか納得いかないような。

でも取りあえず殴っとく。えいっ」

ぽかっ、と俺の頭を殴る。いてっ。

階段を上がってる途中、俺はふと思い出したことがあった。

「そう言えばさっきの魔法合戦のとき、急に色が消えて周りの動きがスローモーションになったことがあってさ。何だか知ってる？」

「……スローモーション？」

「ああ。ひょっとしたら、この指輪に何か魔法が込められてるのかもしれないけど」

俺はエストに右手の指輪を見せる。

「この指輪は？」

「フィーにもらった……いや、借りてるんだ。何だっけ、ええと、解語に発語、強化に防壁……だっけ。他にもあるかもしれない」

「うーん……」

エストが人差し指を口元に当てて考え込むような素振りを見せる。

「多分、”覚醒”の魔法かなあ」

「覚醒？」

「うん。感覚を順番にをシャットアウトする代わりに、反応速度や身体能力を高めるの。リュウの魔力だったら使えても不思議じゃないけど……」

反応や能力を高める、かあ。確かに、あの時はそんな感じだったな。

「けど、普段はあまり使わない方がいいよ」
「どうして？」
「覚醒は身体にかなり負担がかかるんだって」

そうか、覚醒は身体のリミッターを外すようなものなのかな。よく火事場の馬鹿力なんて言われるものがあるけど、それを敢えて起こすようなものか。

火事場の馬鹿力というと眉唾に思えるかもしれないが、例えばマンションの上層階から落下した我が子を救うために猛ダッシュした主婦の話なんてものを聞いたことがある。後で計算してみると、１００メートルを１０秒そこらで駆け抜けていたのだとか。その話がどこまで真実かってのは分からないが、俺は結構この説を信じていたのだ。

しかし、使わないってもなあ……あの時は勝手に発動してしまったわけだし。どうしろってんだ。

四階に上がると、一種独特な雰囲気が漂っていた。武器が醸し出す匂いとでもいうか、神経にふれるようなピリピリとした空気を感じる。

フロアにいる面々も他の階層とは少々様相を異にしていた。三階までにいたのはごくごく平凡な青年や少女、主婦といった人々だったが、このフロアにいるのは筋肉質の見るからに屈強な男や、目深にフードを被って表情の伺えないローブ姿の男などだ。女性比率はみるからに低い……というか、少なくともこの場にはいないようだ。

何というか、古本屋でアダルトコーナーののれんをくぐったときに感じるような異質な空気がたちこめている。

……いや、そんなことを知ってるのはあくまで興味先行ってことで。

一方の壁には長剣や細身の剣、短剣、フレイルなどがかけられ、槍がたくさん立てかけられている。反対側には革や金属の鎧や甲冑などが陳列されている。その様子がなんとなく不気味で、背筋をぞわぞわさせる。

「武器、か……」

何とはなしに呟く。武器。人を殺すための道具。

エストに言ったように、上手く使えば人を守る道具にもなるのかもしれない。しかし、およそ自分に使いこなせる気はしなかった。まだあらゆる意味で未熟なのかなあ。

「これなんか、どう？」

言って、エストが杖を差し出してきた。薄い青色をした金属製の柄を持ち、先端には赤い拳大の宝石が取り付けられ、それを囲むように金色の月形の装飾が施されている。柄の長さは１メートル５０センチってところだろうか。

「杖？」

よくファンタジーなんかだと、魔法使いが手にしている得物だな。だけど柄の部分は金属でできているし、相手が剣だとしても立ち回ったりすることもできそうだ。

……技量があればの話だが。

「魔法を使うなら、ね。集中をしやすくして、魔力自体も強化する能力があるの。魔導士の必需品かな」

「ふうん、魔導士の必需品か」

……あれ？

「そんな便利な物があるんだったら、さっき使わせてくれても良かったんじゃ」

集中しやすくするのなら、魔法を使うのも多分容易になったんじゃないだろうか。初学者なんだから、それくらいあっても罰は当たらないと思うなあ。

「基礎が大切、だからね。魔法を実際に行使する分には杖の力を借りてもいいけど、練習する分には何も無い方が魔脈の流れなんかを意識できていいのよ」

「なるほど、ね」

考えてるんだなあ。そう言えば魔術指南の講師をしたとも言っていたし、ある意味プロか、プロなのか。

「もうひとつ、”魔導士”って言ったけど、魔法が当たり前なら誰もが魔導士なんじゃないの？」

「確かにほとんどの人が魔法を使えるけど、戦術レベルで魔法を使える人ってそう多くは無いわ。だから、そういう人のことを”魔導士”って呼ぶの。ギルドが免状を発行してて、各属性α（アルファ）、β（ベータ）、γ（ガンマ）、Δ（デルタ）、Σ（シグマ）、Ω（オメガ）にランク分けされるの。概ね、βランク以上の能力を持

つ人は少なくて、そこら辺が”魔導士”の境界線ね」
「へえ。エストは？」
「あたし？　γ～Δランクだよ」

どの程度凄いのかはちょっと分からないが、βランクで少数派というのなら、δランクというのは相当に凄いんだろう。きっと。

「けどΔランクって言っても、戦術部分なんかは評価されてないからね。あたしはそういうの得意だし、戦いになったらΣランクの魔導士にだって引けは取らない……って、なにやついてんのよ」
「あはは、ごめん」

負けず嫌いなんだなあ。

「全く、もう……」

両手を腰に当て、むくれたような表情を見せる。

「何か買ってく？」
「いや、少なくとも今の俺には必要なさそうだ。杖は……そのうち考えるかな」
「ま、それもそうかもね。それじゃ、帰ろっか。――ひっ！」

エストが振り向きかけて、露骨に表情を歪ませた。見ると、エストの背後には筋肉質のスキンヘッドの男が一人立っていた。薄手のシャツに厚手のズボンといった、外国の海兵隊員みたいな格好だ。そして――あろうことか、エストのお尻を鷲掴みにしているのだ。

さらに遠巻きに、三人の柄の悪そうな男が一歩ほどの距離でにやつきながらこちらの方を伺っている。

「おっと、わりいわりい。こんなところに似つかわしくない可愛らしい姿を見たら、つい手が伸びちまってなあ。悪気は無いんだ、許してやってくれや。へへっ」

言いながら下卑た笑みを浮かべる。

「アニキぃー、いつからロリコンになったんすか？」

取り巻きの一人が言う。

「――にすんのよッ！」

エストが振り向きざま、大きく右手を振り上げる。それを男の顔面に叩きつけようとして、しかし相手の左手に手首を掴まれる。

「おうおう、剛毅な姉ちゃんだなあ。見かけによらず気が強いってか？　そういうの、嫌いじゃねえぜ」

言って、左手がエストの胸元へと伸びる。俺は男が何をしようとしているのかを察し、その左手をつかんだ。

俺の細腕には少々重い手応えだったが、男の左手は空中で制止される。

「やめろ」

毅然と言い放つ。怖くないといえば嘘になるが、きっとエストはもっと怖い思いをしているだろうと思うと、不思議と恐怖は引っ込んだ。

「あんだあ？　お前、この姉ちゃんのツレか？」
「だったら何だ」
「ふーん……」

男は鼻を鳴らすと、左腕を大きく払って俺の身体を薙いだ。俺は勢い吹っ飛び、陳列されていた防具の列へと突っ込んだ。ガラランガラランという金属音がして、やがて落下してきたヘルメットが俺の頭部をガインと直撃した。主から分断されたソレがころころと転がる。

「おっと、わりいわりい。野郎には加減ができなくってよぉ」

取り巻きがゲラゲラと笑う。

っつ～……

冗談抜きに、痛い。防壁の魔法とやらは自動発動してくれないのか、俺は生の衝撃に焼けるような痛みを感じながら、それでも地面に手をついて立ち上がる。

男の左手が、再びエストの胸元へと伸びる。

……この野郎。

エストの危機と、自分に向けられた害意。それらが、次に取るべき行動の指針を決定づけていた。

刹那、世界から色が消える。

俺は男の方へと一歩踏み出しながら、右手を大きく引いた。そして自分の身体を竹のようにしならせて、右手を勢いよく突き出す。

拳は一瞬にして、男の顔面へとクリーンヒットした。

世界に色が戻ると、男は勢いよく顔面から吹っ飛んでいった。距離にして数メートル飛ばされると、仰向けに倒れる。

「リュウ！」

エストが俺のそばに寄る。

「てめえ……」

男が口元の血――多分、口の中を切ったのだろう――をぬぐいながら、殺意の視線をこちらに向けてきた。

そして立ち上がると、ポケットからナイフを抜いた。刃渡りは20センチといったところだろうか、武器と言うには少々小振りなそれでも、明確に向けられた”殺意”に俺の背筋は凍りかけた。

「……抜いたわね」

しかしそれよりも、普段より1オクターブ低いエストの声は更なる恐怖をたたえていた。何というか、触れてはならない領域とでも言えばいいのだろうか。

エストが両手を広げると、その手のひらからバチバチと青白い火花が飛ぶ。それは両手の平でスパークしたかと思うと、やがてエストの目の前で虹のようなブリッジを形成する。

雷の魔法か。

「――っ！」

男の表情がたちまちにして変わる。

「兄貴、やばいよ、この女、”魔導士”だ！」

取り巻きの一人が言う。

しばしにらみ合い、やがて男が舌打ちをして背を向ける。取り巻きの男たちはちらちらとこちらを伺いながら、兄貴と呼ばれた男の後をついてフロアから出て行く。

それを見届けて、エストも両手の平から発していた魔法の雷を収める。

あたりのざわめきが、にわかに自分の世界へと割り込んでくる。

「……気持ち悪い」

ぽつり、とエストが呟いた。

「え？」

「気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い！　何なのよあの下衆野郎は！」

両腕をぷるぷると振るわせ、両目に涙を溜めながらそう吐き捨てる。

「よりによってあんな男に……うう、思い出しただけでも吐き気と怖気と寒気がこみ上げるッ！」
「エスト……」
「リュウ」
「……何だ？」
「こんどあの男に会ったら、もいどいて」
「も、もぐって！？」

冗談のような台詞を大真面目に言ってくる。

何をだよ何を、と心の中で呟いて、もぐといったらやっぱりアレのことなんだろうなあ、と自分の中で答が出てしまうあたり微妙な気持ちだ。

そういえば、昔の中国には官刑なんてものがあったらしい。ひょっとしてこの世界にも似たような物があって、エストはそれを意識して、とか……想像して、俺はがくがくぶるぶるしてしまう。や、やだぞ俺は官刑なんて。

セクシャルハラスメント的行為には気をつけよう。うん。するつもりなんて毛頭ないけど、事故ってこともあるからな。フィーに出会った時みたいに。

「それにしても、魔法があるんだったら最初から吹っ飛ばしてれば良かったんじゃ……」
「……かったのよ」
「え？」

聞き返そうとすると、

「こ・わ・か・っ・た・の！」

と「文句あるか」といった風な様相でじろりと睨み上げてきた。

俺はそんな仕草を可愛らしく思うも、感じた恐怖と屈辱はきっと男である自分には想像つかないようなものなのだろうと思い直し、自分を恥じる。

「でも……ありがと」

エストがくるり、と背を向け、顔だけをこちらに向けて言う。

「助けに入ってくれたの、嬉しかったよ」

そんな評価を与えてくれるが、自分自身の評価はちょっと違っていた。

あのとき、俺は感情にまかせて拳をたたき込んでしまった。それがあの男に刃物を抜かせたのであって、一歩間違えれば状況はより悪い方向へ転がっていたのかも知れないからだ。

幸いにして、相手がエストの魔法を脅威に思ってくれたから事なきを得た。しかしもし、相手が同等以上の力を持っていたとしたら……？

血で血を洗う骨肉の争いは、案外こんなところに縮図を持っているのかもしれない。自分の行動には責任を持てるようにならなければ、と感じた昼下がりだった。

第１６話：湯煙の中で

入浴の習慣というのは、いま俺が考えているほど昔は一般的では無かったらしい。ことに中世ヨーロッパあたりにおいては、だ。

そんなことを端的に表現しているのが、香水の発達であるらしい。彼らは肉が主食であったために体臭がキツかったということも理由にはあるらしいのだが、一方では入浴習慣がなかったことによる体臭を誤魔化すためにも香水は重要な役割を持っていたらしい。

まあ、中世ヨーロッパの信じられない悪臭文化といえばトイレの話もあるのだが……。これはさすがに耳を疑った。ガルディ・ルー！

入浴習慣のある文化圏でも、各家庭に浴槽が普及したのは最近のことだって聞く。江戸時代には、火事の恐れがあるからと家庭で浴槽を焚くのは禁止されていたらしい。中世ヨーロッパは……分からない。が、文化を紐解いたときに公衆浴場の話しか出てこないってことから、家庭に浴槽が普及していたとは考えにくい。

要するに、だ。

俺は昨日も一昨日も風呂に入ってないし――強制的に水浴びはさせられたが――運動してきたのだからして、ひとっ風呂浴びて汚れを落としたいと思うのは正常な心理だと思うんだ。

そして、浴場というのはその性格からして湯が張られるのは日が沈んでからだ。こんな日が高いうちから湯を張っても、エネルギーの無駄遣いでしかないわけだ。

しかし、エネルギーを無駄遣いしまくっても痛くもかゆくもなければ咎められることもない人たちがいる。

つまりは特権階級である王族だ。

ここ王宮には、一つだけ常設の浴場がある。すなわち――王族専用浴場。

あろうことか、俺はいまエストから入浴のお誘いを受けている。生理的に断る理由も無ければ、お誘いを受ける必然性もある。

そう、決して、断じて、天地神明に誓って、やましい理由からではないのだ。

「けど、そんな風呂に俺が入っちゃって大丈夫なのか？」

いま、俺たちは王宮一階の通路を歩いている。他には洗濯物を抱えた女性たちが忙しそうに歩き回っている。

「大丈夫大丈夫、もともとそんなに厳密なものでもないしね。お客さんに使ってもらうこともちょくちょくあるくらいだから」

「ふうん……」

「それに、この時間帯からお風呂に入る人なんていないし、他に誰もいないから気にすることないよ」

そうなのか、残念。

……って、違う違う断じて違う！

「けど、衛兵とかに呼び止められて『貴様何をしているかーッ！』

なんて、ならない？」
「衛兵なんていないから大丈夫」
「でも、それって不用心じゃないか？」
「着いたわ。ここよ」

俺の質問には答えず、エストが立ち止まり、壁に向き直る。

「ここ、って……何も無いんじゃ」

見ると、壁には扉の枠を示すような溝はあるものの、どう見たって動かせたりできそうにはない。取っ手もない。そして、その脇にはブローチのようにあしらわれた壁飾りがあり、中央には紅いルビーのような石がはめ込まれている。

「ま、見てなさいって」

と、得意そうな笑みを浮かべるエスト。

壁飾りに向かって、左手の甲をかざす。その薬指には緑色の貴石のはめ込まれた指輪が装着されていた。エメラルド、かな？

左手の薬指！？
……って、文化も何も違うんだったっけ。ああびっくりした。まさかエストに婚約者でもいるのかと思ってしまった。

「エントラッセ」

そう唱えると、指輪から一条の紅い光が伸びて壁飾りに吸い込まれる。
すると、壁の溝の内側――つまり扉に相当する部分が淡く光り、

その姿を消した。
通路が姿を現したのだ。
「……なるほど、だから衛兵も何も要らないってわけね」
衛兵なんかいなくても、鍵を持ってない人間がどうこうすることはできないわけか。
「そういうこと」
俺はエストの後をついていく。中に入ったところで、エストは壁の内側にあしらわれた同様の壁飾りに手の甲を向け、
「クロセット」
と唱える。そして、通路が壁に塞がれる。
「もし、壁のところに人がいるのに塞ごうとしたらどうなるんだ？」
素朴な疑問だったが、つい”いしのなかにいる！”を想像してしまって聞かずにはいられなかった。
「センサーが働いてて、人がいたら閉まらないようになってるの。まあ閉めちゃっても、ハマるだけで大事には至らないみたいだけどね」
「へえ」
どうやら、壁と融合だとかそんな恐ろしい事態には至らないらしい。グロい想像をして、俺は頭を振った。

通路を歩いていくと、湯煙が漂ってきた。心地よい蒸気の香りが視界を満たす。あぁ、この匂い、ほっとするなぁ。

そして、脱衣場に出た。脱衣場は胸上ほどの高さの壁が中央にそびえ、そこから石の棚が突き出している格好だ。多分、ここに脱いだ服を置けってことなんだろう。そして、棚にはハンドタオルとバスタオルが等間隔に置いてある。

俺がもじもじしていると、エストがついたての向こう側で大胆に服を脱ぎはじめる。しかし、肝心な部分はついたてに遮られて見えなかった。残念なような、ほっとしたような。

エストが気楽に風呂に誘ったのも、部屋のこういう構造を知ってたからなんだろうな。

さらに、棚には他の誰の衣服も無いことを確認して、俺はほっと一安心する。王族が何人いるのか知らないけど、知らない人に会うのは気まずい。ましてこんな場所では。

俺も意を決し、衣服を脱ぎ始める。見えてないんだ。うん、気にするな。

手早く衣服を脱いで一糸まとわぬ姿になると、そそくさと腰の部分にバスタオルを巻いて肝心な部分を隠す。バスタオルを使ったのは、ハンドタオルだと心許ないという情けない理由だったのだが、バスタオルは女性の身体を覆い隠すのに十分なだけの大きさが取られているようで、腰から下を隠すには少々大きすぎた。

バスタオルが大きいのって、隠して入浴することを前提として作

られてるからかな？
裸で入浴する習慣さえ、一般的とは言い切れないって聞くしな。
一歩先に浴場に向かったエストもまた、身体にバスタオルを巻き付けて隠している。
こうなってしまうと、水着でいるのと大差ないな。よし、割り切っちゃえ。
ガラス戸を開けて中に入ると、ツルツルに磨かれた多分大理石だろう床面に、流線型の波打つような縁を持った浴槽が床下のレベルにしつらえられている。床面をくりぬいてお湯を満たしてあるような格好だ。
広さはというと、ちょうど学校の教室くらいだろうか。広いと言えば広いし、王族風呂にしちゃ狭いって言えるかもしれない。が、贅沢な作りであることに変わりはない。
俺の知る浴場との違いはというと、蛇口がないことだ。変わりに、お湯が絶え間なく流されている打ち湯みたいなものがある。
俺はエストにならい、打ち湯で一通りの汗を流すと湯船に浸かった。お湯の温度は、ちょっと温（ぬる）い程度だ。４０度弱くらいだろうか。
そう言えば、日本の風呂って”熱い”部類に入るんだって聞いたことがあるな。
「うーん、極楽極楽」
エストが大きく伸びをして言った。

「やっぱり、運動した後のお風呂っていいよねぇ」
「ああ、そうだな。……いつつ」
俺はピリっと電気が走るような痛みを覚え、右腕を触った。両足の筋肉も痛む。
「さっきも”覚醒”使ったでしょ」
さっきというのは、例の痴漢野郎のことなんだろう。
「ああ。っても、使おうとして使ったわけじゃないんだけどな。何ていうか、集中すると勝手に発動してしまうっていうか」
「そうかもね。魔法の性質上、発動しっぱなしにもできなければ、起動ワードをつけるような悠長なこともできないしね」
「何とも、不便だなあ」
「ふふ。リュウならそのうちコントロールできるようになるよ」
「そんなもんかねえ」
何とも、魔法という物に不慣れであるからして実感が伴わなかった。
「けどまあ、いきなり違う世界にぶっ飛ばされたにしては、生活するに案外困らないもんなんだなあ……」
呑気に風呂なんかに入っていると、ふと思ってしまう。
ただ、それは”運が良かった”ということに他ならない。運良くフィーと出会えたことが、奇しくも俺に生活の基盤を与えてくれたのであって、出会った人によってはどう転がっていたかは定かでは

ない。

もし、奴隷売りだとか闘奴の調教師みたいなものに出会っていたらと思うと、ぞっとする。そんなものがいるのかどうかは知らないが。そう考えると……奈美や理子は無事でいるだろうか。謙也はどうでもいいけど。むしろ剣闘士でもやってろって感じだ。

しかし……運が良かったと考えるのは、何となくフィーやエストを”利用している”ようで嫌だった。彼女らが優しいからこそ、それを裏切るような邪な気持ちを抱いてしまうことに嫌悪感を覚えてしまう。

だから、自分で食い扶持を稼いで、生きていけるということを示したくもあった。幸いにして、お金を稼ぐ方法はエストに教えてもらった。あとは実行に移せばいいだけだ。魔力という武器もあるようだし、いざとなれば知恵もある。何とかなるだろう。

そんなことを考えてしまうのは、あるいは心に幾ばくかの余裕ができてきたということなんだろうか。う～ん……

考えながら、心地よい空間に身をゆだねる。エストもいまは快楽を堪能することに専念しているのか、特に何かを喋ろうとはしない。

沈黙の中、打ち湯の音だけが規則的に鳴り響く。気まずさは無い。

はぁ、いい湯だ。欲を言うなら、もうちょっと熱い方が好みではあるけど。

のんびりとくつろぐこと、数分。

ガチャン、と入り口の方で音がした。

その音が誰かの来訪を告げるものだと気付くのに、時間は要しなかった。

湯煙の向こう側から現れた姿は、良く見知った顔だった。熱気のせいか、その表情はやや上気しているように見える。

「やっぱり、リュウでしたか」

フィーも身体にバスタオルを巻いて、右手は胸元でキュッと握りしめている。それがガードの堅さを示しているかのようだった。

ちゃぽん、と湯船の中に入ってくる。

「姉様、どうしたの？　こんな時間に」

「公務が一段落ついたから、ね。仮眠を取る前に身を清めておこうと思って」

「仮眠って……まさか、昨日帰ってきてからずっと公務をやってたのか？」

照れくさそうに微笑む。俺が惰眠を貪って魔法でばちばちどっかんやってる間に、フィーは頑張って仕事をしていたわけか。何か自分がすっげぇ情けなくなってくる。いいのか、俺。

そしてエストも似たような感情を抱いているらしく、ばつが悪そうな表情を浮かべている。

「三日前の大地震で、事務書類がたまってるんです。でもお父様たちは現地視察に出ているから、私が代わりに処理してるんです」

代わりに、ね。言うほどそれが軽いものではないことは俺でも分かる。それだけの信頼を置かれ、仕事を任されているというのは、フィーの能力と人徳がなせるわざなのだろう。

「何か手伝えることってないか？」

何とはなしに罪悪感が口をついて出る。無駄だろうと分かっていても、訊ねずにはいられない。

「ありがとうございます。でも、本当に一段落付いたので、もう大丈夫です」

言って柔和に微笑む。

そうは言うが、さっき”仮眠”と言ったのを聞き逃してはいない。つまり、仮眠を取ったらまた公務につかなきゃならないってことなんだろう。

しかし”大丈夫”って言ってるのを、問いつめるわけにもいかない。無力だなあ。何かしてやれることはないもんだろうか。

「なあ、フィー」

「何です？」

「昨日は、ごめんな。俺が悪かった」

「いえ。……本音を言えば、嬉しかったんです。でも、あの状況だとリュウをかばうことができなかったんです。余計、立場を悪くしてしまうから。本当に……ごめんなさい」

言って、申し訳なさそうに目を伏せる。

そう言われて、俺は自分の推測が間違っていなかったことに安堵した。そう思ってはいても、本人の口から聞くまではやっぱり確証を持てないわけで。フィーがどう思っているのか、不安があった。

「昔から、ああいう理不尽なのって許せない性格なんだ。周りからは、良くガキだなあなんて言われたりするけど、さ。俺も、大人にならなきゃいけないのかな」

俺は苦笑する。

「そんなことありませんよ。素敵だと思います。私も、リュウみたいに振る舞えたらなあって思うことはあります」

微笑んで言う。

フィーは立場柄、自分を押し殺さなきゃならないことも多いだろうしな。

けどこういうもめ事を起こす度に、もっとうまいやり方があったんじゃないだろうか、と思う。もめ事を起こさずに、自分の意思を伝えられて、丸く収める方法が。多分、それが大人になるっていうことなんだと思う。

もっと、大人になりたい。

物理的にじゃなく、精神的に、だ。

「……なーんかいい雰囲気ねー、お二人さん」

ぶっ。

おもむろに何を言い出しますか。

「そ、そんなんじゃ……」

と、手を振ってさせて慌てるのはフィー。

「そんなんじゃ、何？」

「……」

「違う、とか？」

エストの誘導に、フィーは小さく頷いた。頷いたと言うべきか、頷かされたというべきか。

これは……なんだ。まさか、脈があったりするのか？

……ンなわけねえか。フィーのことだから、拒否するのも苦手とかそんな感じなんだろう。

「ふーん」

エストが両手を組みあわせて腕を前に伸ばす。ぱちゃん、としぶきが飛ぶ。そして、俺のそばによって腕を絡ませてくる。

「じゃ、あたしがもらっちゃってもいいんだよね？」

「んなっ！」

「！」

俺はエストの突然の発言に、思わず固まってしまう。そしてフィ

ーも何故か、驚いたような表情を浮かべて硬直していた。

「本気……なの？」

軽い口調で言うエストとは対照的に、フィーが神妙な面持ちで問う。

「うーん……半分冗談で、半分本気、かな」

言って微笑む。

「いいな、って思ってるのは事実だよ。でも、まだ好いた惚れたには早すぎるかなあ、っていう感じ」

ストレートに「好きだ」って言われるよりも、遥かに生々しくて説得力のある台詞に俺は思わずどきりとしてしまう。まあ、確かにたった半日の間だというのに色々あったわけだけど、まさか自分がそんな風に思われていようとは夢にも思っていなかったわけで。

「けど……もし姉様が本気なら、あたしは本気になる前に諦めるから」

うつむき加減に、言う。そう告げる表情は、どこか寂しそうだった。

「ちょっとのぼせたみたい。テラスで涼んでくるね」

憂いを帯びた表情を打ち消すように、微笑んで立ち上がると俺たちに背を向けた。

俺はちらりとフィーの方を見やる。フィーはどこか物憂げな表情を浮かべていた。

「私は……心配なんです」

ぽつり、と呟く。

「昔から、あの子は私に対して遠慮することが多いんです。人はそんな性格を『さばさばしてる』って評価しますけど……私は、きっと無理してるんだろうと思うんです。考えすぎ、でしょうか……？」

「遠慮、か……」

半日の付き合いで、確かにそんな雰囲気というのは感じていた。良く言えば分をわきまえてるとも取れるわけだが、それも度を過ぎればきっと歪みになって鬱積するわけで。

「なあ。フィーってエストと喧嘩したことってあるか？」

「喧嘩、ですか？　ええと……覚えている限りでは、無いです」

「だよなぁ……」

二人が喧嘩してる姿なんて想像も付かない。

なんでこんなことを聞いたのかというと、喧嘩でもする間柄ならエストの鬱積も晴れる余地があるんじゃないかと思ったからだ。俺は、適度な喧嘩は潤滑油だと考えている。

まあ、考えすぎなのかもしれない。心の底からあっけらかんとした性格であるからして、全く気にしていないということも考えられる。考えられる、わけだが……

「まあ、心に止めておく程度しか、できないかなぁ……」

何とも、微妙なもどかしさだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3028i/

黎明のフェアリーゼ

2010年10月10日17時14分発行